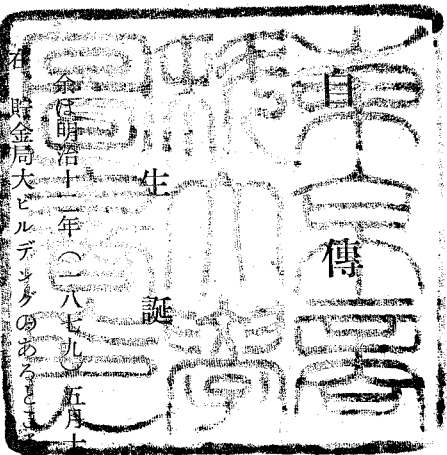


自
傳



余は明治十一年（一八七九）五月十二日東京市麻布區飯倉町六丁目十四番地徳川邸内（現
 在 時金局大ビルヂングのあるところ）に生れた。實は三月十九日に生れたのであるが、父

が和歌山へ出張中で名をつけるものがなかつた爲に届出がおくれたといふことである。父は
 上田章通稱專太郎といひ紀州家の家扶を勤めてゐたが、當時西南戦役直後で和歌山へ行く用
 事が多かつたやうである。華族の家扶といへばつまり三太夫でつまらぬ仕事と思はれるが、
 明治維新の後は天下の形勢も全く安定してゐなかつたこと故、大藩の家職には相當の人物が
 當らねばならなかつた。父の如きは紀州藩で有数の人物であり、當時の日本では何處へ出し

ても恥しくない人物であつたと思ふ。余が幼時伯母から聞いたところでは父は廢藩の後に明治政府へ出仕することも出来たのに自ら望んで主家の家扶となつた故に同藩の人々から忠義の人として尊敬されたといふことである。しかし父は余が生れてから僅か二年の後十四年八月に死去したから、余は父の佛を憶えてゐない。父の寫眞でもあつたら子供の記憶がつづいたかも知れないが、それが全くないのである。母は良子（又はつな子）といひ同藩士松尾三代太郎の妹である。母は明治二十九年余の十八歳の時まで生存したから勿論よく憶えてゐる。余の生れたとき、父は四十七歳、母は二十七歳で、兩者の年齢はかなり隔たつてゐるが、これは父が修學のため、又國事に奔走したため婚期をおくらせたのであらう。母は多分廢藩置縣の後二十歳位で父に嫁し、明治六年兄敬太郎を生み、次いで一人の女の子を生み、それから余を生んだ。但し女の子は生後間もなく死亡したから、兄と余との二人が母の手に育てられることとなつた。二十九歳の若後家が九歳と三歳の子供を一手に育てなければならぬ運命に逢つたのは氣の毒なことといはねばならぬ。後に母が精神病に罹つたのも無理のないことと思ふ。當時父方の親類は殆んど死に絶えて、ただ一人残つたものも財政的に全く没落して行衛が知れなくなつてゐた。母方では母の母が寡婦であつたので、我々同居して世話を

してくれた。この祖母は明治二十年六十歳で死ぬまで宅にゐたので、余のためには好いお婆様であつた。母の兄弟は兄の三代太郎と姉のかねとであつたので、この二人は母の相談相手になつたのであるが、又反對に母に心配をかけたことも少くなかつた。兎に角余が幼少の時から壯年時代まで親類として親しんだのはこの伯父伯母だけであつた。彼等は母と共に「お前のお父様はえらい人であつたからお前もえらくならなければならぬ」といつて余を勵ましてくれたのである。

父の家系と人物

父も母の兄も紀州藩士であつたけれどもこの二人の生れたのは江戸であるのみならず、家系も紀州には縁のないものであつた。父の家は江戸の町人であつた。母の家は同じく江戸の醫者であつた。父の生立は父の親友三浦安氏（元老院議員、東京府知事になつた人）の撰んだ墓碑——それは現に青山の墓所に建つてゐる——に記されてゐるが、家系については明細ではない。父は赤坂一ツ木で商業を営んでゐた直吉といふ人の一人息子に生れたが、その人

——即ち余の祖父——が學問を好み父を學者にするつもりで幼時から漢學の大家に託した。父も學問に没頭し、安井息軒先生の塾で頭角を現はし、又昌平黌にも入った。それで結局儒學を以つて紀州侯に仕へ士分になつたのである。父の生家のことはよく分らないけれども、芝伊皿子の薬王寺に現存する上田家の墓石は立派なものであるから相當財産のある町家であつたことは疑ない。この墓石は二箇同じ大きさのものがあつて、臺石に④の紋を刻み上田氏、松屋の文字がある。裏面に文政八年五月上田氏七代目、松屋元祖、建具師上田源兵衛としてある。正面に刻まれた戒名は男女併せて十七あり何れも院號がついてゐる。町人の戒名で院號をつけるのは特別の取扱であらう。日付は延寶六年——四代將軍の時代——から慶應元年であるからその間約二百年間家業がつづいたことがわかる。つまり父はこの裕福な町家に生れながら家を出て士族になつてしまつたのである。如何なる手續によつて町人の子が士族になつたものかわからないが、兎に角上田といふ舊姓のまま士族になつたことは澁澤子爵等の場合と同様である。堀内信氏著南紀徳川史に據れば明治二年「御國政大改革被仰出門閥不拘人才を登用」することになつた際父は藩の公用局副知事に任ぜられたのであるが、著者の言として「上田專太郎は御出入商人の男にて近來漢學を以つて學問所に召出され追々拔擢を

蒙りたるものなり」と記されてゐる。而して家の跡目はどうなつたのか、これも今明らかにすることは出来ないが、察するところ舊幕時代に武家を相手の商賈をして苦勞なく過して來た老舗が維新の變革に逢つて爲すところを知らず忽ち没落してしまつたものであらう。さて父が如何なる人物であつたかといふに余の想像では學問に秀でてゐたとか才氣があつたとかいふのではなく、さればとて膽略の人であつたとも思はれない。寧ろ眞摯な正直な人として信頼されたのであらう。著書の如きも僅に南龍公年譜、香嚴公遺事、南紀名臣言行録といつたやうなものに止り學問的には大なる價值ありといへない。しかし廉恥を重んじ節義を貴ぶといふことを躬行實踐して諸生を導いた漢學者風の教育家であつて、その爲に多くの青年に善き感化を與へたことは確實である。母の兄なる松尾三代太郎は父を非常に尊敬してゐたが、色々の事業に失敗して全く零落し、老年になつて余の家に寄食するやうになつても、父の墓碑の石刷の一幅だけ身を離さずに有つてゐた。その幅が今余の手許に残つてゐるのである。又日露戰爭前に獨逸大使館付武官で、當時の海軍に名聲のあつた津田三郎大佐は自分の子に父の名を取つて章一と名付けた程父の人物に傾倒してゐた。余が高等商業學校專攻部を卒業する前に津田氏が余を外國へ出さうとして正金銀行ロンドン支店長中井芳楠——この人も父

の知人——に推薦してくれたのも父の恩に報ゆるためであつた。竹橋騷動の發頭人で明治の怪傑といはれた岡本柳之助氏、政友會の智囊となつた岡崎邦輔氏等も父を激賞してゐた。その他紀州出身の名士にして父を尊敬した人は非常に多く、何れも彼を上田先生と呼んでゐたらしい。だから余が幼年時代に「お父様のやうにえらくなれ」といつて激勵してくれたのは伯母や母ばかりでなくて、その以外にも多數あつたのである。又父の死後二十年を経て余が紀州出身の先輩に會ふやうになつた時上田章の次男だといふだけで親しみをもたれる状態であつた。藩主徳川茂承侯も父を非常に信頼され、父のいふことはよく聽かれたさうである。父の死んだ後に遺族たる我々は特に邸内の長屋に引つぎ住居することを許され、若干の下賜金をそのまま屋敷に預つてその利子で生活する道を立てられ且兄敬太郎のために修學の費用を支出されることになつた。兄はその金で慶應義塾を卒業し、それから徳川家の家職に採用されたのであるが、余も無事に高等教育を受けることが出来た。下賜の預金は母の病氣などで元金まで使つたけれど、余が高商專攻部を終るまでの學費はその内から出たのである。それから徳川頼倫侯も父の忠誠を感じて居られたので、余が明治三十九年最初の留學に行く時特に余を呼んで千八百圓を補助された。余はその時父の餘慶の甚大なることを深く感じる

と共に頼倫侯に對して感謝の念を抱くやうになつたのである。かくの如く父が多くの人々の人望を集めたのは彼が學者として又は思想家として偉大なりしたためではなくして、全くその至誠廉直な人格の然らしむるところであつたと思ふのである。

徳川邸内の生活

前記の如く父の死後遺族たる余等は徳川邸内の長屋に住居することを許されたので、余はここで一種特別の雰圍氣の裡に小學時代、中學時代を暮すことになつた。徳川邸は飯倉の高臺にあつて一萬坪の廣い土地を土塀石垣で圍込んだものであつた。この邸は紀州家がその本邸たる今の赤坂離宮を朝廷へ差上げた後に上杉家から買つたのだといふことである。一萬坪の屋敷の西側半分は侯爵一家の住居に用ひられ、これを邸内の者は御殿と呼んでゐた。東側の半分は藩祖南龍公を祭つた神社があり、又厩舎があつたが、大部分は家職の住居たる二十戸程の長屋で占められてゐた。その他に竹藪や杉林や梅林もあつた。御殿以外の場所は邸内のものが自由に歩きまはることを許されたので、これは特に子供等には都合がよかつたと思

ふ。余の身體には今でも右の腰に切傷の跡が残つてゐるが、これは胡桃の木へ登つて迂り落ちたとき竹藪の切株がぶつつかつたために出来たのである。南龍神社の内には數百年を経た銀杏と樅ときはだの大木があつて、銀杏には澤山實がなつたから、秋になると商人が来てその實をたたき落して買つて行つた。その後には落ちたのを我々が拾つたのである。長屋は東西に長く建てられ、南北二列になつて向ひあつてゐた。一戸毎に表に門があり、裏に庭と小さい畑がついてゐた。家職には家令、家扶、家従、家丁、小使、馬丁の階級があるのでその階級により間口の廣さが四五間から三間位の間で定められてゐたが、長屋そのものは同じであつた。ただ家令の齋藤政右衛門氏——紀州藩に聲望のあつた人で父が召抱へられたのもこの人の推挽があつたからだといふ——は邸外に自分の屋敷をもつてゐた。かくして邸内のものは恰も一村の如く交際し、外部に對して一城郭のやうになつてゐた。子供等も邸内のものには特に親しくした。年中行事として正月元旦は子供等も禮服を着けて家々へ年賀に廻り家毎に何か菓子を與へられる習慣があつた。十二三歳位から上のものは元日には御殿へ出て年賀客の接待に當るので、菓子を貰ひに歩きはしないが、家々でかるた會を催して互に招きあふので、その時壽司の御馳走が出た。正月の二日から十日頃まで毎夜かるた會で賑はつたのであ

る。それから春秋には南龍神社の大祭があつて、その日は侯爵一家の方々が盛裝して參詣される。それを邸内の女達は喜んで拜觀した。御主人は茂承侯、その奥方は伏見宮家から來られたさうだが余の記憶にはない。嗣子は頼倫侯、この方は田安家から幼少の時養子に來られたので、明治二十三年頃丁年に達した時に家附のお姫様久子様と結婚された。それから茂承侯の息女は久子様の外に二人あつたので、一人は宇和島の伊達侯爵に嫁し一人は西條の松平子爵に嫁された。しかし余の幼時の記憶では三人の美しい姫様が相前後して南龍神社に參詣されたことが最もはつきりとしてゐる。この南龍祭の日には舊藩士達が多數參拜に來てそれから所謂御殿で赤飯の饗應を受ける。舊藩士の陸軍士官が正裝して乗馬で來るのは盛觀だと思つた。しかし中には酒に酔つて議論し、終に亂暴するやうなものもあつた。邸内の子供達で十歳から上の男子は接待に呼出されたので、余も出て父の友人等から名を問はれたことがある。舊藩士の饗應される場所は表手の西洋館であるが、その建物が面白い和洋折衷のものであつた。

邸内の子供や青年が打揃つて御殿へ行く機會としては正月と南龍祭の外に、時々奥で講談を聽かれるときに陪席したり、又頼倫侯の乗馬の稽古の御相手に出たりした。余は年齢が足

らなかつたので乗馬には出なかつたが、打球を催されたとき他の子供と共に拜見に行つたことがある。それから余は上田章の遺子であるために特に單獨で若様即ち頼倫侯に召されたことがあつた。御殿は表手と奥とに區別せられ、長い疊廊下のはづれに花鳥の畫をかけた杉戸があつて、それが兩者の境となつてゐた。結婚前の若様の御室は奥の入口に近いところにあつて、そこには二人の書生が交代で勤めた外に、田安家から附いて来たお保さんといふ老女が世話をしてゐたのであるが、お保さんはその下に二三人の女中を使つてゐた。殿様やお姫様の部屋にもそれ／＼お附の老女があつてその下に幾人かの女中がゐるたやうである。だから御殿に働く女中の數は恐らく三十人位もあつたらう。老女は何れも品のよいしつかりした人で、男の家職と對等の地位をもつてゐた。

邸内の少年青年は皆遊び相手であつたが、或時代に十人位のものが交學會といふ團體を作つて、毎月各自の作つた文章を集めて一綴りとして回覽し、又時にわらじばきで遠足をしたことがあつた。しかしその連中の内成年の後まで親交を續けたものは一人もなかつた。或者は天折したが、後まで生残つたものも境遇が異なるために疎遠になつたのである。正則中學の上級になつた頃には邸内のものよりも學校の友人と親しくなり、その方に長く友人としての

交際するものが残つてゐるのである。邸内のものは大抵中學までは行つたけれどもその上の學校に入り得るやうなものは一、二を數ふるのみであつたから自然話が合はなくなつたのだと思ふ。もしあの時に父の如き人が上にあるて指導したらよかつたであらうがそんな人物は家職の中にもなかつた。つまり舊藩でも能力ある人は三太夫等にならない時勢が來たのであらう。

飯倉界限のこと

余は明治十七年滿五歳のときに公立飯倉小學校に入つた。この學校は屋敷から歩いて十五分位の距離で麻布森元町といふところにあつた。初めは初等科六級といふのへ入つたが、やがて制度が變つて尋常科三年になり、それから一度飛び級をして、高等科四年を終るまで七年間この學校へ通つたのである。

當時の麻布といふところは高臺に華族や官吏の屋敷があり、低いところに商店街があつた。今行つて見ると徳川邸を初めその附近にあつた稻葉邸、秋田邸、松平邸、島津邸等は何れも分讓されてしまつたが、やはり坂の上は高級住宅地で、商店街は低いところにある。飯倉小

學校へは双方の子供が收容されたが、何れかといへば商家の子、即ち平民の子が多くて士族の子は少なかつたやうである。小學校では自分は概して優等生であつたが、時には怠けて叱られたことも憶えてゐる。しかし學校は好きな方であつたから、學校のことで母に世話をやかせたことはなかつた。學校の成績は何時も優等であつて、高等科二年の時に臨時試験を受けて飛び級したこともある。身體は小さくて、腕力も乏しかつたけれども、學校で腕白なものにいちめられることもなく、學校ごつこをすれば、こちらが大將になることが出来た。面白いことに徳川邸の子供は公立學校へ通ひながら別に漢學の先生に就いて四書の素讀を學ぶことになつてゐるので、余も學校から歸ると更に森とかいふ老人の家へ通つて大學、論語、中庸を讀んだ。勿論素讀だけで講義は少しも聽かなかつたから、それが何の用をなしたか全くわからない。ただ中學上級になつてから自分で四書講義などいふ書物を買つて讀むやうになつたのは多少氣分の上で漢學に親しみを有つてゐた爲かと思ふのである。

それから高等科になつてから同級のものゝ永沼富英といふ體操の教師で書をよくする人の自宅へ書の稽古に行くので、余も母に請ふてそこへ行かせてもらつた。しかし余が永沼先生に就きたかつたのは手習ひがしたかつたのでなくて、先生が時々遠足に子供等をつれて行く

からであつた。余等はこの先生につれられて、目黒不動や蒲田梅園や堀切の菖蒲園や龜戸天神など色々の名所へ行つたので、それは實に楽しいことであつた。余の散歩癖がこの永沼先生や邸内の交學會によつて養成されてゐるかと思ふ。それに余の母も自然美に對する少なからざる興味をもつてゐたやうで、幼少のときには母につれられて芝浦や上野などへ行つたこともある。

小學校時代に學校以外、徳川邸以外のことと記憶に残つてゐるのは氏神のお祭りと毎月一定の日に行はれる神社佛閣の緣日である。これは江戸時代の年中行事が明治の中頃にも相當盛に行はれてゐたことを示すものと思ふ。余の氏神は西久保の八幡宮であるが、飯倉小學校は飯倉の熊野神社の氏子の地域内にあるので、この二社の年一回の大祭の日には學校は休みになり、朝から遊ぶことが出来たのである。その他近所にある神社には芝の大神宮、赤坂の氷川、麴町の山王の祭りには大抵出かけた。祭りの日には見せ物や露店が數多く出るので、それを見て歩くのも楽しみであつたが、特に神輿の行列、だしや踊り屋臺の來るのを待つてゐるのが面白かつた。山王と氷川は江戸時代から有名な盛な祭りで、余の小學校時代には尙數十本のだしが市中を練り歩いた。それは實に壯觀であるが道路は群衆が雜沓するし、それ

に屢々喧嘩などもあるから子供づれで見に行くのは危険である。その日には特に何れかの商店の二階へ上らせて貰つて窓から見ることにしてゐた。余も母につれられて赤坂の呉服屋か何かの二階で一日暮したことがある。麻布邊の祭禮では道路が雑沓するといふやうなことはなかつたけれども、八月十五日の暑い日に八幡宮の神輿の來るのを待つて二三時間も徳川邸の前に群衆と共に立ちつくしたことがあつた。神輿は氏子中の若い者がかつぐのであるが、それは町の人ばかりで、士族は全く傍觀してゐた。江戸の祭禮が何時から衰へて行つたものか、余の記憶は確かでないが、それは中學時代になつて傍觀者としての興味がなくなつたからなのである。

縁日といふものの興味は勿論露店にあるので特に植木や金魚や蟲などが子供の注意を惹いた。小遣錢をもらつて行つて買物をすれば尙よいけれども、何も買はないとしても、夏の夕方行水をすまして、洗ひたての單衣を着て露店を見ながら散歩するのがよかつたのである。子供等は毎月三日は熊野様、十日は金毘羅様、廿一日は大師様、廿四日は愛宕様と縁日をよく憶えてゐて、かゝさず出掛けたのである。

中學時代

明治二十四年三月余は飯倉小學校の高等科を卒業して、直ちに芝公園の正則豫備校へ入つた。小學校を卒業したときの受持の教師は櫻井先生といふ温厚な人であつて、同級の男生は十人位あつたので、卒業記念の寫眞は今も保存してある。しかし學校が代ると共に小學校時代の先生とも友達とも疎遠になり、書道を習つた永沼先生方へも行かなくなつた。多分小學校の同級生は住所が散らばつてしまつただけでなく、中學へ進むものが極めて少かつたので境遇が全くちがつて、話があはなくなつたからであらう。徳川邸の友人等とは交際を續けてゐたので、その内の二三の者（鶴澤清治、同玄次、笠井小次郎）とは高商時代の初めまで頻繁に往來したけれども、他の人々とは境遇のちがふために疎遠になり、中學の上級になつた時には一般的に邸内のものよりも學校の友達の方が遙かに親しくなつてゐた。現在では余の最も古い友人は正則時代の友人（加藤、河野、高橋等）であつて、これ等は交通を絶たないけれども、邸内の友人と小學の友人と殆んど交通するものがない。多くの者は既に死んだ

のであるが生きてゐるものでも親しみはなくなつてゐる。而して高商時代の親友は最も親しくなり、親友といふほどでない人々とも交際をつゞけてゐる。つまり余の交友は小學から中學へ、又中學から高商へと學校を代へた時を境として著しく變つたのである。それは學校における競争のために素質の劣つたものがふるひ落された結果でもあるが、又世相のあはただしき變遷を語るものだと思ふ。

正則豫備校——それは後に正則尋常中學校となり更に正則中學校となつた——は余の入學する一二年前に創立された私立學校で、外山正一（當時東京大學教授、後文部大臣）神田乃武（當時東京大學教授、後高商教授）元良勇次郎（當時東京大學教授）の三氏が麻布芝兩區に住居する有力者と謀つて設立したものであり、生徒は中流以上の家庭のものが多かつた。飯倉小學校の生徒は家庭の裕かならざるものが多くあつたから、それと比較して學校の空氣は全くちがつてゐた。あの頃麻布芝方面の中學としては築地に府立中學即ち今の一中があり、金杉に私立攻玉舎があり、三田に慶應義塾があつた。この内で慶應義塾は紀州藩と縁故深く家兄も幼稚舎時代から入學してゐたし、徳川邸内の友人たる鶴澤兄弟も行つてゐたから、余もそこへ入れられさうなものであつたが、如何なる次第か兄は余のために正則を選んだ。恐

らく通學の距離が近いことは重なる理由ではなかつたかと思ふ。しかし當時の正則は非常によい學校であつたことは疑ない。創立者たる三先生が出て來て教へられ、且熱心に經營された。所在地は老樹鬱蒼たる公園の中で元海軍省の御雇外國人の住宅であつたものを校舎として用ひたのである。生徒は余の入學したとき百人位あつたかと思ふが、それが廿人内外の小さい學級に分れてゐた。ある時卒業式に校長の神田先生が「この學校は何々すべからずといふ立札は一つもない、生徒の自尊心に訴へて校内の秩序を立てるのだ」といふ意味の演説をされた。創立者たる三先生以外の教員も優秀の人が多く集まつて協力されたやうである。その頃の教員で後に學界に名をなした人も多くあつた。（岸上理學博士、田丸理學博士、鹽澤法學博士、原文學博士、狩野文學博士等）生徒では長與醫學博士、本野工學博士、内田鐵道大臣、佐藤外務大臣、神鞭常孝氏、岩永裕吉氏等が後に世間に知られたのであるが、その他にも素質の秀でたものが多くあつた。立派な人物でありながら早く死んだり、又運がよくなかつたために成功しなかつたものもある。

余は正則中學在學中三先生の教化を受けたことは勿論だが、その中でも元良先生の修身の講義を熱心にきいて修養に心掛けるやうになつた。元良先生には度々お宅へ訪問して教を受

けたことがあつた。先生はアメリカの大學で勉學され、帝大では心理學を擔當して居られたが、正則へ來ては子供に適するやうに色々の話をされた。

余は正則を出てからも先生を訪問することがあつたが、先生は不幸にして夭折されたのである。それから數學の教員に岡幸祐といふ方があつて精神體質な嚴格な人であつたが、同氏から論理的な考へ方を教へられた。又博物の教員で猪間收三郎といふ方が進化論を講ぜられたのは余の一生涯に大なる影響を與へたのである。

余は身體が小さく、腕力が劣つてゐるばかりでなく、運動神經が發達しなかつたので競技等は甚だ不得手であつたが、頭はわるくない方で文章や語學には特に自信があり、數學も好きではなかつたが、相當にやつたのである。人生といふものに對する科學的研究心も四年生の時から起つて來て友人達と日々討論するやうになつた。その頃高橋鎗四郎、加藤成一、河野廣一の三君と最も親しくしたが、この交友によつて自分を啓發したことは實に大なるものがあつたのである。加藤氏は卒業後一高を経て東京帝大に入り造船を學び、農商務省、遞信省の技師になつたが、他の二氏は官立學校へ行かず、慶應義塾に入り、そこでもあまり勉強しなかつたやうで、結局社會的には成功しなかつた。吾々四人の仲間は中學生としては頭

が進んでゐるので、學校の成績などは馬鹿にする傾きがあつたが、高橋、河野は其のために怠け癖がついたやうにも思はれるのである。

余が中學時代にあまり運動をやらなかつたのは自分の素質にも原因するが、一には家庭の事情が影響してゐる。即ち母が明治二十六年に再び精神病にかゝり、その後腎臟病をも併發して、二十九年四月死亡するまで臥床してゐたので、その看病に時を取られ、自由に外出することが出来なかつた。正則學校では一時ボートを盛にやつたこともあつたけれども、余はそれに參加する機會が少かつた。徳川邸内でも、請願巡查の間宮といふ人を先生にして劍道をやつてゐたので、これにも仲間入りしたけれども、練習は妨げられた。水泳もやる意思はもちながらやれなかつた。これではいかぬと、中學を出た年の夏中洲の水練場へ通つて小學生に交つて初歩だけを學んだのである。かくして余は十六歳から十八歳といふ發育盛りに家にゐることが多くして、そのため益々内省的になつたと思はれる。

母の看病をしながら石油ランプの下で書物を読んだがそれは動物や地理に關するものが多くあつた。南洋探検記——これは現在委任統治の下にあるマーシャル、カロリン群島のことを書いたもので著者は鈴木經勳氏と憶えてゐる——を讀んで、自分も將來探検家になりたい

などと空想したこともある。それから高橋鎗四郎氏等と交つてから、倫理道徳論に興味をもつと共に實踐修養といふことを志し、明治二十八年フランクリン自叙傳を讀んでからその十二則に倣つて自ら「修身則」なるものを作つた。「修身則」は謹言、慎重、嚴密、經濟、攝生、勉強、大膽、寛大、決斷、禮儀、高潔、仁愛の十二箇條を擧げ、日々反省すべきものとしたのである。

母・伯母・伯父

母の生れた家は醫者であつたが詳しいことはわからない。菩提所は四谷見附内の心法寺にあつて墓石は上田家のものほど大きくないけれども、その周圍に在る他家のと比すれば立派な方で、表面には竹に雀の家紋の下に、冬林院殿松尾前檢校隆譽宗竹秀翁大居士の戒名と、この人の配とおぼしき人の戒名が並び刻まれてある。檢校とあるから盲人であつた筈だがそのことは聞いてゐない。檢校の没した年は天保二年だから、これは母や伯父、伯母の祖父と推定される。伯父の名を三代太郎といつたところから考へれば、檢校が松尾家を興した先祖

であつたのだらう。それから檢校の墓石の側に、ずっと小さい墓石が立つてゐるが、これが二代目と其の妻即ち余の祖母の墓である。伯父松尾三代太郎は和歌山藩士であつたが、どうして江戸の醫者の子が和歌山藩士になつたのか、これも詳しくはわからない。恐らく醫者が江戸藩邸に抱へられ、やがて常府の士分になつたのであらう。慶應四年彰義隊の亂の後に常府のものは家族もろとも國元へ引取ることになつたので、伯父も伯母も母も和歌山へ行つたが、伯父は醫者などは嫌ひで藩政改革の際に二十四歳で騎兵士官になつたのである。それから僅か三年足らずで廢藩置縣となり、再び東京へ歸つて來たので、其の道中の話は時々母から聞いたことがある。母は嘉永六年（一八五三）の生れで當時十九歳であり、余の兄が生れたのは明治六年だから、父に嫁したのは東京へ歸つてから後のことではないかと思ふ。母の姉はかねと云ひ、母より一二歳年上であつたが、この姉妹の性質は餘程違つてゐた。母は利發ではあつたがおとなしい人で、上品なお嬢様から上品な奥様になつたやうである。これに反して伯母は氣丈な人で山氣も多分にあつた。伯母はやはり同藩の草野可孝といふ人に嫁いだが、この人も常府で草野政信、通稱錠之助の弟であつて、伯父と同じく藩政改革の際騎兵士官になつた。兄の錠之助氏は傑物で藩政時代には民政局の大官となり、東京へ來てから第

十五國立銀行の創立に參與し、紀州家を代表とする意味で同行取締役となり、明治四十三年頃迄存命したのであるが、弟の可孝氏は無能であり、且酒のために身を誤まり、一旦は新政府の軍隊に勤めたけれども、結局免官となり非常に零落してしまつた。明治十八年頃伯母の一家が飯倉五丁目の裏店住ひをなし、その何番目かの男の子がコレラで死んだりした。その頃伯母は陸軍御用の雑巾を縫ふ仕事を引受け貧乏人のかみさん達に仕事を出して稼いでゐた。政信氏は市兵衛町に堂々たる邸宅を構へてゐるのにどうしたものか、弟の子供を一人か二人引取つただけで、その他の家族を世話しようとせず、伯母も世話になることを好まず、交際もしなかつた。しかし伯母は終に子供達を置いて可孝氏と離別することになり、それから政信氏は弟の一家を引取ることとなつた。

伯母が草野家を去つたのは明治二十二年頃かと思ふが、その頃母が病氣であつたので、伯母は余等の家に来て世話をしてくれた。母の病氣が直ると近所に家を借りて、昔覺えたその内職の元締のやうなことをしてゐた。その内に和歌山藩の舊知である内田匡輔氏の妻が四人の子女を遺して死んだので、その後妻になつた。内田氏は多年十五銀行に勤め蓄財が出来たので、やがて銀行を退き、麻布銀行を創立したり其他種々の事業に關係し、又妹の菊枝とい

ふ人の嫁してゐた松田玄々堂の主人が没したので、その營業たる石版印刷を引受けて京橋桶町に店を開いてゐた。余の母が明治二十六年再び發病したとき菊枝氏が來て家の世話をしてくれた。菊枝氏は余の兄が結婚した時、和歌山へ歸つて、平松家へ縁付いたので、余との交際は疎遠になつたが、余はこの人の好意に感謝してゐた。余もその子息たる耕、稔の兩君を弟のやうに扱ふこととなつた。明治三十八年内田氏の家計が不如意になつた時、稔君を余の小石川水道端の家へ引取つたこともある。

隨筆・小論

筆の向くまゝ

士族の思ひ出

明治維新の革命は武士の支配を止めて四民平等の制度を立てたけれども、其原動力は百姓町人の側にあつたのでなくして武士の一部にあつたことは申すまでもない。従つて維新後になつても軍人や官吏は勿論のこと、在野の政治家學者、さては實業家の重なるものが、士族の内から出て來た。明治十二三年頃志士論客が憲法の私案を作つた時に士族に對して特別の選舉權を與へるがよいとしたのも少くなかつた。然るにそれから僅か二三十年の間に士族といふものは全く戸籍面だけの名稱になつてしまつて、數年前に代議士の誰彼が士族の稱號廢

止説を持出した時に賛成又は反対したのは極めて少数の田舎の人々に限つてゐたやうな状態である。士族消滅の歴史は社會上の階級の興亡を考ふるについて絶好の資料であらうと思ふ。私の家は祖父の代まで町人であつたが、父が漢學をやつた爲にどうしたものか士族に引上げられた。そして明治十二年に東京山の手の或大名華族の屋敷内で生れ、そこで成長したから多少士族の思ひ出をもつてゐる。私は今ここに年長者じみた昔語りをするのではない。自分のやうな若輩でさへも今とは非常に異つた世相の經驗をしてきたことを回想して驚くのである。

私の幼少の頃の山の手は地方から出て來た役人などの植民地であつて、此の人々は概して高臺に屋敷をもち、買物をするときは坂下の商店町へ行くのであつた。學校へ行つても屋敷の子は上品で町ッ子は下品であるやうに感じた。或時屋敷の子と町ッ子と各數十人の隊をなして坂の上と下とで對陣し、大喧嘩をやらうとした事などもあつた。今の言葉でいへば一種の階級鬭争だらう。私が中學へ入つてからでも士族の家庭はまだ中々家柄の誇りをもつてゐたので、或生徒が『おれは武士の子だ』といつて威張つたが、併しその時には皆のものが大笑をして爾來この子の綽名を『武士』ときめてしまつた。

私よりも十幾歳年長の人にはもつと面白い話がある。現に立派な貿易商になつてゐる某氏は父が時勢を察してゐたお蔭で築地の商法講習所即ち今の商科大學の前身たる小さな學校へ入學したが、當時學校の規則で縞の着物に前垂をかけさせられた。さうすると母なる人が涙を流して、此の子は何の因果でこんななりをしなければならぬのかと泣きくだいた。それで子供は毎朝家を出るときは袴をはいて行つて學校の門前で前垂につけかへたといふ。これは當人の直話である。

どうして士族が消滅したかといへば無論彼等が祿の代りに政府から貰つた所の公債を元手に商賣をやらうとしたからだ。若しあの時公債の代りに田地を貰つてゐたら今少し士族の傳統が長つゞきしたかも知れない。但しその公債の金高が至つて僅少なものであるのみならず、既に都會人となつてしまつた所の士族が自ら鋤鋏を取ることには出來なかつたらう。兎も角所謂『士族の商法』は明治十年代の大流行であつた、それに失敗したものは諸官省の門衛などになつて、昔の忘れぬ威嚴を維持せんとしたらしい。私の記憶してゐるのは此の士族の商法が既に落語家の話題になつた時代のことだが、それでも伯父が共立商社とかいふものを設立するについて家の道具類を賣るといつたやうなことをほのかに覺えてゐる。その共立商社と

いふのはどうも今の消費組合のことであつたらしく、伯父はその案を慶應義塾の友人から聞いて来たものと思ふ。

私の國では維新後に舊藩主が數十町の田地を寄附して士族の社を作らしめ、青年に學資を與へ鰥寡孤獨を救恤することとしたが、追々士族と士族でないものとの區別がつきにくくなり、又士族でないものが此社員の株を安く買つて子供の學資を請求する等の弊害を生じたために、數年前解散してその金を高等學校新設費の中へ寄附してしまつた。恐らくこのあたりが士族史の最後のページであらう。

(文藝春秋・大正十五年十一月)

淋しさを喜ぶ

今年も郭公の聲を慕つてこの淺間山麓の森の小庵にやつて来た。家族のものは未だ出られないといふので、自分ひとり僅かの食料品を抱へてやつて来た。こゝは輕井澤へは二里近くもある。杏掛の部落迄も一里ある。土地會社の經營地内だから電燈と水道はあるけれども、

小庵の周圍はまだ全く開けない荒地のまゝだ。隣というても一丁程はなれた所に昔から一軒家があつて今年八十二になる老翁と幾つだか年の分らない薄馬鹿の娘さんと小さい男の子が住んで居る。以前はそれが麓の茶屋と呼ばれて草津行の旅人の脚を休めた家だと云ふが、今の婆さんはだらしがないから、きたなくて普通の人に近よれない。その家の先は道が山にかゝるので一里上の峯の茶屋まで人家はない。私は今こゝに来て、毎朝枯枝や枯松葉をあつめて自炊してゐる。訪ねて来たのは御用聞きの人から聞きの商人の外彼の婆さんばかりだ。新聞は取つて居ないから濱口内閣の緊縮政策がどうなつたか、ロシアと支那の關係がどうなつたか知らない。こんな生活を長くやつたら無論退屈するだらうが、少くとも數日間は非常にエンジョイして居る。

小庵を埋める所の森は赤松と落葉樹と白樺の密林で、下草が藪のやうに茂つて居る。白樺はひよろひよろ伸びる木で少しのそよ風にも幹ごとゆらゆらと動く。それを朝などに見るのが殊によいので、私は十分間位ぼんやりと見つめて居ることもある。之に反して松は勿論動かない木だ。夜になつて松の梢のこみ合った間から満天の星を仰ぐのが私は好きだ。

こゝは禁獵區になつてゐて、特にすぐ前には、非常に廣い官有林があるから鳥が澤山ゐる。

鶯、ほととぎす、ほゞじろ、こまどりなど終日囀つて居る。時々山鳩がなく。芭蕉翁の文に「鳩の聲深し」といふのがあつたと思ふが、如何にもそんな氣持のする聲だ。しかし私の最も愛するのは郭公だ。かつこう、かつこうと云ふ調子が實にのんびりして、何處か間のぬけた所がある。すべての世を超越したやうに思へる。それから日が暮れると夜鷹がなき出す。これは餘りよい聲ではないが、山奥のさびしきを感じさせる。この邊では八月中頃になると多くの鳥がなくなくなる。居なくなるのか、居てもなかなぬのか、學者に聞いて見ようと思ひながらまだきかない。兎に角、鳥の聲がきけないと、山の興味が半分減じてしまふ。

鳥がなくなくなる頃には秋草が咲き出す。桔梗、女郎花、萩、すゞき、山はゞこなど。しかし困つたことには同じ頃に別荘が満員になり、淺間の登山者が毎日隊をなして此處を通るので花は大ていむしられてしまふ。河原撫子といふものは武藏野にも多くあるが香がない。山のはよく香ふ。その香が數年前には草原を通るだけで感じる程であつたが、今は種ぎれになつてしまつた。

こゝは涼しいと訪客がないので仕事もよく出来る。しかし私にはそんなこと以上に淋しいのが氣に入つて居るのだ。九月の末になつて都の人の姿が見えなくなると、秋の空がすみわ

たり、山の輪廓がくつきりと見られる。十月十一月と冬に近くなれば益々よくなる。夕方から深い霧が出て、それがやがて雨になる。大粒の霽がぼとりぼとりと軒から落ちる。深更には湯のたぎる音の外に何もきこえない。絶對の靜寂を味へる。私はその靜寂を味ふために時時落葉をふんでこの小庵にやつて来る。

私は俗人だ。西行法師や良寛和尚や芭蕉翁などがどんな心をもつてゐたかわからない。わからうと勉めたこともない。妻子をすてて、破笠一蓋もつて雲水の旅に出るのはいやだ。たとへ妻子が皆死んでしまつたとしても、そんな氣にはならないだらう。けれども兎に角私には淋しさを喜ぶ心がある。年齢の長するに従つてすべての事物に對する感興がうすくなり、自然の風景についても嘆賞の情が鈍くなるやうに思ふが、唯この淋しさを喜ぶ心は衰へない。自分の日常生活の忙しくなるにつれて、ますます山の靜寂に對する憶が強くなる。さうしてその憶を充した時に氣がのびのびする。

自ら稱してモダンボーイと云ふ若い友人が或時こゝへ私を訪ねて來たことがあるが、こんな淋しい所には居られないといつて直ぐその日に東京に歸つてしまつた。その友人に君は心を落付けやうとする時にどうするかときいたら劍劇を見に行くと言へたので、さてさて氣の

毒な人間だと思つたが、先方では多分私をとて酔狂なおやぢと思つて居るだらう。此の如き趣味の相違は個人的の相違に止るか、それとも時代の相違であるか解釋を下してくれる人はありませんか。

(文藝春秋・第七卷第九號、昭和四年)

カンチェンデユンガ

マウントエレベスに次ぐと云ふ二萬八千尺の高峰カンチェンデユンガを見物するのも印度迄來たからには、是非一度試みたいと思つて、ダージリングに行つた。ダージリングは山の中にある市で海拔六千尺もある處だ。そこへ達するには汽車は山をグル／＼とぐる巻に上つて行くのであるが、しば／＼後進してジグザクを作つたり、又ループを急がいて前に通つた線路の上を横ぎつたりする處もある。汽車が進行したからもうカンチェンデユンガが見えるだらうと折々注意するが仲々見えない。只前には大きな谷を隔てて大きな山脈が幾つも見えつても重なつて見えるのである。いつ見てもやはり同じことである。併し汽車の時間から察し

て見るとどうしても見えねばならぬあたりだと思つて見渡したが、矢張り同じことである。そこでこんどは汽車の窓から首を出して身體を下にひねつて空の上を見上げた。見えた。見えた。高原のみに見ゆる美しい瑠璃色の空が先づ見えた。そしてその空を狭めて空よりも高いと思はるゝ程に聳ゆる純白の山塊が見えた。何のことはない。それが最前から一生けんめに探してゐたマウント・カンチェンデユンガではないか。今迄見えてゐた重疊たる諸山脈の上に雲の如く浮いてゐるのだ。

なる程よく見れば、その山腹にはまがふかたなく續いてゐる。否今自分の居る處とも相連なる同じ地球上の存在であるが、併しどうしても今自分の居る處と地続きである同じ世界の存在とは感じられなかつた。ダージリングのホテルについてからも機會ある毎に注意したが雲が常にかゝつて仲々姿を見せて呉れない。御飯を食べる前にも、食べてからも煙草一服する前にも、煙草吸ふ間もカンチェンデユンガに注意を怠らないがどうしても見えない。夕方になつても、夜になつても、どうしても見えない。たうとう就寝時になつたが見えない。遂に諦めて就寝したが見えぬカンチェンデユンガ見たさは仲々眠らせて呉れない。たうとう起きて月夜の空を眺めたがカンチェンデユンガの見うべきあたりは矢張り雲につままれてゐる。

再び床についた。ウトウトする。フト目がさめた。忽ち身を起して窓によつた。處が拭ぶが如く晴れた有明の空はカンチエンデュンガを夢の如くに浮かべせてゐた。昨日來の骨折がやつと報いられたのである。見てゐると初めは紫色に明けの窓に響えてゐるが、おひおひにあたりの明るくなるにつれて、うす紅色を呈して來るのである。空はいよ／＼碧く澄まんとしてゐる。上ばかり見てゐる首は疲れて痛くなつた。庭に出て芝生に仰向きに寝てゐたら、丁度よく見えるだらうと思つた。紅色はいよ／＼濃くなつて、其尖端は燃ゆるが如くになつて來た。既に朝日を受けてゐるのであらう。自分の首はいよ／＼疲れて來た。そして私の頭はいつか次の様なことを考へた。

なる程カンチエンデュンガの高い事は私の今迄の經驗に革命を與へたが、それはそれだけのことで、其高いことがあまり超越すぎて、どうしても人間的のしたしみが無い。非常に物足らぬつまらないものである。どうしてあんなに超越出来るものかと。仰向いてゐた首の疲れはその後二日ばかり癒らなかつた。

(實業新人・創刊號、昭和六年)

酒の思ひ出

一

今は二十五年の昔、一九〇六年のこと、私は最初の洋行をして英國にゐた。經濟學を勉強するには書物ばかり讀んでゐてはいかぬ、大に實地見學を要すると考へたので、毎日日課のやうにして新聞を讀むと同時に色々傳を求めて工場や倉庫や港や其他すべての設備を見學に出かけた。或時グラスゴウへ行つて故ヘンリー・ダイヤ先生——この人は明治の初年日本へ來て虎の門の工部大學即ち今の東京帝大工學部の前身を組織した人で、日本びいきで、ダイニッポンといふ書物もかいた——を訪ねて種々の話を聞いた後に、同氏の紹介で市の汚水處分の設備を見に行くことになつた。その頃西洋の都會へ行つて誰しも第一に心地よく思ふのは便所の清潔なことであつたから、下水の問題は當然私の注意を惹いた。そのみなら

ずグラスゴウの自治行政が完備してゐることを豫ねて聞及んでゐたから此の土地で模範的の設備を見ようとしたのであつた。市の中心を距ること十數哩、クライド河の岸に沿うて非常に廣い工事場がある。そこに全市の汚水が集まつて来る。幾つかの淨水池が設けてあつて、化學的取扱により汚水は完全に淨化された上で河へ放流される。固形物は肥料として販賣するために之を別に集めて煉瓦型のものに製造する所の工場も附設されてあつたが、この方法はあまり成功しないので、寧ろ全く捨ててしまふがよいといふことになり、大部分は特設の船に積んで沖へ持つて行つて捨てて来るやうにしたと説明された。今でも日本では水洗便所が所々出来てゐるだけで現に復興の東京は大部分おわいやさんの世話になつてゐるのだから、當時私がこの仕掛けに感心したのは不思議でない。然るにそれが酒の思出になるといふのはかうだ。工事場を案内してくれた技師が一本のビールビンを持つて来て放水口で水を汲んでから、私を事務所へつれて歸つて更に工事場の費用の事など質問に應じて説明してゐたが、やがて机の下からウィスキーを出して二つのコップへ注いで、それに例の水を加へて私にもすゝめ自分も飲まうとする。而してこの水は化學的にも細菌學的にも完全な清水だと付け加へた。まだ少々濁つてゐるやうで氣味が悪かつたが私は思切つて飲んだ。それがうまかつた

ので思はず數杯を重ね愉快な世間ばなしをして、固い握手を交換して別れた。あの時のウィスキーの味は今でも忘れない。

二

次はずつと新しくなつて一九二七年八月、私はジュネーヴ國際經濟會議へ行つた歸途にモスコウへ立寄つて、ソヴィエットの經濟的建設事業を見學した。英語のわかる通譯を一人雇つて同行の成瀬義春氏と共に各所へ出かけた。一日農村を見るといふので、モスコウから二十哩位離れたドリンキノといふ村へ行つた。まづ村役場へ行くと、一人の女が子供をつれて來て、聲を擧げて泣きながら村長に何事か訴へてゐる。それは女の亭主が酒のみであつて少しも稼ぎに行かないから自分達が困るといふのであつた。それを見てまづ私共は忽ち昔風のロシア農村の氣分を味はつた。それから大樹鬱蒼たる森の中へ行つたが、そこには木造の立派な邸宅があつて、それが三十人程の孤兒の寄宿舎に使用されてゐた。勿論革命前に大地主の住居であつたのを沒收したものである。それから農業試験所や産業組合のバター製造所などを訪問して、最後に病院へ行つた。この建物は以前に國教の尼寺であつたのを沒收して改造

したもので、ベッドは十あまりあつた。そこにドイツ語の少し出来るドクトルがゐる案内をしたり、又地方の衛生状態などを説明してくれた。この村はモスコウからレニングラードへ通じる街道に當つてゐるに拘らず、純然たる農村であつて、食事を取るべき店もないから、やがてモスコウへ歸らうとしてゐたら、ドクトルが自分の宅へ私共をつれて行つて御馳走をしてくれた。ドクトルは夫人に話して用意させておいたと見えて、黒パンのサンドウィッチやカヴィヤなどが出された。それにビールを幾本も持つて来てぬく、葡萄酒をぬく、その上お國名物のウォッカを注いですゝめられた。先生は政治問題や社會問題はあまり話さず、自分の大學生時代のことなどを話して、愉快に笑ひ且飲んでゐた。何分この村には高等教育を受けた人がないので、平生話相手の少いに苦しんでゐた所へ我々が行つたから大に歓迎してくれたことと思ふ。我々も意外の場所で意外の款待を受けて非常に喜んだ。ビールは勿論葡萄酒も國産だから、餘り結構な品ではないが、兎に角充分に飲むだけの分量はあつた。共產主義の國でもこれだけの酒は個人の自由になる。而してそれが温い人情の交換に役立つ。どうも酒だけは私有がよい。

(經濟往來・昭和六年一月號)

コーレンコ會

明治十五年頃神田一ツ橋に今の東京外國語學校と直接の關係なき同名の學校があつた。そのロシア語教師にアンドレ・コーレンコといふ人があつて親切に學生を教へ導いた。當時此の學校でロシア語を志望するものの數が至つて少かつたので政府は特に學資を補給してロシア語學生を奨勵した。従つてロシア語科には貧乏であつて而かも青雲の志を抱いたものが集つた。明治の文豪二葉亭の如きも此の科の出身者であつた。然るに此の學校は明治十七年に京橋の東京商業學校即ち今の東京商大の前身となつた。コーレンコ教師は日本を去つて故郷へ歸り小役人になつた。

それから烏兔匆々四十年の幾月は水の如く流れて大正何年となり、世界未曾有の大戦大革命のために一時斷絶してゐた日露の國交恢復し、モスコウに再び日本大使館が開かれ田中都吉氏が大使として赴任した。その時同市から六時間位の田舎で不自由な生活をしてゐた八十

幾歳の老翁コーレンコが大使館を訪れ、自分の日本における経歴を語り、古い寫眞などを取出して見せた。さうして自分の學生に田中といふもの、川上といふものがあつたが、現今の大使がやはり田中氏であり、又當時日本大會社の代表として滞在の中の方が川上氏であることを懐かしく思ふといつた。所でその田中氏は暫く措き川上氏の方は全くコーレンコ教師の古い學生の川上俊彦氏であつたといふことはコーレンコ翁に取つても川上氏に取つても實に意外の喜びであつたに相違ない。勿論川上氏は早速翁を呼んで款待した上で、さて貴國大革命に拘らずよく達者でゐてくれたといつて慰めた處、自分は元小さい地主であつたが革命の際土地を取上げられ今は毎月十六ルーブルの恩給を政府から貰つて獨り淋しく暮してゐること。

川上氏は歸朝の上當年の同級生平生夙三郎、藤村義苗、鈴木陽三郎等の諸君に會つて右の奇遇を話した。一座の意見は忽ち一致して昔の教師の餘生を安らかにしてやるべく數千圓の金を贖出し、之を在露大使に託して月々必要だけを與へることになつた、老翁コーレンコは今も毎月モスコフへ上京して大使館から右の金を受取つて感謝の生活を送つてゐる。年も既に九十に近いが健康である。一方在日本のこれも稍老いたる同級會はコーレンコ會といふ名

稱で時々愉快な昔話を語り合ふのである。因みにコーレンコが覺えてゐた昔の田中は平生夙三郎氏の舊姓であつて、田中都吉大使とは縁がない。たゞ偶然なことに田中大使も亦東京高商の出身で平生氏等の後身であることはさぞコーレンコ翁を喜ばせたであらう。

世の中はせちからなくなつて人情日にすさぶなどと慨嘆する人もあるがこんな胸のすく様な美談もある。

本文執筆の後主人公のコーレンコ翁は八十八歳の高齡を以つて本年五月中逝去されたといふことをコーレンコ會の一人から聞きました。
(大學と社會・昭和六年七月號)

「鷹」によせる一言

「人に意見をいふ年頃で意見いはれる身のつらさ」といふのを數年前何處かの辻うらに教へられたが今も忘れることが出来ない。蓋し、自身に多少思ひ當る事があるからだ。併しこの文句は終りが誤つてゐる。身の「つらさ」ではない。身の「うれしさ」だ。うれしさでなけ

ればならない。試みに思へ年四十を越え五十を越えて若き友人等から遠慮のない意見をいはれ、又それを取入れることの出来るやうな境遇におかれた人がこの廣い日本中に幾人あるか。世間には後輩からお座なりの追従をいはれて喜んでゐる先輩が澤山がある。後輩の追従に慣れてしまつて正直なことをいふ者に遇ふと却つて不快を催すやうな病氣に罹つてゐるものも少なくない。後輩がお座なりでなく心からの助言を遠慮なしにいつてくれることはその助言を與へられるものに取つて尊き特權である。素直な氣持で助言を受けいれることが出来れば非常な幸福である。我輩は實に天下の仕合せ者だ。金子君も同様に天下の仕合せ者だ。

意見をしてくれる人に註文がある。自分一個の小さな利害を眼中においてくれるな。自分を世のため人のため最も有効に働かしめるやうな道を考へてくれ。金も名譽も權力もいらぬ男は仕末にこまると西郷南洲がいつたさうだが、吾々はその仕末にこまる人物になりたなのだ。物好きかも知れないがそれに相違ない。それが一番氣持よく身を持たせる條件だと信ずる。

それは何も彼も入らぬといふ消極的な申分には止らない。求むるものは確かにある自己發展だ。大我の發展だ。我輩がこれだけのことをいふのは、勿論うそいつはりでなく、又空漠

たる抽象論でもない。一生の體驗の中から考へついた事だ。自分のこの目で見たり、この耳で聞いたり、この胸に悟つた事だ。我輩と雖も世間的に失敗した場合に一時氣がくもることもある。しかしそれは一時のことだ。その曇りを超越することは必ず出来る。超越なるかな。

(鷹・昭和八年八月)

ハイキングと散歩

近頃はハイキングが流行する。鐵道のピラを見れば、曰く「空高くハイキング」、曰く「富士を見るハイキング」、曰く「八ッ岳山麓を繞りてハイキング新コース」。ハイキングといふ英語の綴方は知らないが、ピラの畫を見ればリュックサックを背負ふてスゞ／＼歩くことだと思はれる。先日或イギリス人に「君はハイキングといふ語を何時から知つてゐるか」と問うて見たが、彼國でも四五年前からハイキングが始まつたので、あの語はアメリカから渡つて來たものらしい。さうだらう。三十年前に小生が始めてイギリスへ行つた頃にはそんな語は

なかつた。遠足のことにはウォーキングといつた。あの頃にはウォーキングと共にサイクリング即ち自轉車遠乗りが盛に行はれた。牧場や森の青々したところを幾里となく走つて、春ならば百姓家へ入つて林檎の花の下へテーブルと椅子を出してもらつて茶を飲んでから、又走る。街道の四辻にはたいいてい教會堂とバーが向ひあつてゐるので、教會堂の建築美を賞した後にはバーへ入つてビールを一杯ひつかけることもある。バーといつても日本のその如く美人がゐるわけではない。大きな男が毛だらけの腕を出してビールかウイスキーをついでくれる。それをチーズを肴にして立飲みするのである。ウォーキングとハイキングは要するに歩くことには相違ないが歩く人のいでたちがちがひ、従つて気分も多少ちがつてゐる。昔はリュックサックなどを用ひず、ハンチングをかぶりステッキを持つて出た。所謂杖を曳いて某地に遊ぶといつたやうな有閑的気分があつた。今のハイキングは時間割が出来てゐて緩慢なことを嫌ふらしい。私も夏休みに沓掛へ行つてゐる際などハイキングを時々やつて見るが、平生は忙しくて大がりの事は中々出来ない。ウォーキングは常にやつてゐる。

私は東京麻布に生れ、飯倉小學校へ行つたのだが、その頃永沼先生といふ若い先生が居ら

れて、そのお宅で特に習字を教へられた。先生は後に雨山と號して書道の専門家になられた程の人だから當時から書には自信があつたのだらう。ところで私は母に願つて先生のお宅へ書を習ひに行つたが、これは實は字を上手にかけるやうになりたいといふ志があつたのではなかつた。先生が日曜や祭日に、わらぢばきで子供等を引きつれて郊外散歩に出かける習慣があつたので、私はその仲間に入ることを目的にしてゐた。目黒不動、池上本門寺、蒲田の梅、遠くは龜井戸の藤、堀切の菖蒲、飛鳥山の櫻などを見に行つた。稀に汽車に乗ることもあつたが原則としては全部徒歩で終日六七里位歩いた。歸宅して後に「此日晴天一點の雲なく」といつたやうな作文をかいた。それが私の十一、二の時だからこれによつて大に散歩趣味を養つたやうに思ふ。

その頃、といふと明治二十三年だが、麻布は今の荻窪ぐらゐにも開けてゐなかつた。永坂下あたりに處々水田や茅葺屋根が残つてゐて、一の橋附近で川へ入つて小魚をすくふことが出来た。廣尾に笑花園といふ東都名所の一つに數へられた庭園があつて、主人の庭師が毎年菊を作つて見せてゐた。菊のない時でも澁谷川の清流——ほんとに清流であつた——に沿

うて尾花の散る野道を歩き、水車の音を聴くのはよかつた。その後この地方は年々人家が多くなつたけれども、日露戦争の後でも、私は廣尾から川に沿うて澁谷の氷川神社までの野道を好んで歩いた。或時川岸の草むらの上に烏瓜の見事な紅色に熟したのを發見して實に美しいと思つた。この氷川神社の境内は杉の大き木が茂つて立派な森をなしてゐる。その中に廣い角力場があつたので私は子供の時にそこまで運動會をやりに行つた。こんな風にそれからそれと想出して見れば郷土感はあるのだが、平生はその近所を通つても昔の事を想出すことが殆んどない。今の麻布や澁谷があまりに變つてしまつたからだ。

明治三十年頃から以後勉學の都合で本郷小石川の方面に住むことが多かつたので、私の散步區域が或時は團子坂道灌山あたり、又或時は雜司ヶ谷早稲田あたりに移動した。雜司ヶ谷鬼子母神あたりの櫟林や櫟の老樹が氣に入つたので、二回外國へ留學した後大正になつてから終にそこへ家を建てて十幾年間住むことになつた。私の家は初め麥畑の中にあつたが、やがて世界大戰の景氣で近所に工場が現はれ、更に大震災の影響で住宅が盛に増加し、今は舊市内と少しもちがはぬ便利などころになつてしまつた。私の子供達はその雜司ヶ谷で育つ間に私の幼時と同じ經驗をすることになつた。彼等は昔螢を捕つたり、めだかをすくつたり、

梟の聲を聴いたりしたところに今人家の建こんだ町を見るのである。たゞその變化は頗る速かにして私が三十年間に見た變化を彼等は十年間に見てしまつた。

○

時代は移つた。ウォーキングがハイキングになつた。しかし私のウォーキングの習慣は五十六歳の今日までつゞいてゐる。春は霞、秋は霧、夏は青葉、冬は枯野。ふらりと野外へ出て確たる目的なしに廣い天地の間を歩きまはる。同行者あればよし、單身獨行も不可なし、獨行の際は色々の雜念や學問上の思索が頭へ浮ぶけれども、歩きながら繼續的に物を考へることは出来るものでない。雜念が悉く消えて明鏡止水の如く自然美をそのまま受入れられる時は最快心の境地である。

三年前に中野へ轉居してから又この附近を歩いて見るとやはり昔を想出す。新井藥師の前のカフェ何某といふのは學生時代に豚肉と野菜を市内から持參して薩摩汁を作らして土地の名物の栗飯をたいてもらつて食べた家の跡だ。堀之内の祖師堂はあまり變つてゐないが、あそこへ行く途中の今賑かな町になつてゐるところは丘と丘との間の畚であつた。坂を下つて水田の廣々したところへ出て小川を渡つて又木立の坂を上つて行くのがよかつたのだ。堀之内

からずつと南へ走れば甲州街道の繁華な町へ出るが、甲州街道と青梅街道の間には今日尚ほ多くは純農村が残されてゐる。大宮八幡といふ郷社は稀に見る大きな松杉の森である。森の一方はがけになつてゐて、その下を繞つて小川が流れてゐる。この川は善福寺川と稱して善福寺境内の湧水が流れて來るので美しい清流である。川下は井の頭の水と一になつて神田上水として江戸下町に供給されたのだ。しかし近頃は附近に帝都電鐵が出來たり、バスが通つたりするから、こゝも間もなく井の頭のやうな雑沓した日曜の遊歩地になるだらう。

武藏野に限らず日本の田舎は皆さうだと思ふが、田畑の中に點々として森又は老木の小さい、群がある。その森の下には必ず神社がある。雲雀の啼く春の午前には森から森を傳うて歩けば村々の鎮守を巡拜したことになる。勿論これ等の森が何故保存されてゐるかといへば神社のためであるから神社は主にして森は従である。數百年の星霜を経た老木が村の歴史の古さを物語つてゐるのである。その老木の多くは杉であるが、あれが實によい樹であつて、特に冬になつて霜のために葉の色が赤味を帯びた時は、人間にたとへていへばかくしやくたる雄姿と形容したい趣がある。

井の頭公園を南にぬけると玉川上水に沿ふて東に向つて絶好の散歩コースがある。すゝき

や萩が上水を挾んで茂つてゐて、處々に松や櫻の大木があつて、兩岸小徑は多少の屈曲がある、多少の勾配もある。上流は勿論小金井である。あの上水を多摩川の羽村から江戸に至るまで高臺のみを通るやうに計畫した人は非凡な土木技師であつたのみならず、非凡な風景鑑賞者であつたかも知れない。

商科大學が國立へ移つてからあの方面も私の散歩區域になつた。奈良朝の國府の址である府中の町、大國魂神社もよいが、それと歴史の古さにおいて匹敵する國分寺がある。あの寺の粗末な山門と本堂は東京府下の最古の建築物ではないだらうか。多摩川の向岸に鎌倉時代の街道筋に當るといふ關戸の村があり、連光寺の丘があり、丘をすつと昇つた地點に明治大帝の記念館がある。稲田堤から連光寺までの松の生えた山道は都會の風の通はない別天地である。自分の作つた米を一里さきの水車場へ持つて行つてついで來るやうな古風な生活が残つてゐる。

拜島は府中と青梅の間の最も古い町だと思ふが、この町から多摩川を隔てた向岸に一體の絶壁があつて、その上に瀧山城址がある。北條の末裔が居て、武田信玄に攻落されたところ

だといふが、兎に角すばらしく展望の好い地點だ。脚下に多摩川と秋川の合流によつて出来た廣い河原がひろがつて、秋は黄金色の水田につゞき、對岸の桑畑の奥に狭山の丘陵が見える。天氣がよければ遙かに筑波山も見える。絶壁を下つて河原へ出れば晩秋には野菊が地面を埋めるほど咲いてゐる。こゝの野菊はえぞ菊の種類で他に見られないあでやかな濃紫の大輪の花を數多く持つ。その道の人は恐らく武藏野の名花の一つに數へられるだらう。

(經濟往來・昭和九年十一月號)

校門を辭して二十四星霜

私共は明治三十三年の卒業生で、同級會の名を三々會といふ同級會は在學中から組織されてゐるが、特別の會名がなかつた。卒業後第一回の會合を京橋の八州亭といふ洋食屋で開いた時に誰かがいひ出して三々會の名を定めた。その時から今は滿三十四年を経過してゐる。

現在會員名簿に記録せらるるもの五十六名一流會社の社長副社長取締役もある。貴衆兩院

議員もある。外交官學者教育家もある。自營の店主もある。一生の仕事を終つたとして餘生を公共に捧げるものもある。中々多彩な團體である。

明治三十三年に舊高商の本科を卒業したものは八十一名——その中十六名が専攻部に入つた——だつたが、中途退學者や、卒業のおくれたものが參加して九十餘名となる。その中死亡が三十名あつたから現在右の數となる。死亡率は三割三分位で、前後の同級會と大體同様だと思ふ。死んだ内に惜しむべき人物が多くあつた。

三々會は古くから氣のそろつたまとまりのよい會であつたが、卒業滿二十年の全國大會を開いて以來會員は一層仲よくなつた。滿二十年は如水會館の落成後間のなかつた大正九年、即ち母校が東京商科大學に昇格した年であつた。この年に吾々の卒業式の暑い日であつたことを記念すべく七月某日を選んで全國大會を催した。最初の日に新築の如水會館に昔お世話になつた神田乃武、奈佐忠行、佐野善作の三先生を招待して午餐會を開いた。(村瀬春雄、ブ Rokホイスの兩先生へも案内したが御病氣等で出席はなかつた)。この席上で吾人は商科大學へ寄附すべく金壹萬圓を同人間で贖金することを申合せた。後に實際寄附した金は豫定を超過して壹萬貳千圓に達した。學校ではこの金を新築研究室の設備費に投じた。設備は勿論大

震災によつて焼けてしまつたけれど精神的には現在國立の校舎の何處かに復興されてゐるわけである。さてこの會に集つたもの關東關西を通じて二十餘名、正式の會合を終つてから箱根へ旅行し、二日間に亘つて昔の修學旅行の氣分を味はつた。

全國大會は毎五年に開くといふ決議が出来たので第二回は大正十四年卒業滿二十五年の會を岐阜で開き、長良川鮎魚を試みた。この時は關西側が主催者であつた。然るに全國大會は餘程一同の氣に入つたものと見え、爾後は毎年關東關西が交互に主催してやらうといふことに一決、それがまた左の如く忠實に實行されてゐる。

大正十五年五月 沼津牛臥にて開く。

昭和二年 六月 京都にて開く。保津川下り。

同 三年 十月 富士五湖めぐり。

同 四年 五月 大阪にて開く。鳴門觀潮。阪急線東光院にて物故會員の法要を營む。

同 五年 八月 卒業三十年記念で特に賑かにする計畫。日光及那須に遊ぶ。

同 六年 十月 名古屋中心にて、蒲郡、犬山に開く。

同 七年 四月 伊勢にて開き、神宮參拜及志摩廻り。

同 八年 五月 京都にて開く。琵琶湖舟遊。

同 九年 十月 伊豆方面にて開く筈。

會員の卒業當時の寫眞と現在の家族一同の寫眞とを集めた記念帳を作る計畫は第一回の全國大會當時に定まつたが、三十年大會の後に一特志會員の奮發によつて實現せられ「三十二年霜」と題する大判のアルバムが各會員の家々に保存されることゝなつた。

年を取る程親しくなる。東京では毎月會合してゐる。時々昨年の死亡率などはと心細い話も出るが、若かりし頃を語りあへば又「有望なる青年」の氣分にもなる。要するに三々會は若返り會である。

(如水會報・昭和九年十月)

修學の方針

修學の方針

豫科學生夢野氏なるものあり。一日余を訪うて修學の方針を聴かんと請ふ。余欣然として之れを迎へ、對談數時に亘る。今當時の言を補綴し、其要點を録して諸君に示す。若し之に依りて多少の印象を諸君に與へ、其一部たりとも實地に行はるること有らば余の大いに喜ぶ所なり。

會見の時、余先づ問うて曰く、君新聞を讀むか。答へて曰く、否、生の中學にありし時、校長は中學生の心を學校の教課に専らならしめんことを望み、我等の新聞雜誌を讀むを好ま

ず、因て習慣性となり、時事を論ずることなし。余曰く、是甚だ不可なり、中學生は兎も角として高等専門の學校に在るものは必ず時代の大勢に注目し、時代の思想に接觸せざるべからず。特に商業學生は政治、外交、經濟、財政、技術、労働の諸方面に亘りて常に實際問題の意義及由來を研究し、學校の教課と連絡を通ぜしめるを要す。學校の教課は此の如くして初めて君の胸裏に深刻なる印象を與へ、試験一過してノートの全篇を忘盡するの奇蹟を避くべきなり。昔太宰春臺壯なりし時荻生徂徠を訪うて師事せんことを請ひしに、徂徠問ふに米の時價幾許なるを以てせり。然るに春臺經史を學ぶに専らにして時事に疎かりしかば一言の出づる所を知らずして呆然たり。是に於て徂徠一喝して去らしめ、其の後學問の方針を改め來るに至りて始めて容れて弟子となせりと云ふ。是豈に現時の青年の宜しく三思すべき所ならずや。

夢野生曰く、先生の意を了せり、而かも我等の習慣は其原因遠きに在り。今遽かに新聞を讀むも其記事について趣味を生ぜざるを如何せん。答へて曰く、趣味なくして讀むも效なし。宜しく其趣味を養ふべし。君既に中學に於て歴史と地理とを學べり。机上に日本地圖及世界地圖並に内外歴史年表を備へ、年表中近年に屬する事件の録せられざるものは之を補ひて今

年に至らしめ、かくして先づ時代の大勢を總觀し然る後毎年毎月毎日の出來事に及ばば、既に得たる歴史地理の知識と日々の事件と連絡せしむるを得べし。是趣味を養ふの途なり。かくして尙ほ解釋に苦しむことあらば毎週來りて余に問ふも亦可ならずや。

余又問ふ。君英文の戯曲小説を讀みたることありや。答へて曰く、否。然らば君は學校所定の教科書の外英文を讀みたることなしといふか。曰く然り、我等中學卒業の學力を以て外國の歴史傳記を戯曲小説等を讀むことは恐らく至難ならん。新聞雜誌と雖も容易ならず。さればとて平々凡々たる教科書類を讀むの趣味索然たるは明かなり。余曰く、君の云ふ所、中學時代にありては當れるものあらん。然れども今後は然るべからず。君等の語學を學ぶには語學試験に及第せんが爲にあらず、之に依りて新事實を知り、新思想を學ばんがためなり。故に學校教科書を學ぶを以て満足すべからず。之を利用して修養に資すべし。後年學力の進みたる時に之を爲さんといふ勿れ、今直ちに初めよ。君既に五ヶ年間英語を學び、困難なる高商入學試験にも合格したれば平易なる記事論文の讀めぬ筈なし。能はざるにあらず、爲さざるなり。今之を初むるは所謂讀書力を養ふ所以なり。讀書力を養はずして後年書を讀まんとするも恐らくは不能ならん。余の友某氏は勅任官吏なり。彼大學にあるの日、學理を考ふ

るに勉めたれども外國文の書物を讀まざりき。近時に至り頻りに新事實、新思想を知らんとするも自ら讀む力なきを以て後進大學生に讀ましめて其譯をきかんとす。而かも大學生亦多くは外國文を讀む力乏し。轉じて外國語學生に依頼するも彼等は學理の素養足らざるが故に往々誤譯に陥るの弊有り。依て僅かに高商專攻部の學生に依りて漸く讀書の目的を達しつつあり。其不便なること想ふべし。されば君等は決してこの先輩の轍を履むべからず。近時の書生或は語學を輕んじて専門學を重んずるの傾あるが如きも、彼等が學校にて學び得べき専門學の程度は頗る制限されたるものなり。之れに反して語學上眞に深き修養ありて讀書力の勝れるものは學校を去りて後に至る迄永久に新知識を吸收するを得べし。讀書力は無限の知識を開き得べき鍵なり。在學四年乃至六年、幾千頁のノートを暗誦し、且忘却するも此の鍵を握る能はずんば畢竟何の效かあらん。君是より家に歸るの途、直ちに丸善に立寄り白銀一片を投じて Home University Series の内、好む所の一卷を求めて可なり。

余又問ふ。君が體力を養ふの法如何。答へて曰く、中學にては聊か柔道を學べり。短艇、庭球、野球の如きは弊害ありとて學校より差止められたり。余曰く外國風の競技とて決して常に弊害を伴ふにあらず、現に一ツ橋の短艇の如きは最も堅實なる人格修養の具となれり。

併し余は今競技の種類の何たるを問はんとするにあらず。兎も角其何れか一を撰んで常に之を習ふべし。競戯を爲す能はざる日は散步すべし。休暇に際しては旅行すべし。四年間各四回の夏休、春休、冬休あり。其半を利用するを以て全國を周遊するに足らん。かくして體力を練らば庶くは二十世紀の最大流行病たる神經衰弱を免るを得ん。學業優等、品行方正、而して神經衰弱なるものは我輩の甚だ感服せざる人種なり。

説いて是に至る、夢野生反問して曰く、先生の言一々我肺腑をつけり。然れども學校の學課も中々に輕からず。日々のノートを整理するさへ容易ならず。良好の成績を得んとせば新聞を研究し、外國文の書を読み、運動を怠らざるが如き、夫程多くの餘暇を得ること不可能ならんを恐れざる能はず。答へて曰く、近年學業成績の點數表に依つて學生の能力を判斷し實業界の如きも其標準に基いて人を採らんとするは余の服せざる所なり。然れども世俗の意を迎へんが爲に、故らに自分の必要と信ずる以上の精力を學課のために費すは不可なり。學生は其眞の學力を進むるに必要な努力を爲せば可なり。年齢僅かに二十にして早くも出世の道を講じて自然の發展を矯めんと試むる如きケチな根性にては到底大器晩成を期すべからず。余は以上の三事を以て唯學課の餘暇に爲せば可なるものとするのみならず、少くとも學

課と同様の重みを以て之に對すべきものたるを信するなり。君以て如何となす。

夢野生は唯々として去れり。余は例の如く漂然として散歩に出でたり。

(一橋會雜誌・大正元年十二月)

一橋會員に對する希望數則

一橋會員に對する吾人の希望は廣汎にして且遠大なり。一篇の論說中に其總てを盡すが如きは固より不可能の事に屬す。此處に録する所のは過般編纂部役員諸君の會合の席にて、座談の内に述べたる意見を増補したるに過ぎず。従て事の大小輕重あるもの相錯雜し、論說の體裁を成さざるは遺憾なれども、是皆吾人が平素より懷抱する所にして決して一朝一夕の思付にあらず。願はくば之を諒せよ。

凡そ我一橋王國に籍を置くものは他より治めらるるの民たるべからず。自ら治むるの民たるべし。自ら治めんと欲せば一方に於て極力他の干涉を排斥すると同時に、他方には自己の

缺點を知りて之を矯正するの努力なかるべからず。自ら治むる力なくして干渉を拒まんとするは不正にして且不益なり。而かも自治の思想全く缺けて漠然として他の專制に甘んずるに至りては男子の本領何れにあるやを疑はざる能はず。曾て某學校入學試験に際して數百の受験者玄關前に群集し、而して其玄關の扉の固く閉鎖せられ、一人の門衛の立てるを觀る。依て何故に平素の如く門戸の開放せられざるや問へば答ふもの曰く受験者の囂然進入せんことを恐るるなりと。嗚呼、是果して中學を卒業したる我青年紳士の態度なるか。

將來日本の中堅となり其の背景となりて一世を指導すべき青年學生の群集心理にして果して此の如きものなりとせば吾人は帝國の前途の爲めに泣かざるを得ざるなり。思ふに自治は言論の能くする所にあらず、各人の胸底深き所に抜くべからざるは一片の自覺と自尊の氣骨を藏するに依りて、其天真流露の裡に自ら秩序と節制とを産み出し、進退行藏皆自治の本旨に適ふを要す。故に世界の自治國たる英國民の社會にありては學生といはず、議員といはず、職工といはず、途上の群衆といはず、何等の組織なき所に自然の秩序を生じて整然として亂るることなし。吾人は一橋王國をして英國以上の自治國たらしめんことを切望す。

自治の國民は自己の一身の權利義務を重んずると共に又國民共同の品格を揚ぐるに勉めん

とする精神なかるべからず。世に野次馬と稱せらるる徒あり。自己に直接關係なき場合に出示やばりて奔走周旋するが故に人の嫌ふ所となる。然れども若し其事柄が一國一社會の退歩墜落を防ぎ進歩向上を來すべき場合には野次馬こそ却つて大いに吾人の尊敬に値する人民なり。假令野次馬として凡人の反對を受くるも、敢て恐れざる人物にあらざれば自治の國民を導くに足らず。凡そ我が一橋會員のゼネレーションは四年毎に一變するが故に、各ゼネレーションは其四年の間に前代以上の或者を遺すの責任あり。此の責任は千幾百人中特に何人の負ふべきものといふべからず、千幾百人中の各自が其總ての爲に負ふ所なり。彼のカンニングの悪弊の如きは學校當局者の用意の深きに依て幾分か之を防止し得べしと雖も此の如きは唯外部の力に依りて不正を行はざらしむるのみ。受験者自ら發奮して之を矯正するの美なるに如かず。カンニングの事實を防止するのみならず、其勇らしからざる卑劣なる根性を矯正する所になればなり。而して多數の受験者中先づ發奮すべきものは矢張り俗に野次馬と呼べる正義の人に非らずや。然らば吾人は此の意味に於ける野次馬の大いに起らんことを切望せざる能はざるなり。

學校の目的は學生の精神及身體の發達を計るにあり。但し此の目的を達する所の手段は學

校當局の施設のみに俟つべきにあらず。講堂の講義と、運動場の體操のみに依つて此の目的を達せんとするは愚ならずや。されば學生は宜しく一橋會員、其の他の自治團體の力を利用して相互の交際を盛にすべし。雜誌の如きも此の意味に於て一橋王國の輿論を喚起し思潮を導くの機關とならざるべからず。年々笈を負うて一橋の門に入らんと試むるもの千幾百人、而して其門に入り得るもの僅に二百人なり。然らば現に在學する千四百人は皆當代の青年中少くとも中等以上の力量を具へたる人物なり。各人其趣味を異にすと雖も此の多數の内に求めたらば意氣相投するもの少からざるべし。是豈良友を得るの絶好の機會に非らずや、四年間學窓にありて一の親友を得ざるの徒は、假令其學業成績佳なりとしても其性格や知るべきのみ。

更に智的方面についていはんか。我千四百（昨明治四十四年の學校一覽に依れば專攻部、本科、豫科を合せて千四百五人、選科生四十七人、教員養成所十三人あり）の學生は日本全國即ち一道三府四十三縣より集り（特に沖繩縣の如きも四人の在學者を出し）尙ほ支那及朝鮮の代表者をも有せり。此の如く多くの地方より有爲の青年を吸収し得る所は他に幾らもあらざるべし。亦盛ならずや。若し此等のものが相互に其郷里に於て得たる特殊の實際的知識

を交換せば其效果は實に驚くべきものあるや必せり。又現に諸君が多少其利益を享けつつあるは余の信ずる所なり。然らば百尺竿頭更に一步を進めて、大規模に地方的知識を交換するも亦可ならずや。

其方法の如きは一橋會雜誌の幾頁を割て各自の寄稿を録せば即ち足れり。此の如くにして例へば農村の改良と云ふが如き又は家内工場の趨勢といふが如き、又は市町村の財政といふ如き國民的大問題に就て各地方の事情を比較研究することを得ば、是獨り學生の見識を廣むるに止らず又或は以て學者の貴重なる研究資料ともなすに足らん。此の一事小なるに似て實は然らず多年吾人の念頭にありし希望なるを以て敢て此處に記して一橋會員の一考を請はんとす。

（一橋會雜誌・第八十二號、大正元年十月）

夏休み前の對話

暫らく會はなかつた學生が夏休みで歸郷する前に訪ねて來た。今年はどういふ計畫をして

ゐるかと思ふ。学生は休暇中ではなくとも讀書の時間はずぶんあるはずだ。特に休暇中に読むなら大きいものを味つて讀んだらよからう。例へばアダム・スミスの國富論、マルクスの資本論、マアシャルの經濟原論などよく話は聞くが實は本の形を見たこともないといふ人が多い。しかし本の名だけ知つたり、形だけ見たりして喜ぶのは馬鹿なことだ。讀まない位なら見るだけ勞力が無駄になる。日本支那の古典でも平常口に口しながら實際讀んでないのが誰でもある。君は古事記を讀んだことがあるか。論語はどうだ。

しかし讀書の外には夏休みを利用したいなら見學旅行をするのがよい。暑い時には讀書よりもこの方が能率が擧がるかも知れない。自分は都會育ちで農村のことを知らないから、學生時代に農村の友人を訪ねて大いに日本經濟の知識を廣めたことがある。兎に角現在でも日本人の半分が農民であつて、しかも農村は疲弊してゐるといはれてゐるのに、その農民の生活を知らないで西洋の本ばかり讀んでもその知識は片輪だ。統計上農家一戸の平均耕作面積は一町だといふがその一町をどうして利用してゐるのか、二毛作とはどんなことか、税金は何程出するか、一家の收支は何うなるか、多少秩序を立てて觀察して見れば日本經濟の見方が

非常に具體的になつてくる。農村問題の議論が地についてくる。

海水浴に行くものは無数にあるが、漁夫の生活を觀察して來るものが何人あるか。國勢調査によると漁業有業者数は本業だけで五十五萬、その家族を入れて百五十萬となつてゐるが、其の中には昔からある沿岸の漁民が何程、鯉鮪など取りに機械船で沖へ出るものが何程、更に大汽船で遠洋へ出稼ぎするのが何程あるか、といふことが先日自分のセミナールで討論の問題になつた。これは實際重要な問題だが、これも漁村の現状を見ながら考へなければわからない。例へば漁業者中に業主と被雇者と分けてあつても、實際は日魯漁業會社のやうな大會社もあれば、原始的な船主と漁夫の漁獲物分割制度をやつてゐるものもある。かくの如く新舊混合したところに傳統的な日本の經濟生活の上に資本主義の乗込んで來た現代國民經濟の眞の姿が見られる。

時に君の家は小賣店をやつてると聞いたが君は自分の店の營業の實際を知つてゐるか。家は兄がやるから自分は知らぬでもよい、などといはずにせめて休暇中位丁稚になつて店番をやつて見たまへ。本を讀むばかりが大學生の仕事ではない。

學生に與ふ

時局と學生

我々は今や長い夏季休暇を終つて、數日の中再び國立小平に集まらうとしてゐる。武藏野には秋草の花と蟲の聲が我々を待つてゐるのである。清涼な秋を迎へて勉學修養に邁進せねばならぬ。

しかし今年の秋は例年の秋とは同じくない。非常時の秋である。一度は不擴大方針の下に局地解決が出來さうに見えた北支事變は、終に日支の全面的衝突となり、皇軍は海に陸に空に勇敢なる前進をつづけつつある。日々夜々驛頭に揚がる萬歳の聲は意氣昂然として戦地に

赴く我が兄弟を送るの聲である。一旦緩急あるに當つて忽ち一心一體となるのは日本國民の本能である。平生は何を争ふとも、既に事の起つた上は一言半句の文句もなしに斷然舉國一致することが我々日本人には出來るのである。

ただ問題はこの非常時に我々は國のため何を爲すべきかである。

この非常時に學生は國のため何を爲すべきや。問題は深刻である。眞劍なる沈思黙考に値する。今は出征を送る歡呼の聲のみ街にみちてゐるが、何れ不幸にして戦死した人々の葬儀も續々行はれるだらう。しかし現在の學生の大部分は、多分召集を受くるに至らないだらう。大學を卒業した先輩と大學に入らなかつた同輩又は後輩が生命を賭して祖國のために出陣するその中に、學生のみはその義務を延期されるのである。戦争は始まつたけれども、日本は大國なるが故に而して秩序整然たる國なるが故に學生はまだ動員されないのである。

學生よ。汝はこの特殊の境遇に處して如何にその責を果さんとするか。

問題はあくまで深刻であるが、答は簡單だ。曰く緊張して勉學せよ、緊張して心身を鍛へよ。緊張せよ。眞劍になれ。眞劍に汝の自分を盡せ。もしさうでなければ大陸の戦塵にまみれて奮闘する兄弟に對して、汝の面目を何うするか。そればかりではない。一般國民はやが

て汝を尊敬しなくなり、輕蔑するに至るであらう。

近年學生の氣風は衰へたといはれてゐる。末梢神經ばかり鋭敏になつて、勇氣膽力が消耗したといはれてゐる。功利的になり、小利口になり、社會をリードをする抱負を失つたといはれてゐる。今こそ學生がその眞劍味を、そのまじめさを、その潛勢力を取返すべき時ではないか。

(一橋新聞・昭和十二年九月六日)

新入學生に與ふ

新入生諸君が所謂試験地獄の憂鬱生活から開放されて首尾よく入學出來たことは諸君自身又は御兩親兄弟を始め學校當局者として誠に喜ばしい。しかしここで我々が特に希望したいのは今日此處で爲す宣誓署名の意味即ち商大に入學したといふ意味を十分知つて貰ひ度いといふことである。將來就職が良好であるからといふ心持で入學して來たものは、一日も早く改心して貰ひたい。傳統を當てにし暖簾にぶらさがる様な氣持では暖簾は直に價値のない

ものになつてしまふ。諸君は學校の歴史を確と知らねばならない。

一ツ橋とは徳川時代には三卿の一つの一橋家を云つたのであるが今日では商法講習所、高商、東京高商、東京商大を云ふのでこれが一族となり實に明治、大正、昭和三代にかけて政治經濟教育方面に活躍してゐる。これが暖簾の本質である。諸君は自ら一ツ橋の一分子となり一橋を通して天下國家の用に任せねばならぬのであり暖簾にぶらさがるのであつてはならない。講義はラヂオでも、テレヴィジョンでも聞ける。人間が互に切磋琢磨するには團體が必要であり、そこに學校の必要があるのである。單に講義を聞き知識を蓄積するのみであれば學校の必要性は存しない。學校は人と人とが、直接交渉をもつ點が特色でなければならぬ。明治八年以來の團結の歴史を繙き、それによつて入學の意義を知つて貰ひたい。

今日は學問するには非常な困難な時代である。東西兩文化の交流といふことは非常に六ヶ敷く又危険なものである。一概に批判なく西洋文化を輸入する時は種々な紛糾を生む。そのことはマルキシズム全盛の時代を見ても明らかである。滿洲事變以來日本自らを知れの聲が廣まり、學校教育にも一大反省が行はれたのであり、五ヶ條御誓文に仰せられた知識を世界に求めるとは、日本を徒らに西洋化することを意味するのではない。西洋文化の長をとり日

本の心を豊にするにありここに學問の複雑性がある。支那事變以來東亞の新秩序が叫ばれてゐるが學校で學問をする者は常にこの形勢に注目して行かねばならない。

かくの如く學校で爲すべきことは非常に多く日本を知り支那を知り西洋を知らねばならぬのであり、それにはサイエンティフィックアティチュードを持つことが必要である。私が滿支に旅行するのも商大が新秩序に應じて大仕事を爲す第一歩である。

(一橋新聞・昭和十四年四月二十五日號、同年四月十一日新入生に對する訓辭)

年頭の辭

瑞雲旭光の下に昭和十二年の新春を迎へ學生諸君と共に先以て我が皇室の萬歳を祝し奉り又相互の健康を祝することは吾人の最も幸福とするところである。さて私は今回圖らずも三浦博士の後を繼いで本學學長に就くこととなつたに就て此の好機會に自分の赤心を披瀝してお互の自省の資に供したいと思ふ。私は今回の就任に際して實に責任の重大なるを痛感する

ものである。蓋し我が一橋學園は尋常一様の學校にあらず、明治以來日本の實業界、官界、學界、教育界に幾多有爲の人材を送り出し、帝國の發展史上に特異の地位を占め來つたとこの學校であり、實に尊い傳統を有する國家樞要の機關である。

現在この學園に集る二千の學生は正に全國の俊秀であつて、次代の社會を背負つて立つべき使命を帯びるのである。學園は知識の切賣りをする所でなく、彼等の切磋琢磨の道場とならねばならぬ。故にこの大學に教職を奉ずる者は全員一致して至誠を以て事に當り、苟くも彼傳統を傷げざるやう一身をすてて奉仕するのであるが、その教官諸先生の世話人たる學長となつては、日夜努めて及ばざるを憂ふるのみである。しかしながら吾人はただ傳統を守るだけであつてはならぬ。凡そ傳統なるものは養ひ育てなければ滅びるものである。傳統のない文化は文化でないといふ諺があるくらゐ傳統は力強いものではあるが、一たび我々が傳統の上に眠るやうな懶惰な氣持になれば忽ちにして社會の進歩におかれてしまふ。賣家と唐様でかく三代目といふのは誠によい戒めである。我々は三代目か六代目かは知らず、常に創立者の氣分に歸つて緊張しなければならぬ。潑刺たる勇氣を奮つて前進しなければならぬ。學園には時々波瀾も起るが決して心配するに及ばない。愚痴をいはず、小事にこだはらず廣い

心で、正しく強く自信を以て進めば必ず明朝なる天地が開ける。ここに私は自ら老骨に鞭つて前進することを誓ふと共に、學生諸君の自省自戒努力奮發を期待するものである。

(一橋新聞・昭和十三年一月一日)

卒業式式辭

新卒業生に衷心よりお喜びを申し上げます。多年勉學なされ光輝ある二千六百年に當り卒業せられることはめでたいことである。諸君等の中でも豫科終了者は尙三ヶ年勉學されるのであるが、それ以外即ち學士試験合格者、専門部教員養成所卒業の諸君は、今日この校門を出で社會の實務につかれる。既に地方へ行かれた人もあるが、今日の卒業は一生の中で記念すべき忘るべからざることであり一時機を劃するものである。此の際考へてほしいことは今日の卒業を諸君以上に喜ばれてゐる方があることである。即ち御両親又はこれに代つて養育にあたられた方である。このことはよく銘記し置いてもらひたい。今日の喜びをこの方々に傳

へ、又両親又は片親をなくなされた諸君は今日は非墓參をしてほしい。そして生きてこの喜びを共に出来る人と同様にこの名譽を報告するやうに……

我々の學校は六十年の長い歴史をもち、その間にこの學校を出られた方は二萬人以上に及んでゐる。中には既に死亡され或は健在である先輩の令息が此處に學ばれ、そして又出て行かれた方もある。諸君も今度は卒業者としてこの大きな流に入るのであるが、幾多先輩の汗と血で築き上げたこの光輝ある傳統に背かないばかりでなく更に一段と光輝あらしめるやうに努力されたい。學校の名譽は永久に存続するものではなくてその時その時の人により維持され又は破壊されるから諸君の責任は重大である。毎年繰返すことではあるが私は學校は河の流れの如きものであると思ふ。學生は絶えず流れ行く河水であり、我々教員は岸の柳の如きものである。先には多くの先輩、後には更に多くの後輩を有つてゐる諸君は即ち此の流れの一員なのである。最後に卒業生諸君への餞けとして次の文句を贈る。これは勝さんの云はれた言葉で私は學生時代からこれを座右銘とし折にふれては思ひ自ら戒めたものである。將來役にたつかも知れぬから次に述べ私の送別の言葉とする。『自處超然、處人靄然、有事蔚然、無事澄然、得意淡然、失意平然』

(一橋新聞・三〇五號、昭和十五年四月十日)

高文受験者に與ふ

——理論を立て、文章に上達せよ——

事變以來高文の受験者が殖えたと思つてゐたら本年は寧ろ減り氣味にあるといふのは意外である。經濟界の統制熱が起り、官吏の仕事は益々多忙となり、且又重要性が増して來る。官僚獨善でも困るが官吏もだん／＼經濟狀態の實際經驗を積まねば仕事にも落ちが多くなることと思ふ。今日の官吏は何と云つても今までの役人が知らないで濟んだことをどん／＼やつて行かねばならぬ。斯かる時代においてどうして高等試験受験者が少ないのか全く不思議である。

これからの青年は官吏になるにも、實業界に入るにしても政治家的な物の見方といふことが是非なくてはならないのである。だから行政科などはもつと／＼受験者が多くならねばならぬし、又多くなることを希望してゐる次第である。

受験者の心構へといふ様なものに就いては他の委員から既に諸君は何回となく本誌を通じて聞いたことであらう。試験官は決して無理な問題を出して受験者を苦しめようなどとは毛頭考へて居ないのであるから、諸君は各自が受験する學科について充分咀嚼して居れば立派に答案が書ける筈である。併しそこには全體の理論の構成を大掴みにする力と細かい點の論理の筋を誤らないといふことが必要な事は申す迄もない。

いろ／＼の事實を知つてゐるといふことは試験に臨んで非常に有利なことである。時事問題に注意することは甚だ必要な事であるが、それについて根本的に最も肝心なことは理論の筋を立てると云ふことである。口述試験に例を取るならば僅かに十分か十五分の間答の間に時々前後の矛盾したやうなことを言つてしまふものがあるが、これはつまり勉強の仕方に統一がなくて知識がばら／＼になつてゐること、即ち今述べた理論の筋を立てることを平素の勉強において閑却してゐるためである。理論の筋を立てる頭即ち纏りをつける頭といふものはインテリのインテリたる所以であつて、如何なる場合にも働き出し得るものでなければならぬ。

試験の時に限らず、普通の理解力や普通の判斷力といふものは、小學校から中學校の時代を

通じて絶えず養はれて来たものであるから、それを充分に働かせるやうに心懸けねばならない。筆記試験の答案を見て考へさせられることは、文章をよく書く人が如何にも少ないといふことがある。中にはこれでよく中學が卒業出来たと思ふやうな下手な者もゐる。達意の文章を書くといふことは官界に於ても、實業界に於ても非常に重要な武器である。答案は之を見る人が僅かに推測して理解し得る程度のもてはいけない。何人が讀んでも解るやうな答案でなくてはならぬ。

口述試験の際における口の利き方も同じことで、言ふことが順序正しく述べられ、訊く人をして容易に要領を得させるやうに答辯しなければならぬ。一體日本人が平素會話に使つてゐる言葉といふものは殆んど片言のやうなもので、半ば聴く人の推察に訴へてゐるやうなことが多いのである。だから演説などでもこれを速記して見るとその結果は支離滅裂な文章になつてしまふといふやうな例が澤山あるが、これではいけないのである。複雑な事でも順序を立てて判りよく説明し得る表現の力がなければならない。

曾て故陸奥宗光伯が政治家になることは先づ文章と演説を稽古せねばならないと言はれたことがあるが、私は今日に於てもこれは間違ひでないことと思つてゐる。(談)

(受験界・昭和十四年七月號)

大學と社會

「企業と社會」宣言

學者は實際を知らず、實際家は學問を知らず。政治は産業を離れ、産業は社會に背く。是實に産業革命の波濤に漂へる現代日本の惱みではないか。吾人は此の混沌裡にあつて、企業より社會を望み、社會より企業を覗ひ、眼前の細事に捕はれず又空想の影を逐はず、大所高所より滔々たる時勢の潮流を凝視して、世界に於ける新日本建設の原理を探らんとする。吾人の惡む所は虚偽と雷同とであり、吾人の戒むる所は煩瑣と冗長とである。吾人が訴ふる所の讀者は純眞にして且總明なる滿天下の青年識者である。

(大正十五年四月)

大學の社會的使命

本誌發行の前に其表題を何とするかの相談があつた時に私は「大學と社會」がよからうといつた。それは咄嗟の思ひ付であつて、つまり大學の先生方が實社會に向つて呼びかけるための雜誌だからといふに過ぎなかつた。その思ひ付の一案が同人の容るる所となつたことは誠に光榮の至りである。然るに愈々創刊號の編輯となつてから、私が偶然名付親になつたの理由で大學の社會的使命につき一文を草すべき命令を受けたのは重ね々光榮ではあるが聊か當惑する次第である。併しながら本誌は執筆者をして軽い氣持で簡單率直に各自平生の意見を發表せしむ所に特色を作らんとするのだから、私もそのつもりで前記の問題を取扱つて見る。

世間には大學の顛落とか没落とかの説があり、又その反對論もあると聞くが、私の意見は至極單純なものである。商科大學の諸君が「大學と社會」を刊行するの計畫を立て、刀江書

院が其の金錢的責任を引受けたといふことはそれ自身大學の没落せざる證據である。大學は社會に向つて語るべきものを有つと自信すればこそ斯様な計畫を立て、又書店はそれに對する一般社會の興味があると思つたから引受けたのであらう。勿論一小雜誌の發行だけで大學の使命が盡きる譯でないが、此の一事は偶々以つて今の大學が没落どころでなくして、大に爲すあるべきを示してゐるといふのである。

没落論をなす人の説には、日本の大學は曾て明治時代において封建的な社會を立憲的な自由主義の社會に導いて行くといふ文化的使命を有してゐるが、今では資本主義が行詰りになつたに拘らず次に來るべき社會主義の新思想を抑壓してゐるから、やがて其の文化的意義を失ふに至るといふらしい。一應尤もな議論である。如何にも大學で思想言論の自由を抑壓されれば大學は文化の發達に貢獻することは出來なくなる。但し問題は左程新思想が抑壓されてゐるか否かにある。

私を見る所では今の日本の大學では思想言論の自由は充分に維持されてゐるともいへないけれども、明治時代に比すれば餘程自由になつてゐる。特に官立大學においてさうである。國權主義の華やかなりし明治の二十年代三十年代には自由民権を口にするのは到底教授に

はなれなかつたらう。而して大學の講堂では教授が口授する所の一言一句を學生は一生懸命に筆記して試験の時には其一言一句を間違なく書かなければ點數は取れなかつた。その點數が何十何點何分まで明細につけられて、卒業生の評價が出来たのだ。それは寒暖計のやうに細いものであつたのだ。

x

あれから思へば今は確かに自由になつてゐる。世間で危険思想と目されてゐる所のマルキシズムを教授が唱へても、ただ唱へるだけなら放逐されない。マルキシズムは實踐だと稱しその結果法に觸れる場合に問題とされるのだ。革命戦術の演習などをやつた時に處分するといふことになつてゐる。但し實際において研究と實踐との境界は明確でないからそこには學内及學外の種々の關係によつて大いに手加減の行はるる餘地がある。

我國の有力者中に、マルキシズムは日本の國體に反し、産業組織の根本を破壊せんとする悪思想だから一歩たりとも大學へ入れてはならぬ、そのやうな主義を取る所の教授は免職せねばならぬと信ずる人が少くないのだから大學のみ頑張るわけにも行かない。

大學をして最高學府たる職分を盡さしむるためには一概に新思想を抑壓してはならぬ。西

洋では昔公認宗教の教義に反する所の學者を彈壓することになつてゐたけれども、十八世紀以來「大學の自由」が認められ、大學教授はその思想の故を以つて罷免されることなしとの原則が立てられたのである。けれどもこの大學の自由といふ原則があるからといつて教授は如何に與太を飛ばしてもよい、嘘八百勝手次第といふわけには行かない。況や教壇を實際運動の道具に使ふが如きは到底許さるべきことでないから、事實問題の判断は中々困難だ。ロシアにはこのやうな自由は認められる筈もないが、それをやかましくいふ歐米の自由國でも現に時々之に關して問題が起る。十數年前米國の學者の團體は大學教授其言論のために罷免される時は罷免の理由を書面にて示さるべしとの決議をしたことがある。私も今まで我國の大學でマルキシズム等の關係から教授のやめさせられた場合にその事情の明かにされないことを遺憾としたものである。

然るに大學が文化的使命を失ふの危険は思想問題の方面のみに存するのではない。教授及學生の怠慢も亦確かに大學没落の重大原因である。アダム・スミスが國富論中にかいたやうに大に大學教授の地位の保證されてゐるために怠慢に流るる弊なしと斷言することは出来な

るけれども、一旦教職に就いた以上、停年までは安心だといつて十年二十年一日の如く手垢のついたノートを繰返す先生と、又試験の時に甲さへ與へられれば、如何なる陳腐な教授でも歓迎するやうな學生とが、互に相寛容し合ふとしたら大學は有れども無きに等しいだらう。吾々の大いに省るべき所である。

併しながら近年何れの大學でも學生の聽講が著しく減少したといふ事實を見て、それこそ教授及學生の怠慢だと速断することも出来ない。それには通信技術の發達が影響してゐるのである。將來ラヂオとテレヴィジョンが大いに發達したら多數の學生が一堂に集まつて講義を聽く必要はなくなるに相違ないが、現在でもプリントとかいふ便利なものが出來てゐる。

毎年の講義のノートは謄寫版に刷つて學生に配布されるのだ。従つて學生は聽講を休んでも試験に落第しない位のこと出来る。講義されただけをそのまま試験に答案するのが大學生の仕事ならこれで充分目的を達する。プリントは不完全なラヂオである。

プリントが學生の聽講を少くするばかりでない。印刷出版の進歩はやがて大學そのものの價値を低くするだらう。昔なら大學に入らなければ學び得なかつたやうな知識が近頃では圓本や講義録で盛に普及されるやうになつた。青年は勉強さへすれば大學生にならずとも學士

以上の學問をすることが容易に出来るのみならず、學者の側でも書物を著して大量生産にして賣らせば先生と呼ばれる程の馬鹿にならないで月給以上の収入が得られ且研究費も得られる。立派な素質をもつた學者は大學以外に身を立て得る。自然科学は別だが、經濟學などでは昔からリカルドーやミルの如き大學者が學外に出てゐる。その可能性は現代に於て益々大となりつつある。大學教授が普通の役者なら學外の學者は映畫俳優だ。トーキー時代は映畫俳優のものだ。

けれどもこの故を以つて大學は廢れるかといへば決してさうではない。抑々大學は教授及學生の研究機關だといふが、それは單なる講義の場所であり、又各教授の研究室の貸家たるに止まるべきものではない。教授及學生に國中の俊才を集めて、その人々の人的交際によつて自由自在に研究をなし、且その研究の結果を代々永久に積み重ねてゆく。それが眞の大學である。本來講義本位でなくしてゼミナール本位たるべきものだ。講堂に集る學生の數の幾百に達するといふが如きは大學の盛況を示すに足らない。寧ろ讀書會茶話會によつて講義以上の貴い仕事が出来ゝ。講義の切賣は出版資本主義に敵せず、卒業證書の市價も就職難によつて暴落するが、大學の使命はそれによつて益々明瞭になる。(大學と社會・昭和六年四月)

一橋論叢創刊の辭

我が國の大學の目的は國家に須要なる學術を教授し、且其の蘊奥を攻究し、兼て學生の人格の陶冶、國家思想の涵養を期するにあり。幾百千の青年俊秀を全國より集め來つて一大團體となし、獨り教授と學生との關係に止まらず、教授と教授、學生と學生との相互の人的交際の間に眞學なる學問研究の雰圍氣を發生せしめ、以つて一國文化の興隆に資し、次代社會の指導者たるべき人材を輩出せしめることは是れ即ち國家が大學に期待するところなりと信ず。而して一個の學風は歴史的傳統となり、研究の成果は師弟相承けて層々無限の蓄積となり、總て人類の文化に寄與するを以つて理想となす。曾て大學に學びたるもの、現に學界にあらざるも、實際上の經驗を提げて大學に於ける教育及び研究を援助するの功績も亦頗る大なるものあるべし。然るに人的交際には時間と場所との制限あり、印刷出版の手段を以つて其の缺陷を補ふを要す。我が東京商科大学には曾て四季刊として「商學研究」を編纂したること

あり、又現在毎年二三回「研究年報」を出して同人の研究を公表し、幸にして學界の認むるところとなりたれども、長文の研究報告は特殊の専門學者に資料を提供する所以にして、學内一般の論壇となすに便ならず。別に月刊學術雜誌の刊行を企てたる次第なり。今や我が國は未曾有の事變に遭遇し、國民を擧げて君國に報ぜんとする時、新學徒の努力研究を要する事項も亦益々多端ならんとす。吾人の微力が國家的大業の一端に觸るるを得ば實に望外の幸とするところなり。

(昭和十三年一月)

大學長就任に際して

今夕は三浦前學長ならびに私のために盛宴を催して下さいまして、誠に感謝に堪へませぬ。實は昨年の暮に三浦君から「おれの火消役もやつと濟んだから今度はお前の番だ」と言はれて、非常に當惑したのであります。私は生來事務的な方面は一向不得手でありまして、ただ學究生活のみを送つて來た人間であります。その私に學長をやれとは甚だ當惑せざるを得

ない。かう思つて固く辞退したのでありますが、どうしてもやれといふ三浦君のおすすめでもあり、且は先輩諸氏も激励して下さいましたので、遂に不敏をも顧みず重大責任を負ふ決心をした譯であります。

申すまでもなく商大はただの學校ではない。日本の代表的機關である。で、これは非常な光榮であると同時に、又重大な責任を負ふ事になるので心配で堪らないのであります。どうか皆様の御援助によりまして大過なく職務を盡したいと念する次第であります。何分よろしく願ひます。

私は今年の正月、ある田舎の町を散歩して居ります際、自分と同じやうな一つの存在に出會うたのであります。それは初荷の馬であります。これを見た際、あの東北又は北海道あたりの廣漠たる原野で自由に育つたところの馬が、都に連れられて来て大きな馬具を負はされ、荷を曳かされるといふ事を考へてうたた同情に堪へない感じがしたのであります。

しかし、その歸途私はかう考へました。即ち私の場合、馬は馬でも神馬になつたやうな氣がしたのであります。一つ誠心誠意、神馬の氣持で神に仕へて行かうといふ氣になつたのであります。

今までは野馬と同じ氣分で、好きな事をして三十年を暮して参りました。これからは神に仕へる敬虔な氣持でやつて行かねばならぬ、と考へたのであります。どうか縮尻があつたら御注意願ひたく、又縮尻のないやうひたすら御鞭撻を願ふ次第であります。

尙、田中理事長から只今、私の學士院會員となつた事に對しての御祝辭を受けましたが、それは私が商大で勉強さして貰つたためにかういふ推薦になつたのだと思ひますから、母校に對して感謝の念の外はない譯であります。

兎に角、この際は神馬になつたつもりで大いに努めて行く考へでありますから、どうかよろしく御願ひする次第であります。

(如水會報・昭和十二年二月)

三浦博士を語る

自分の最も尊敬する三浦前學長の胸像除幕式に際し一言を述べるとは誠に喜ばしきことであります。昨年來學生諸君の間に佐野前々學長と兩先生の記念物を學内に設けたいといふ

熱心な希望が起り計畫は著々進行しました。佐野先生の分は如水會の先輩の企てである記念事業會に合流することとなり、三浦先生の分は全部學生の手で實行することとなりました。私は一橋會長としては學生諸君を代表してこの銅像を學校へ寄附し、學長としては喜んでその寄附を受ける次第であります。

三浦先生のために特別の記念物を一橋學園に設けることは固より當然のことでもあります。先生の商大に對する功績は學者としても又學園の建設者としても實に拔群であります。學者としては明治四十年代の初めにドイツの文明史の考へ方を日本の學界に導き入れられました。先生は博學にしてしかも論理の透徹を兼ね、細心にしてしかも大局を攬むといふ、凡そ學者として非凡な才能を具へられて居りますから御自身でも立派な仕事をなされ、又學界にも大きな刺戟を與へられました。先生の學風はあまり地味であつて著書の如きも殆んどして居られませんが、その個人的の勢力は大きいのであります。明治三十六年にドイツに行かれてから確か七年の間研究に没頭せられ、ライプチヒに最も長く居られたので多くの留學生の仲間で三浦さんをライプチヒ村長と呼んでゐました。ドイツへ留學するものは多くはこの村長を訪ねて忠告を受けたのです。故に三浦さんには學者の先生、先生の先生としての働きの

あるので、それはライプチヒ以來今日に及んでゐます。その意味において日本學界の指導者であります。

次に一橋學園の建設者としての三浦さんであります。右の如く學者として卓越されたといふことはそれ自身學園の地位を高める力をもつてゐました。商大が高等商業であつた時代に或先輩が一橋でも生えぬきの教授の中から四五人の博士が出れば大學に昇格すると豫言しましたが、事實福田、村瀬、關、佐野、津村それから三浦、左右田等の諸博士が續々輩出しましたとき日本學界における一橋の地位は確立されたのであります。しかし三浦先生の功績はそれだけでなく、直接學校の行政上に參畫されたことも多いのです。學生諸君は近年の事件の後始末の功績だけを見るかも知れないが、先生の苦心は實に四十年來のことであり、昇格前後において記憶すべきことが數々あります。但し何といつても先生が身命を堵して學校のために働かれたのは最近の學長時代でありませう。態々山形から出て來て騒動の渦巻の中に飛込まれたのは先生の愛校者たる至誠が然らしめたものと思ひます。而して學校へ來られてからの御苦勞はとてここではお話の出來ない程度のものでありまして、特に先生の辛抱の強いことは敬服の至りであります。

學園の恩人の胸像は既に幾つか出来ましたが壽像は三浦先生のが始めてであります。又この壽像の作製が學生の側から企てられ、學生の手で完成されたことも前例がありません。かくの如く先生の常に愛される學生の力一つでこの胸像が出来たことは恐らく先生のお氣持に譬つたり來るのではないかと考へます。

先生には還曆の後も益々御健康で専門の文明史の研究をすすめられ、學校でも講義をして下されますが、この上とも先生の先生、學者の先生として我々を御指導下さるやうお願致します。年は幾歳になつても倦むことを知らざる御研究を以て模範を示されることを祈つて止みません。

(一橋新聞・昭和十三年三月十日號、三浦前學長銅像除幕式の式辭)

村田省藏君と松村光三君の榮任を祝して

今日は學校に教授會があつたもんですから大へん遅くなりましたが、せめて村田、松村兩君に御挨拶だけでも申し上げたいと思つて罷り出たのであります。司會者から別に名指しが

ありませんけれども、私は今日御招待されました村田君の同級の一人でありまして、この際、三々會を代表してお祝を申述べるやうに連中から命令されたので、御迷惑とは思ひますが一言させて頂きたいのであります。

松村君はかねてから衆議院における經濟知識の持主として、益々重きを爲し、今回は大藏次官といふ、多くの政務官の中でも重要な職務に就されましたことは、まことに慶賀に堪へません。同君は前に齋藤内閣のときに參與官になられて、その方面に経験を積まれましたが、今回は國策の中心を爲す所の大藏商工の連絡に相成ることと思ふので、實に御苦勞千萬であります。それだけにお働き甲斐も大きいだらうと推測致し、大いに御奮發を希望する次第であります。

村田君が此度の勅選議員に成られたといふことは、我々同級の仲間として非常に喜んで居ることは申す迄ありません。然し勿論ただ議員になつたから喜ぶといふわけぢやない、その勅選せられるやうになつた迄の一方ならぬ努力が酬いられたといふことを喜ぶのであります。先刻御當人から、御話がありましたやうに、自分は實業家として仕事をするために志を立てて來た、だからその外のことにはあまり手を出さない、といふお考へで來られたのであ

りますが、それが實に徹底的に實行されてゐるのであります。學校を卒業されたとき、直ちに大阪商船會社に入られまして、それから以來吾々は三十三年に出たので、西暦でいへば一九〇〇年、二十世紀劈頭に學校を出た者であります。それ以來三十九年、終始一貫海運業に従事してゐる、その間に色々困難にも善處せられ、本當に大海運業の基礎を築き育てて來られました。この意味において文字通りの終始一貫であります。昨年商工大臣になれといふ勧めに對して辭退されたのもそのためであります。辭退した方が自分の天職に忠なるものだといふ信念を以つてやられたことと推測致します。此の如く若い時から一つの仕事に精力を集中致しまして、學校卒業當時の夢をそのまま立派になし遂げられ、又現に益々その道に精進されるといふことは、これ程愉快なことはないだらうと思ひます。そればかりでなしに、その努力が世間に認められまして勅選の榮譽を與へられるといふに至りましては、まことに喜ばしい限りであります。吾々は無條件にこの度のことをお祝ひ致し度いのであります。然し酬いられるといふことは、それで仕事が終わつたのではない、村田君は商船の社長であられるばかりでなく船主協會の會長であられる。日本海運業の總元締でありますから、これから未だ未だ御盡力になることと思ひます。今年多分六十二だと思ひますが、七十二になつても

九十二になつても、百二になつても、雀百まで踊りを忘れずに御活動になりますことを希望致してやまないものであります。

聊か祝辭を述べる次第であります。

(昭和十四年一月、如水會における村田、松村兩氏榮任祝賀會における挨拶)

入學試験

國立は中央線國分寺と立川の間に出來た新驛で商科大學に用のある人々の外にあまり多くの乗り降りはない。その驛が毎年三月彼岸の前後になると日々數千人の旅客を吞吐するので恰かも花見の名所のやうに臨時の切符賣場や出入口を作る例になつてゐる。それは入學試験の受験生が殺到するからだ。受験ばかりではない。その應援の連中たる年長の友人、兄、母、姉等が押寄せるからだ。試験の日にはどの教室も一ぱいに人が入つてゐるのだが、屋内は靜肅そのものだ。千幾百人の十七八歳の少年が机にかちりついて必死になつて頭をひねつてゐ

る。稀には腦貧血を起すのもあるから學校では醫務室を用意しなければならぬ。成績發表の日には受験者の番號が張り出されるが、それを見に来る人達の眼光はけい／＼として、一種の臭味を帯びてゐる。

以上は受験者の側だが、試験をする側も仲々容易なものではない。千幾枚の答案を四五日中に審査する十數名の教官は受験者同様に必死奮闘を要する。又諸科目の採點を集めて、それと引合せて中學の内申書を一々點檢する仕事もあり、第一次の試験で合格圏内に入つたものを一人づつ呼出して身體検査を行ひ、口頭試問を行ふ仕事もある。何れも朝から夕まで幾日かを通じて、同じやうなことを繰返すのだからたまらない。しかも人の子の運命にかかはる大切な仕事だから人知れぬ氣苦勞がある。内部から見ると試験に苦しむのは受験生ばかりではない。

かやうにして年々歳々得意と失意、喜劇と悲劇が幾組となく出来るのだが、抑々この入學試験を何のために行ふかといへば、要するに大學は全社會の青年の中から俊秀を拾ひあげて特殊高等の教育を施し次代の指導者を作らうとするのだ。恰かも多摩川の河原で砂利を採る機械のやうに無數の小石の中から比較的少數の質の優れた石を選び出さうとするのが入學試

験だ。明治時代から同様の方法で學校は人材を集めて教育しては社會に送り出した。その結果として有能な官吏や實業家が輩出して今日の日本を築き上げたのだ。

しかるに近年は試験の競争があまりに甚だしくなつたので、その弊害を指摘する聲が漸く高くなつて來た。曰く入學試験は知識偏重の源である。曰く暗記力ばかり獎勵して獨創力を失はしめるものである。曰く青年の元氣を萎縮せしめ、體位の下落を來たす惡制度である、といふことになつて來た。實際何とかしなければならぬ状態になつて來た。特に近頃は大學や高等學校のみでなく中等學校の入學にも激烈な競争試験が行はれる。十二三の子供の時から試験の苦勞をさせるのは確かに試験地獄といはざるを得ない。だから神經ばかり鋭くして吐のすわらない人間がやたらに出て來る。何とかしなければ日本は青白きインテリの充滿する國になつてしまふ。

そこでこの時弊を如何にして矯正するかといふに、誰に問うて見ても仲々名案はない。しかし大きく擱んで見れば行き方は二つある。しかも何れもやつて出來ないことではない。第一は學制改革によつて入學試験の度數を少くすること。先づ學區制か何かで中等學校の入試を全廢することだ。アメリカでは誰でも中學へ行きたがるけれども入試といふものはない。

公立の粒のそろつた中學が十分に設けられてゐるからだと思ふ。次は高等學校を七年制にするか又は大學豫科にして上下の連絡を簡單にすればよい。中學、高等學校、大學と學校の等級が進む度毎に試験を受け、更に大學を出てから文官試験を受けるなどはあまり煩はしい。抑々試験なるものは汝は何をなし得るかと問ふのでなくして、汝はこれ／＼の事を知つてゐるかを問ふのだから、試験目當の勉學が過ぎれば獨創力はすりへらされる。

第二の道は試験の方法を改めて暗記力以上に觀察力や推理の力を試すやうにし、且身體検査をやかましくすることだ。

競争試験のあまり激烈なのはよくないけれども、青年時代に一度は關門を設けて努力奮闘させるのも必要である。

難關に遭遇して一度は失敗し更に勇を鼓して捲土重來終にそれを突破したものは必ずそれだけの修養を積むのだ。

或子供が中學を卒業した後一年間補習科で苦勞すると人物が上がるといつたのを聞いて成程と思つたことがある。但し試験の方法が問題であつて、その改良は仲々一朝一夕には出來まい。

大いに工夫をこらして大いに経験を積まなければならぬ。勿論メンタルテストのやうなことをやつて、それが又一種の型になつてしまふやうでは何にもならない。更に中學時代の學業及素行の報告は大いに利用の餘地があり、改良の餘地もある。

ここまで書いて來る間に話が甚だしく重苦しくなつてしまつた。自分は隨筆をかくつもりで筆を取つたことを忘れてゐたらしい。つまり入學試験といふものは隨筆の中に取扱ふにはあまりに大きく、あまりに深酷な問題なのだ。

(科學主義工業・昭和十三年五月)

人物養成の問題

一ヶ月の滿支視察旅行を終つて歸ると會ふ人ごとに感想を問はれる。當面の問題としては北に聯銀券の問題があり、南に揚子江開放問題がある。その外色々問題がある。併しながらこれを更に長い目で見ると東亞大陸に活動すべき人物養成の問題が頗る鮮明に浮び上つて來る。今回の事變により日本國民は實に重大な世界史的使命を負うた事になるので、この使命

の遂行は正にセネレイションを要するのである。それには用ふべき人物の養成から準備してかからなければ駄目である。支那は偉大なる農業國であり、而も小農の國である。農村には勞働力は幾らでもある。それが現に苦力となつて滿洲その他へ流出して來るのだ。日本は之に對し技術と經營の力を供給しなければならぬ。日支の提携を煎じつめれば支那の資源及勞働力と日本の技術及經營との提携である。幸にして日本のインテリ層は明治以來の教育の結果充分に發達してゐる。ただ今までのところ日本の學問教育のやり方は主として西洋に向つてゐた。知識を西洋に求め、やがては西洋に負けないやうな國力を作らうといふのが明治・大正の心構へであつた。今の大學教授は大部分歐米へ留學した人々だが支那へ旅行した人は極めて少い。支那は歐洲通ひの郵船で寄港するだけのことであつた。中には支那を特に研究する人があつたけれどもそれは支那専門の學者の仕事であつて普通の學者としては支那を知らないでもよかつたのである。従つて青年學者の注意も概して支那には向いてゐなかつた。これでは勿論いけない。學者、學生の東亞に對する關心を高め、研究心を刺戟することが大いに必要である。然らば如何にしてその目的を達するか。近頃の流行は興亞科とか支那科とかの特別講義を開き又は特別の學級を組織する方向に向つてゐるが、これは看板だけになり

易い。寧ろ全體の研究教育の方向を大陸に向ける事が肝要と思ふ。(自由通商、昭和十四年七月)

大陸に活躍する如水會員

先般助教授の小田橋君を伴ひ學事視察を主として滿洲から北支、中支と旅行したが、その際到處で如水會員諸氏のきつい御世話になつたことは誠に感謝に堪へない所である。これは決して今回に限つたことでなく、海外を旅行する際いつも心から歓迎しお世話して下さるのと同窓の方々であつて一ツ橋の有難さを沁々と體得するを常としたが、今回も矢張りホテルや自動車の手配から、視察すべき場所、面會すべき人々との打合せ迄、如水會の方々がすつかり準備して置いて下さつたから、私達はただそのプログラムに従つて旅行を続けさへすれば、それで充分の視察が出来たのである。僅か一ヶ月といふ短時日の間に、あれだけの廣い範圍を飛び歩いて、而も相當の成果を收め得たと自負し得るのは、如水會員諸氏の御親切に負ふ所頗る大なるものありと感謝してゐる次第である。だから歸京したとき友人達から、

旅の疲れで瘦せたかと思つたのに却つて肉付がよくなつた、といはれた位である。

私達が大连へ上陸する際、來訪の新聞記者に對し私は「日本は現在未曾有の大事變に遭遇してゐるが、多年海外の第一線に活動する人材を輩出して來た我が東京商科大學として、この際大いに考慮すべき點多々あるが故に、現地の實情を視察すると共に其處に現に活躍しつつある官民有力者に會つて御意見を伺ひ、以つて時局に即應する教育方針樹立に資したいと思つて大陸に渡つた次第である」と述べたのであるが、その日の夕刊では、私が「現地に活躍する同窓を激勵するために」渡滿したと大々的に報道した。そのために大连の如水會支部歓迎會席上で右の次第を述べ、私は寧ろ大陸に活動されてゐた各位から激勵されるために來たのだと語つたのであるが、實際その後私は到る處で激勵されたのである。それ程大陸に活動されてゐる各位は元氣で愉快で潑刺としてゐた。今回の旅行で訪問したのは大连を振り出しに鞍山、奉天、新京、天津、北京、青島、上海、漢口、南京といふ如き大都會のみであつたから、南京を除いては何處にも多數の如水會員が居られ、私はこの人達に歓迎され、お世話になり、激勵されて來たわけである。哈爾濱と張家口は旅程の都合上割愛せざるを得なかつたが、これは今でも残念に思つてゐる。

今回私達が歩いた地方にどの位の同窓が活動してゐるか試みに昭和十四年の如水會名簿によつて數へて見たところ、昭和十三年十一月編纂のこの名簿では、關東州に一五七名、滿洲國に二五四名、香港を包含した支那各地に二〇七名、合計六一八名となる。約一萬の會員の六%が居られるわけである。然し私達が旅行した四月五月には卒業生も加つて居るし、大陸における會員は急速な勢で増加して居つて、歓迎の席上で紹介される轉出會員と新人會員の數ではどこでも後者が斷然前者を超え、而も鞍山、北京の如く事實上の支部發會式に列し得たやうな所もあるから、現在では或は八百名以上になつてゐるのではあるまいか。

大连には百二十名の會員が居るといふやうに聞いたが、實は去來が激しく正確な數は不明とのことである。ここは前から如水會員の多い所で、支部の設立も明治四十一年に溯ること出来る。關東州の一五七名といふ名簿の數は、或は現在でも正鵠に近いのしか知れぬ。

滿洲國內の如水會員の増加率は素晴らしいもので、私達が歩いた都市は何れもその著しいものである。殊に鞍山などは、在住會員の殆ど全部が昭和製鋼所の社員であるが、昭和十三年十一月現在の名簿で僅か九名であつたのがこの四月には二十名を越え、恰度私の訪問を機に支部が設立された程である。奉天も名簿では六二名しか居らぬが、私達の頂戴した支部名

簿には出入を加除して現在六八名となつてゐる。奉天では所謂鐵西區の工業地域が躍進を續けてゐるので尙益々増加するであらうといつてゐた。新京は増加率においてこそ鞍山に及ばないが、其の基数が大きいので、現在海外にある支部の中最も大きいのではないかと思ふ。如水會名簿で九七名とあるが、今年四月末には一三二名を數へるさうである。この外滿洲國では訪問出來なかつたハルビンに二九名、安東に一一名、撫順に八名、營口に六名、吉林に五名（何れも如水會名簿による）等々實に到る處に會員が働いてゐる。

民國に渡つては何といつても上海、天津に多い。天津には名簿では五一名であるが、私達の頂いた支部名簿には六〇名とあり、席上でのお話では八〇名となつてゐる由で、流石に産業貿易の中心地であるだけ北支では最も多い。然しその増加の勢からいへば矢張り北京が第一で、如水會名簿には僅か一三名しか居らぬが、これは事變直後の状態であつて、現在では三十名を數へる由、ここでも歓迎會席上支部設置を決議されたことが鞍山と共に忘れられない印象となつてゐる。青島でも矢張り如水會名簿の一七名を遙かに超えて三〇名近くの會員に歓迎されたのである。

中支では何といつても上海が斷然多い。如水會名簿の九四名も少くないが、最近は一時内

地に歸つてゐた人達も多く歸來して百名を超えてゐることは勿論、この頃では新京、大連に肉迫してゐることと思ふ。漢口は昨年十一月には未だ戰禍の巷であつたから、名簿には僅か四名と記されてゐるが、ここでも會員は二〇名ほど居るやうになつた。漢口は現在急増しつつある所だから更に増加することと思ふ。南京には三名となつてゐるが、連絡の不首尾のために残念ながらもお目にかかることが出來なかつた。この外支那各地には香港の一二名、濟南、張家口の各二名等（何れも如水會名簿による）その他各地に散在してゐる。實際には如水會名簿にあるより遙かに多くの數が、多くの土地に居るであらうことは、今回の旅行地域の經驗からだけでも容易に領けるところである。

各地でお目にかかつた方達から判斷して大陸にある如水會員の職業は、やはり貿易關係を最大とし、次いで銀行方面が多いやうに思ふ。新京支部員の勤先で、中央銀行と日滿商事が斷然群を抜いてゐるなど此の適例である。勿論その他に工業、鑛業、交通業、官界、學界にも可なり多くの人材を送つてゐる。新京で私は此等方面に勤務してゐる方々に座談會といふ形式で滿洲事情の講習を受けたが如水會員のお話を承れば、それだけで凡べて知り度いと思ふ事を教へて頂けると思つた。これは新京に限つたことでなく、其の他の土地でも同様であ

つて、如水會員の活動の舞臺が廣範圍になつて來たことを物語るのである。然しながら、それでも尙私は官界を始めとして、鑛工業、交通業等に卒業生が少いのは淋しく思つた。殊に滿鐵に勤める者が従前少かつたことは、現在の如き時局に當面して見ると聊か物足らないのである。従前から内地にある大きな銀行會社としては滿鐵以外にないのであるから、その他の如水會員は何れも内地の銀行會社の出張員といふ形で大陸に渡つたわけで、従つて大陸に永く居た者は比較的少いのである。勿論父祖の代から大陸に住んで、ここから一ツ橋へ留學したといふ形の生粹の大陸人も少しは見受ける。然し最近大陸に増加した如水會員は大陸において、(一)大陸にある支店出張所在勤となつた者、(二)最近設立の大陸にある會社へ轉職又は新に就職せる者が多いやうである。支店出張所の長は多く一橋人の占める所だが、大陸の諸會社には特殊會社が多くその首脳部には案外一橋人が少いやうに思つた。しかし何處でも事實上の第一線には一ツ橋の卒業生が敏腕を振るつてゐることを頼もしく思つたのである。

以上のやうなわけで、大陸にゐる如水會の卒業年度は非常に若く、手許にある名簿で見ても、奉天では明治時代九名、大正時代二五名、昭和時代三四名。新京では明治時代一三名、

大正時代約三〇名、昭和時代約九〇名。天津では明治時代六名、大正時代一九名、昭和時代三五名となつてゐる。昭和時代が多いのは當然のことながら、大陸に於てはそれが著しいのである。それだけに全體の氣分が若く潑刺としてゐるわけである。この若い人達にも勿論不滿のないわけではない。彼等を樂しませべき設備が幾分不足してゐることなどその最も大なるものであるが、それでも研究とスポーツに夫々自分の趣味を發見してゐるやうである。内地では贅澤なスポーツとされてゐるゴルフなどを、三、四年前に學窓を出た人達が試みてゐる。概して内地に比較して生活程度が高いことは勿論である。

各地で滿人並に中國人の如水會員に逢ふ機會を得た。新京では多くが矢張り滿洲中央銀行並に滿洲國政府に勤務してゐる。何れも最近十年來の出身者であつた。天津では昨春の卒業生刑君が市政府の重要な地位を占めてゐる。北京では教職に在る者多く流石に學問の都たるを思はせたが古い卒業生で實業界に在る者、中堅ところで聯銀に勤めてゐる者に會つた。青島では聯銀の支店長謝祖元君と市政府の孔禮科長が如水會員であつた。漢口でも古い會員が市政府の重要な椅子に居るが内地へ歸つてから會ふ機會を得た。北京で臨時政府の要人から貴校の卒業生は實に立派な有能な方ばかりですといはれた時は、例のお世辭とは思ひながら

悪い氣はしなかつた。北京の北海公園董事處でこれ等の中國人如水會員が、私達並に北京在住如水會員を招待して呉れたことは忘れられない喜びである。

軍務に服してゐる卒業生に遇つたことも、今度の旅行での強い印象の一である。天津で一名、青島で二名、漢口で一名、應召中の勇士が凛々しい軍服姿で歓迎して呉れた。又學校の卒業生ではないが、母覺に配屬將校として薰育の任に當つた準如水會員ともいふべき二人の部隊長、北尾大佐と谷川大佐に夫々漢口と南京でお目にかかり、種々お話を承り、又厚遇を忝うしたことも忘れられない。そして此の二人のお話では一橋出身の應召兵が實に勇猛果敢に邦家のために活躍してゐることである。實業界のみならず、軍隊においても有能であるといふ話は、之亦當然とは思ひながら、いたく私を喜ばせたのである。

激勵するどころか、私は斯うして大陸に活動しつゝある如水會員各位に激勵されながら、多大の敬意を以つて歸つて來た次第である。新東亞の建設に立つて一橋の持つ意義の頗る大なるを思ふ時、私はこの後續者が輩出せんことを祈つてやまぬ者である。

(如水會報・昭和十四年七月)

サラリーマンと資本主義

一

歐洲大戰に伴ふ好況時代から以後約十年間に東京大阪の地理は非常な變化を遂げた。即ち東京についていへば丸の内の草原がビジネス・センターになつて大きなビルディングの群衆を見るに至つたのは此の間の變化である。毎朝幾十萬の洋服着た人が東京驛有樂町驛から吐き出され、また毎夕その人達がそこへ吸込まれて行くのも此の新東京の光景である。更にこの間に中央線山手線に沿うて幾多の新市街が出現し、文化式新住宅が開け、昭和七年は大東京の市域擴張に至らしたのである。そこでこの大變化に由つて來る所如何といへば、サラリーマン階級の發達にありといはねばならぬ。勿論その根本原因は日本資本主義の發展といふ事だけ共、資本主義の發展はサラリーマン階級の勃興を伴はずしては起り得ないことだ。

サラリーマンは「月給取り」であり「勤め人」であり、官公吏及びそれに幾倍する所の多数の民吏である。國勢調査には各種職業別に「業主」と「職員」と「勞務者」とを區別して人口を計算してゐるが、大正九年の調査によると、この「職員」の總數は男が百三十六萬一千四百、女が十五萬三千で、合計百五十一萬四千五百あつた。その家族を加へると三百五十八萬四千になる。當時の我國人口は五千五百九十萬であつたからその六分三厘がこの階級に屬するわけだ。この調査をした時から今日は最早十年以上経過してゐるから「職員」の數は勿論大いに増加してゐるが、總人口に對する割合もまた必ず増加したことと信ずる。この階級は明治初年にもあつたけれども、それは全く官公吏に限られてゐたのみならず、官公吏そのものの數が至つて少かつた。その後帝國大學は多くの官吏を出し、慶應や一ツ橋は多くの民吏を出し、やがてその他の各大學や専門學校が無數の官吏、公吏、民吏を出したので右の如き大きな社會的階級をなすに至つたのである。而してその膨脹が大正以後において特に著しかつたことは前にいつた東京の地理風景の變化といふ事實が示す通りである。

二

サラリーマンは新中産階級である。農村の地主及中小商工業の業主は舊中産階級である。數においては新中産階級はまだ舊中産階級に及ばない。大正九年の國勢調査によると各種職業における業主、職員、勞務者の數(家族を含む)は左の如くである。

業種	業主 (千人)	職員 (千人)	勞務者 (千人)
農・林・漁業	一六・七五	三・九	九・八三
鑛業	四・八	一・七	七・一
工業	四・一一〇	七・三	五・九〇三
商業	五・三〇	八・三	一・二一〇
通信業	六・三三	三・六	一・三六九
運輸業	六・三	五・四	一・九七
軍人	五・八	七・八	一・六三
官吏	八・九二	七・五三	二・八七
自由業 (宗教・教育・醫務・法務等)	五・一	一・九	一・〇一〇
其他の有業者	三〇・一〇一	三・五八四	三〇・七四
合計	110,101	35,844	110,744

即ち業主の人口は三千萬で勞務者のそれは二千萬にしかならない。業主よりも勞務者が少

いことは異様に感ぜられる。これは農業における小作人が統計では業主の中に入り、その他商工業等においても労働者同様の手工的小企業者が悉く業主に算へられてゐるからであるが、兎に角我國では舊中産階級の数は餘程大きなものであるに相違ない。商工業だけを合計しても業主の数は九百四十萬に近くあつて、あらゆる職業における職員の總數三百五十八萬よりも遙かに多い。

然しながら經濟上政治上の勢力から見れば新中産階級はその數が示す以上に容易ならざる地位を占めてゐることは確かである。何となれば新中産階級は資本主義制度の擔當者であり、大事業の指導者であり、知識階級である。舊中産階級は間接に新中産階級に指導されてゐるといつてもよい。

三

英語で中産階級はミッドル・クラスであるが、この熟語は産業革命前から用ひられてゐた。それはブルジョア即ち町の人であり、「町人」を意味するものであつた。その時代には地主たる貴族及び準貴族と百姓とが社會の主たる階級であつて、都市の住民は小數であつたが、

その市の商工業者をミッドル・クラスと呼んだのである。このクラスの中から「富は王侯を凌ぐ」ものが出て貴族と結婚し又は自ら貴族になつた。十九世紀になつて都市の富豪は數においても富においても地主を超越し、地主の上層階級も土地の代りに株券をもつやうになつたから、ブルジョアといへば金持の異名になつてしまつた。而して一面には農民が都市へ移住して商工業の労働階級となつたから、こゝにブルジョアとプロレタリアとの二階級が社會の主要階級となつた。一八四八年にマルクスが共産黨宣言をかいた時にはこれだけの觀察をなしたのである。併し二階級の對立といふことは實は正確でない。近代的大事業は持主と労働者だけでは動かないから、所謂中間の指導者、中間の支配者が入用になる、それがサラリーマン即ち新中産階級である。英國では農村の小地主は殆ど消滅し、都市の小企業者も大いに減少したから新中産階級の社會における地位は我國におけるよりも一層重要である。

支那やインドには現今でもサラリーマンは至つて少い。帝政時代のロシアでも甚だ少かつた。従つてロシアの革命中にはサラリーマンの活動は現はれず、新ロシアはサラリーマンに當る所の人物を大急ぎで養成しつゝある。事業の單位が小さかつた中世的社會にはサラリーマンは不用だけれども、その單位が大きくなればこの種の人物が必要になる。資本主義でも

社會主義でも同様にこれを必要とする。

四

サラリーマンは要するにサラリーを貰つて生活する人であり「月給取り」である。その労働者と異なる所は日給の代りに月給又は年俸を貰ふだけのことである。一の營業の持主として利潤を得る人とは斷然その所得の性質を異にするが、労働者とはこの點に於て大した區別がない。但しサラリーマンはピンからキリまであつて、上級になれば賞與金と稱する利潤の分前を貰ふから半分は業主の性質を帯びる。けれども多數のものは月給だけで暮す。ボーナスを貰ふといつても金額は大抵一定したもので月給の一變形に過ぎないのみならずその金額が少い。或大會社では其利益金中、従業者に分つべき金の半分を重役が取り、四分の一を少數の部長や支店長が取り、残りの四分一を幾千人の社員に分けてやるさうだ。

かくの如くサラリーマンは大體労働者と同様のものだから、その氣質も労働者同様になりさうなものと思はれる。又實際において英獨等にはサラリーマンズ・ユニオン又はブラック・コート・ユニオン、ホワイト・カラー・ユニオンなどと呼ぶ労働組合がある。我國でも曾て

サラリーマンズ・ユニオンの出來たことがある。けれども此等は労働組合として有力でない。黒衣白襟は外形だけのことにあらずして精神的にも一般労働者と同じくない所がある。その所得金額が上級労働者に及ばざる場合でも何となく優越感をもつてゐる。口では何といふか知らないが腹の中では社會の指導者を以つて任じてゐる。

我國のサラリーマンは明治初年には士族の後身であつた。その後は高等教育を受けたものの目標であつた。「武士は食はねど高楊子」といふ見識が傳統になつてゐる。我國では株式會社制度が發達したのは士族がサラリーマンになつたからだ。支那でこの制度の起らないのは士族がないからだ。アダム・スミスは株式會社の重役や社員は他人の財産を預つて運用するのだから、その經營が放漫になるといつたが、それは舊中産階級の心理から出發した言であつた。我國の士族は公の財産を取扱ふことに慣れて、清廉潔白の徳を具へてゐるから、詭へ向きのサラリーマンであつた。明治時代には官吏は勿論のこと、民吏も亦熱烈なる愛國者であつて、國家のために商工業を營むといふ氣概があつた。今ではそんなことはないけれども、併しながら技師は技術の完成を欲し、支配人は事業の經營の合理化を欲する。事業の發展といふことはサラリーマンのもつ抱負である。

サラリーマンが階級闘争の熱を出さないのは自分が少しづつでもボーナスを多く貰ふやうになり、うまく行けば重役になるといふ所謂青雲の志を抱いてゐるためである。けれどもその營利心の外に事業の合理的經營といふ動機が働いてゐる。但しこのやうな動機は労働者にも全然ないわけではない。所謂「職人氣質」、「ウォークマンシップ」の尊重といふことである。動機はサラリーマン程強くない。多くの場合労働者に取つて労働は苦痛であり、楽しみは労働時間外にある。けれども必ずしもさうばかりとはいへない。

五

兎に角サラリーマンは資本主義に取つて大切な人物である。彼等にサボられては如何なる大事業も發展することは出来ない。近來我國でサラリーマンが資本家の助手となり、或は更に進んで代理人となり、受託者となつて忠實に働いたことは資本主義發展の根本的條件であつた。同時に日本國民經濟の強味でもあつた。實際現今の日本を築き上げたものはサラリーマンであつたといつてもよい。

然るに近年は高等教育機關の大擴張によつてサラリーマンは過剰生産された。しかも引つ

づく財界不況の結果新事業が起らないので彼等の地位に一大變化を生じた。大學や専門學校の學生は卒業すると共に先づ就職に會ひ、幸に就職しても累進の機會が乏しくなつた。そこで彼等の心理状態にも變化が起り、所謂青雲の志は衰へて意氣稍々銷沈の氣味がある。素より眞に力量才幹あるものは尙ほ前途に大抱負を有して奮闘しつつあるが、一部のものは早くも立身の希望を抛つて安價な樂しみを職業以外に求め、或は資本主義に見切りをつけてしまつた。

或若いサラリーマンの話に明治時代から大正初年までは學校を出て職についた人々は力さへあれば順序よく累進して現に相當の地位を占めてゐるから大いに得意である。大戦直後までの者もまだ／＼事業上の抱負をもつてゐる。併し昭和恐慌以後の就職者は元氣がないばかりでなく、仕事に興味をもつものが少い。彼等は何うせ指導的の役目を引受けるやうになる望はないと諦めてゐるから、現在の職業はただ衣食のためにやつてゐる氣持で、首を切られさへしなければよいとする。大に自分の従事する事業を研究して將來の計をなすよりも、寧ろ眼前の樂しみを職業以外に求めようとする。かくして彼等は所謂プロレタリアの心理状態になつたわけだが、さればといつて斷然左傾する勇氣もないから、ただふらくと日一日を

送るのだといふ。以上はその階級に屬する或一人の觀察であつて、事實は左程絶望的になつてゐるとは思はないが、兎に角最近の狀勢の一端を捕へた言である。彼等は長期の不況の下り坂にのみ乗つて來たから、不況と資本主義とを同一視するやうな誤解に陥るものもあるらしい。

六

さて翻つて之を日本の國民經濟といふ立場から見ると實に寒心すべきことである。日本の産業革命を指導し來つた所の重要な階級が希望を失ひ、抱負を失ひ、特に事業に對する興味を失ひつつあるとすれば、日本の資本主義だけの問題でなくして、實に我が産業能率の低下を意味する。凡そ人間の努力といふものは金錢上の報酬又は免職によつてその報酬を失ふことの恐怖によつて刺戟されること勿論だが、それだけでは積極的の活氣が出て來ない。それ以上の高尚な動機即ち事業慾といふものが必要である。特にその努力の性質が機械的ではなくして、自發的裁量を要する場合において、この事業慾の動機の必要は切實である。この點に就ては實業界の首脳者は大いに考慮されて然るべきことと思ふ。不況のため就職競争の激し

くなるにつれ、有力者の子弟が凡庸にかかはらず大銀行會社に採用され、優秀なる貧書生が取殘されると聞いてゐるが、かくの如きは右の道理から見ても、甚だ宜しからざる影響を生ずるに相違ない。現に或會社では縁故で入社したる金持の馬鹿息子たちが多いために事務が滯滞して少數の實力ある社員のみ多忙を極めてゐる。その一方に坊ちやん達は月給以外に小遣をもらつて來てゴルフ、ドライブだと贅澤な遊をすることのみ考へてゐるからその以外のものは甚だ不平だといはれてゐる。昔優秀なサラリーマンであつた所の今の重役達は大いに注意して可なりだらう。

近頃ロシアの五ヶ年計畫が終了に近いために外國の學者や新聞記者などが、視察に出かけたりして色々の情報を傳へてゐる。その中に社會主義に味方するものはソヴェット政府が社會主義制度の完成を標語として従業者の努力を激勵することの効果を強調してゐる。即ち彼等は今や空前の一大實驗に臨み、資本主義に敗けないだけの能率を發揮せねばならぬといふ自覺を絶えず喚起しつつある。而して従業者はその努力の結果が資本家を富ますことにならずして、國家及社會のための奉仕になることを知るが故に勇奮するのだと見てゐるやうだ。果してロシアの能率が資本主義の諸國以上であるかは疑問だとしても、かかるスローガンの

効果は偉大なりと想像される。

併しながら社會主義制度により利潤を廢止しても、個人の利己心が廢止されるわけでない。報酬なしに個人の努力を刺戟することは出来ない。ロシアでも勤勉なものに賃銀を多く與へるために個數拂を行ふやうになり、又特殊の才能あるものは追々高給を與へられることとなつた。彼の國では技師、支配人、事務員、職工長等が不足してゐるから政府は之が養成に勉め、且高給を與へて獎勵するらしい。だから有産者無産者の區別はなくても高給者と低給者の區別は中々大きい。生計程度の高低も自然に出来るわけだ。社會主義を終極の理想といふものがあるか否か、又もしあるとすれば右の事實はその理想に適つてゐるか否かといふことは別問題として是非こゝに指摘したいのは資本主義を廢止してもサラリーマン階級は残るといふことだ。而してそのサラリーマンの有能且正直であるかないか、その勤勉努力を獎勵する所の刺戟が存在するか否かは社會經濟上の一大問題だと思ふのである。

(經濟往來・昭和八年三月)

師友の思ひ出

二十八年前の福田先生

お需めに應じて私も何か書きたいと思立つたが何分時日が迫つてゐるので念の入つたものは出来ません。福田先生の學生時代から今日までの事を多數の方々が分擔してお書きになるとすれば私の受持ち得る部分は二十八年前即ち明治三十四年留學から御歸りになつた當時の事だと思ひます。勿論其時私は學生でありましたから學生としての觀察であります。先生は多分明治三十四年中に御歸朝になつたと思ふが教室に出て講義されたのは三十五年の春でありました。出淵勝次君や堀光龜君や私などは其年の夏專攻部を卒業したから先生の講義を聽

いたのは僅か數ヶ月に過ぎません。三浦新七君は既に商學士になつて學校の講師をしてゐました。左右田喜一郎君、坂西由藏君は本科三年にゐたでせう。其頃の東京高商は勿論日本に唯一の高商であつて、在學生の總數が五百人位、專攻部は一級十人位しかなかつた。吾々が福田先生の講義を聽いたのは大震災に焼けた煉瓦の講堂の裏口にあつた小さい室でありました。當時の校長は駒井重格氏で、專攻部の先生の大部分は外部から頼んで来て頂いた所の講師であつた。其中で田尻稻次郎博士の財政及金融、渡邊廉吉博士の行政法、齋藤十一郎氏の民法、古賀廉造博士の刑法、水野繁太郎氏の獨逸語等は今でも思ひ出すが、此等の先生方は何れも既に故人になられました。現に健在なのは松波仁一郎博士位のものでせう。關一博士佐野善作博士も福田先生と前後して歸朝されたけれども私共は其講義を聽かなかつたのです。さて福田先生の受持は商業政策であつたが、實はその講義目錄を頂いたのみで商業政策其者の話はあまり聽かされなかつた。其代り當時新版のシユモラー張りの企業發展論を教へて頂いた。私共は前に申す通り僅か三四ヶ月しか聽講しなかつたけれども、眞實敬服してしまひました。從來英國の古典學派の外に獨逸の歴史學派があるといふことは聞いてゐなければ、眞に歴史學派の精神を傳へた所の言説を聞いたことがなかつたのです。私自らは先生の

歸朝前にミルの經濟原論を獨學して非常な興味を感じてゐたが、當時我國で歴史學派をやると稱せられた所の某々博士等の説を読んで一向感心しなかつた。歴史學派が果してそれ等の人の説く位のものならミルの方が餘程よいと思つてゐた。然るに一度福田先生の説を聽いてから少くとも私自身の思想は大いに動かされてしまひました。これは決して輕卒に動いたのではない。經濟生活にも進化發展の理があるといふ事を始めて知つたから其學説に引付けられたのです。私は中學時代に動物の進化論を教へられて以來社會の進化といふ事も考へてゐたけれども、此理法が經濟生活の説明にもなつてゐることは實に始めて福田先生によつて示されたのでありました。これは私一個の經驗を申したのですが當時の我經濟學界の状態から推測すれば、恐らく私以外にも同様の意味で福田先生の新學説に敬服した人が多くあつたらうと思ひます。先生は爾來二十八年間絶えず西洋の最新學説を取つて我學界に紹介され偉大な功績を止められた方ですが、右の御歸朝當時の事だけでも他に眞似の出来る人はなかつたと考へます。

私は專攻部卒業の後實業界に入る豫定であつたが、福田先生から勧められて學校へ殘ることと決心しました。それから一年あまり、先生から手を取らぬばかりにして教へて頂きまし

。此間に私はシユモラー、ビュヘルを熟讀するやうになりました。又、其頃友人の瀧本美夫氏が歸朝して學校の教授になられたので、時々同氏と福田先生と三人で會談した其間に非常な刺戟を受けました。私は元來學者などになる氣は少しもなく、況や教師などは馬鹿のする職業だ位に考へてゐたので、福田先生から勧められて學校へ残つた當座は中々一生教師で暮すつもりはなかつたのですが、先生の學を好むこと熱烈であるのに引かされて自分も多少勉強する氣になりました。實に先生の功績の一半は其天稟の語學の才能を用ひて盛に西洋最新の學說を絶えず紹介された所にあるが、其他の一半は先生自ら率先して研究に熱中すると共に後進をして同じく研究に熱中せしめた所にあると思ひます。先生の直門たる左右田、坂西、小泉、大塚、井藤、中山の諸君は皆かくの如くして先生からインスパイヤされた所の經驗をもたれることと推測するのであります。獨り門下の方々のみならず、先生の同輩の方々でも同様の刺戟を受けた方が必ず多數にあることを信じます。或は先生の爲に罵倒されり、嘲笑されたりして不愉快な思ひをした人でも、之によつて刺戟を受け發奮したといふやうな場合が少くないと思ひます。

遺憾なことに私は前記の如く卒業後二年以上非常な御世話になつてゐながら、終に先生か

ら破門されたやうな姿になつてしまひました。瀧本美夫君も同様でありました。率直にいへば私共にも悪い所はあつたらうが、先生にも悪い所がなかつたとはいへませぬ。併しながらそれはそれとして先生の秀でた學才と飽くことを知らざる旺盛な研究心に對しては終始一貫私は深き敬意を抱かざるを得なかつた。従つて如何なる場合でも先生をして此長所を發揮せしむべく微力を盡したつもりであります。先生も亦學問上では常に私を鞭撻せられ時には論争の相手になつて下さつたこともあります。企業及經營の意義についての論争、株式會社の本質についての論争は今でもよく覚えてゐるが、其以外にもやつたし、又書面で論争したこともありました。先生は申すまでもなく非凡な天才であり、従つて稍偏狹な性格をもつて居られましたけれども、學問には實に忠實でありました。二度目の外遊中大病にかゝられてから精力も著しく衰へたやうに見えましたけれども、まだまだ一人前以上の仕事をされると思つてゐました。先生の死は實に我學界の損失であり、又我母校の損失であります。それにつけても先生最後の商大にゐる人々、特に先生の後繼者たる人々の責任重大なることを痛感せずにはゐられません。私は此等の諸君が今後益々奮ひ立つて學界における商大の地位を重からしめることを祈ります。

(如本會報・第七九號、昭和五年六月)

私は日本に於ける株式會社の歴史を調べるに就て、申す迄もなく此制度の開山たる青淵先生のお書きになつたものなどを涉獵しました。又この目的で先生に親しくお目にかゝつて教を受けました。それによりますと先生は維新前御洋行中にヨーロッパの會社制度に着眼せられて、國の富を起すには是非此制度を採用しなければならぬといふので、明治政府に居られた劈頭に「立會略則」と云ふ書物をお書きになり、民間に下つては第一銀行を設立して、自ら會社制度の範を示されたのでありますが、その時の御考への中に、

「當時の町人は昔風の因循姑息の風習を脱しないので、到底博く知識を世界に求めて新事業を起すといふやうな見識がない。日本で斯くの如き見識を備へたものは士族の外にはな

い。然るに士族は軍人や官吏になりたがる、商工業に對する興味は極めて薄いのであるから何とかして彼等を獎勵して、國富開發のわざに参加させなければならぬ。その意味に於て會社制度といふものは必ず効果があるであらう。有爲の士族は普通の町人の番頭となつて働くことは肯んじなくとも、多數の人から資本を集めて成立つた處の云はば公の性質を持つた株式會社の重役又は高級使用人になるといふことならば、多少の名譽も伴ふことであるから、士族等を相當引きつける事が出来るであらう。即ち會社制度を起すのは、單に金を集める手段となるばかりでなく、人材を實業界に入れる手段として、最も有效なるものであらう。」

といふことであります。果して先生の御見込み通り國立銀行を始めとして各種の事業は、會社の形式により士族の才幹によつて非常なる發達を遂げたのであります。

其處で私が非常に面白いと思ふのは、右の先生のお考へと、アダム・スミスが國富論中に書いた株式會社に就ての意見と、或意味に於て相反してゐるといふことであります。申すま

でもなく、アダム・スミスは十八世紀の末に於ける、英國その他の國々の會社の實狀を觀察して、其結論を得たのでありますが、彼の意見では、

株式會社といふものは大勢の金を集めて、少數の重役に運轉せしめるものである。重役は普通の商人の如く、自分の金を取扱つてゐるのでなく、人の財産を預つてゐるのである。それ故に事業に對する熱心が足りないのは當然のことであり、従つて經營が放漫になり、時としては色々の不正行爲が行はれる。故意に不正を行はないでも、重役は宛も大家の三太夫の如く微細の費用を節約するのは主人の名譽に反すると云ふ様な心組で仕事するから浪費が多くなる。それであるから従來株式會社といふものは多く失敗に歸してゐる。たゞ銀行とか、保險とか運河とか云ふ様な比較的規律的に處理し得られる處の事業、さうして餘り機敏な進退を必要とせざる様な事だけは、株式會社にやらしてもやれる。

と云つてゐるのであります。

之を青淵先生の維新當時のお考へと對照して見ると、一方は株式會社は經營者の物質的の利害關係が薄いから成功困難なりと云ふに反して、他の一方はそれには多少の名譽が伴ふから立派な人物を惹きつけ得るといふことになりました。

勿論立派な人が來ても物質的の利害の薄いために、スミスの云つた様な弊害が伴ひ得るから、此二つの意見は必ずしも衝突する譯ではないが眼の着け所が全く異つてゐるのであります。而もそれが各々の國情と其時代との形勢に基いて樹てた議論であるから非常に面白く感ずるのであります。

三

東洋に於て株式會社を採用して成功した處は日本の外にはまだありません。支那などは日本より早く、ヨーロッパ人と交通して居り、且支那人は日本人よりも一層商業的國民であると云ふに拘らず、今迄の處支那では會社事業は多く失敗に終つて居ります。

其理由は勿論支那人は五、六十年前に於て、日本人の如く思切つて西洋文明を採用すると云ふ、所謂開國進取の國是を採らなかつた爲であります。又支那に士族といふ階級が存在して居ない事が重要な原因をなして居ると思ふのであります。

日本でも町人は概して一家一門と云ふことに囚はれて居つたが、今の支那人はやはり一家一門の損益をのみ主張するが故に、會社の經營を誤ることが多いといはれてゐます。

之に反して士族は昔から、殿様の御用を勤めるといふこと、即ちアダム・スミスの言葉を以てすれば「他人の財産を管理すること」に長い経験を持つてゐる。其處に一種の清廉潔白なる風儀を養ひ得たのであつて、それが實業界に入つて會社の發展に貢献したのである。之は我國にとつて今迄に非常な幸福なことであつたのは申すまでもありませんが、將來に於ても實業家が其事業を以て生命となし、之を一家の私事となさずして天下公共の機關と見て、其爲に自分の技倆を働かせると云ふことにならなければ、所謂資本主義に立脚する處の現代の文明は頗る危険なものであらうと思ふのであります。

四

アメリカの自動車王ヘンリー・フォードの自傳を讀んで見ると、同氏は「三十年前に、其事業を始めてから今日に至る迄、他人を押し倒して金を儲けたことはない。自分は生産費の節約の爲に苦心して、其結果の良いものを作つて大きな販路を開拓し、従つてその結果として金も出來たのである。自分の考へでは Business は Social Service であるから、社會の用務を勤めることが、先以て其目的でなくてはならない」と申して居ります。フォード氏が果し

て其言の如く、少しも誤りなかつたか、どうかは知りませんが、右の思想は確かに今日新時代の實業家の指導的原則として認めなければならぬと思ひます。

五

名譽の爲又は社會的職分として商賣するのは、見當違ひの様であります。實際、日本に於ける會社制度發達の一面には其の様な事實があり、又將來に於ても健全なる經濟社會の發達を可能ならしめる爲には、斯くの如き着眼は必ず一つの缺くべからざる條件になると云ふことを私は信じます。これは青淵先生の常に唱へられた道德經濟一致の説に合するのであります。

(如水會報・第九七號、昭和六年十二月)

アシュレー先生の思ひ出

William J. Ashley 教授は經濟史家として有名であり、且つ偉大なる業績を遺した人であ

るが、經營經濟學者として少くとも最も夙く著れた。先生は若くしてカナダの大學教授となり、アメリカに轉じてハーバート大學の最初の經濟史講座を受持たれたが、一九〇三年頃英國に歸つて、バーミンガム大學に於ける商學部の創設に與り、*Business Policy* 即ち商工經營の講義を始めた。當時バーミンガムがその新學部を設けたことは保守的なる英國諸大學の傳統を破つたのみならず、歐洲に於ける高等商業教育發展の魁をなすものとして、各方面から異常なる注目を受けたのである。そして現在の神戸商業大學學長田崎慎治氏及び私はその英名を慕ひ寄つて先生の講筵に列した少數の青年の一人であつた。

爾來二十二年を経て一九二七年、私はジュネーブに於ける國際經濟會議に日本代表たる任務を了つた直後、英國へ渡つて昔の先生に會はうとしたが、この時先生はカンタベリーの田舎に病軀を養つて居られ、しかもその病狀思はしからざるものがあつたらしく、私の手紙に對して非常に喜んでゐるが、今會ふことが出来ぬといふ趣を代筆で答へられた。其の後、數ヶ月をして英國經濟學雜誌にアシュレー教授の訃音が傳へられたのである。

先生は戰爭中及び戰爭後に英國政府の種々の調査委員に任命せられ、其の功によつて *Sir* の稱號をさへ得られたのであるが、殊に所謂バルフォア委員會、即ちバルフォア氏を會長と

するところの商工業組織の調査會には中心人物として働かれ、その有名な調査報告の大部分を書かれた。この調査報告が經營經濟の方面から見て、科學的價值を有するのは全く先生が參加してゐた爲だと思はれる。

又、先生は一九二六年バーミンガムの講座を引退されてから、デンマークの高等商業學校でなされた講演の草稿を、*“Business Economics”* といふ小さい書物に纏められた。この講演旅行に出られる以前に、私は先生が日本へ來て講演されることを希望し、先生も大部乗り氣になつてゐるが、結局健康の勝ぐれざること等の爲に實現されなかつたのである。兎に角、アシュレー教授の經營經濟學をうかゞふべき資料として右の小著とバルフォア委員會の報道とが遺された譯である。

これらの資料のうちに示された思想が、過去二十幾年の間に先生の頭の中で如何なる發展の道を通つたかといふことは、私にとつて非常に面白い問題ではあるが、詳しいことは解らない。たゞ昔聞かされた講義と近年の著作とを引較べて、その間の連絡をつけて見るだけのことである。次に掲げるのは、私のバーミンガムにゐた時、即ち一九〇四—五年の學年になされた講義の要目である。

(昭和五年十一月)

Topics of Lectures.

- I Preliminary Ideas.
- II Evolution of Commerce.
- III The Institutions of Trade.
- IV The Legal Organisation of Business Undertakings.
- V The Central Problem of Business: Price in Relation to Cost.
 - (A) Economic Theory.
 - (B) Business Practice.
- VI Fluctuations of Trade.
- VII Buying and Selling.
- VIII Methods of Attracting Demand.
- LX The Scale of Manufacture.
- X The Range of Manufacture.
- XI Combination and Amalgamation of Business.
- XII Location and Laying-out of Works.
- XIII Treatment of Labour.
- XIV Questions of Manufacturing Policy.
- XV Recent Methods of Industrial Finance.

中島權君を悼む

中島權君の遺稿に序文を寄することは私にとり實に悲しき義務であります。筆を執つて机に向へば若き亡友の姿が忽ち眼前に現はれて何事かを訴へて來ます。私の眼には忽ち涙が湧き出て止みませぬ。

願れば大正十五年の春、中島君は始めて東京一橋の商大ブラックに於ける私の研究室を訪れてセミナー参加を求められました。その時、吾々は何を語つたかよく記憶してゐませんが、兎に角一回の會見によつて私は同君の學才の非凡なることを感じました。爾來四年間、君の在學時代及卒業後の時代を通じて、君に會ふ度毎に、又君から所信を受くる度毎に私は同じ感じを持つたのであります。君の學的興味は頗る廣くして、理論にも、歴史にも、又政策にも、之く所として何か問題を捕へざることなし、しかも一旦捕へたら問題は必ず自分の満足するやうな解決に考へ續けるといふ風でありました。例へば數ヶ月前の會談の際に得た

さ、やかな疑問の糸が今日再び何等かの新しき形に於て提出されることが、屢々ありました。蓋し中島君の頭腦の中には大小幾多の問題が藏められてあつて、絶えず解決を求めてゐたのであらうと思ひます。

此の如き研究心の旺盛な學者を夭折せしめたことは我學界にとつて深く惜むべきは申すまでもありませんが私は寧ろ個人として同君がその鋭く強き學的要求を抱きつゝ逝くことの如何に無念であつたらうかと、その心中を察せざるを得ないのであります。

今序文を書いてゐる間に中島君のあの人なつかしき眼が私に訴へるのはこの事でありませぬ。中島君はあれ程の學才を持つてゐながら所謂優等生にあるやうな利己的な剛腹な高慢な氣風は少しもなかつたので、それが又私をして同君を敬愛せしめる一因となりました。同君は何人に對してもその長所美點を認めて、自ら謙遜することの出来る性格を持つて居りました。而して穩健で正直で几帳面でありました。君の學才を認むることの出来ない人でも恐らくこの純真無垢な性格だけはこれを見ることが出来たらうと思ひます。

上海からの電報によつて君の死を知つた時に私は父君に弔辭を書いて云ひました「この不幸はあなたばかりの不幸ではありません。私にも同様の不幸です」と。それ故、名古屋高商

の其湛會の級友諸君の御盡力によつてこの遺稿が完成されたならば私は父君と共に感謝の念を分つことが出来ることと、祕かに期して居りました。然るに父君は既に君のあとを追うて長逝されたことは實に遺恨の限りであります。遺稿の序文に此の如き悲しいことのみ並べることが慰問の法に適つてゐるか如何かは知りませぬ。私は只率直に自分の感情を述べて自ら慰むることを許して頂きたいのであります。

(中島權遺稿集序文・昭和六年七月)

加藤敬三君を憶ふ

加藤敬三君の遺稿を印刷されるについて追憶文の筆を執ることは私に取つて如何にもつらい仕事であるが、而かも又この際何か書くことが若き亡友に對する義務であり、同時に自分の心中のいたみを慰めるよすがともなる。加藤君は東京高商が東京商大に昇格して以來社會に送り出した所の幾多の優秀の中の優秀であつたから、苟も君を知る程の人々はこの非凡なる青年の夭折を惜まざるものはない。然るに私に取つて加藤君の死が拭ふべからざる心のい

たみとなつて残つてゐるのは固より一旦の師弟の關係のみが然らじめるのではない。私自ら眞に加藤君を理解してゐたといふ自信——それは他人から見ても足らぬ所があるかも知れないが、少くとも自分免許の信念を有つてゐるからだ。

私が初めて加藤君に會つたのは大正十一年の春私のセミナールに加入を申込まれた時であつて、それから三年間の在學時代は毎週會談の機會があつた。その頃は恰も我國で社會思想の沸騰した時代で、私は英國産業革命史を研究してゐた。加藤君は同級の山中篤太郎君等と共にギルド社會主義を研究し、それに對して非常な興味を寄せてゐられた。君が研究報告として「英國のビルディング・ギルド」の事蹟を述べられた時に、私がそれを面白いエキスベリメントだといつたのに對し、君は實驗ではない。新しき建設だといつて論争されたこともあつた。加藤君は學校の成績は優等であつたが、併したゞの優等生ではなかつた。常に何か根本的なものを掴まうとしてゐた。さうして好んで議論をしたから研究室では何時も中心人物であつた。

同じ頃商大の學生間にS・P・Sといふ社會思想の研究團體が組織せられ加藤君はその會の牛耳を執つてゐた。この團體が大震災直後に芝公園の友愛住宅のバラック講堂を借受けて

勞働者の學校を開いたがこれも加藤君等の仕事であつた。私は後援者の一人として熱心にその活動を見守つてゐたのであるが、當時の加藤君の努力奔走は實に獻身的といふべきものであつた。一文の寄附金もなしにあれ程の仕事がよく出来たものだといふ喜び且驚いた。實に學生はえらい事をやると思つた。

それから大正十四年に加藤君は商大本科を卒業され、私は同君を某高等商業學校へ推薦し、先方でも採用する手順になつてゐたが、同君はその時意をひるがへして新聞界に乗出さんことを志し、終に猛烈な競争試験を突破して東京朝日新聞社に採用されることとなつた。當時商大出身者にして新聞界に活動するものは至つて少かつたが、私は學生等がこの方面に注目すべきことを唱導し、特に加藤君には最初から新聞記者になることを勧めたのであつた。朝日に入つてから君の記者としての手腕の忽ち發揮されたのを見て私は内心窃かに自分のことの如き誇りを感じたものである。

加藤君の人物は純眞そのものであつた。誰でも若い時は純眞であるが、君の場合には如何程年を取つても變るまいと思はれる底の純眞さが認められた。自分のわるいと思ふことは斷じてやらないが、苟もよいことならドシドシやつて行く。その結果が自分のために不利であ

つても、又幾分他人に迷惑であつても、その邊は極めて無頓着に氣輕に考へてゐた。それ故友人等にはヤンチャンな男と思はれたことも蓋しあつたらうと推察するが、しかし又一種獨特の愛嬌をもつてゐたから誰も君を憎まなかつた。たしか四年前の正月と思ふが、加藤君が大病をされたあとのことである。私の初夢に、南大の學生數十人が何處かの山中で氷すべりのやうなことをしてゐた。非常に寒いので私がふるえながら見てゐると、一人の學生があまり清潔でもない自分の制服と外套をそつくり持つて来て「これをお着なさい」と渡してくれた。さうして本人はすつばだかであらう笑つてゐた。その元氣な學生が加藤君であつた。加藤君が痩せた身體を寒風にさらして、病氣あがりの色つやの好くない顔で而かも極めて快活に笑つてゐるのであつた。私は非常に驚いたが忽ち夢はさめてしまつた。これはたわいのない夢だけれども、その中に竹を割つたやうな加藤君の性格の一端が現はれてゐると思つて、そのまゝの事を山中君へ書いて送つたのである。

加藤君は天才的に機敏な頭の持主であり、而かもそれを骨惜しみなく働かす人であつたから新聞記者として一流の人物になると私は確信してゐた。それに研究心も亦頗る旺盛であつたからやがて學術的價値の大なる仕事も出来るだらうとの希望を囑してゐた。然るに不幸

なる早死をしたのは、或はその骨惜しみせず奔走したことが無理な不養生になつたのではないかと思はれる。實に惜しいことをしたものだ。今までも加藤君が生きてゐてくれたらと思ひ出す機會は少くなかつたが、これから後も度々そんなことがあるだらう。君の天折は何時まで一つの恨みとして私の胸に遺るにちがひない。

(加藤敬三遺稿集・昭和六年十二月九日)

鎌田先生の思想的影響

小生は鎌田先生の思想的影響を最も多く受けた一人であると思つてゐる。もとゞ私父は紀州藩で可なり有力な漢學者であつたから極めて幼少の時から鎌田先生にお近づきになる光榮を有つてゐたけれども、それは稀にお目にかゝつてお辭儀する程度であつた。小生が眞に先生の影響を受けたのは和歌山學生會で先生の御講演を拜聴してゐたからである。明治二十九年と思ふが、先生が徳川頼倫侯のお伴で歐洲を漫遊して歸られてから間もない頃のこと、

同會において、日本人に世界的眼界の足らぬことを指摘せられ、吾々はたゞ Patriotic Japanese たるに止まらざるに宜しく Broad minded citizen of the World にならねばならぬといはれた。これが當時十七八歳の私を非常に感心させた。それから又先生は英國と獨逸の國民性を比較して英國民の獨立自尊を推賞し、獨逸人は學術に秀でてゐても法律規則に縛られてしまつて個人の徳性が伸びてゐない、英人はコンモンセンスが發達してゐるといはれた。これも又私を大いに喜ばせた。あの頃は一般學校教育は勿論極端な國家主義で動もすれば外人を夷狄視するやうな氣風にならんとしてゐたが、どうしたものか小生はその窮屈な風潮が嫌ひで少年ながらも世界主義個人主義に憧憬を抱いた。自分は日本人であるといふ自覺は強くもつてゐるけれども、日本人なるが故に人類文明に對する義務を忘れるわけには行かぬと考へた。その爲、正則中學における自分の先生であつた故元良勇次郎博士に就て疑ひを質し、教を請ふことも屢々あつた。その際、明快暢達なる鎌田先生の演説を聴かされたので全く敬服させられてしまつた。それ以來度々先生をお訪ねしてお話を伺ひ、又先生の書かれるものは好んで精讀するやうになつた。彼の「歐米漫遊記」なども再三讀んだ。それからずつと後に出版された先生の講演集「獨立自尊」なども喜んで讀んだ。小生は前記の世界主義に基いて國際

貿易に身を立てるつもりで一橋高商に入り多くの先生についたけれども、鎌田先生程強く自分の思想上の影響を與へられた先生は外になかつた。先生の説かれた所は大體福澤宗であり、私は福澤先生の著述を随分よく讀んでもゐたけれども、その教は、鎌田先生を通じて強く私を打つたのである。高商を出て外國へ留學する時、大多數の留學生と方向を異にし獨逸よりも英國に學んだのも先生の影響が與かつて力あつたと信ずる。やがて留學から歸つて來ると、先生からのお話があつて徳川侯爵家の教育上の相談役になるやうに勧められ、つひに今の頼貞侯の御洋行にもお伴することになり、その後も御懇命を蒙つてゐる。又一九一八年ワシントンで第一回國際勞働會議の開かれた時、先生は原首相から頼まれて政府代表として出張され、小生はその顧問としてお伴をした。この時の顧問には交詢社で先生中心に勞働問題研究會をやつてゐた窪田文三君、氣賀勘重君、菊地武徳君等もあつた。同じ仲間の本多精一君にも話があつたが同氏は勞働代表になるとかならぬとかいふ騒ぎがあつて、一行には加はらなかつたのだと思ふ。あの時の會議における日本政府の立場は随分困難であつて、現在批准されずに残つてゐる勞働時間の特種條約案の如きは極めて少數の差で會議を通過することが出来た。あれに就ては先生が同じ政府代表の岡實君（今の大毎社長）と共に大いに盡力された

のであつた。後に先生は文部大臣や樞密顧問官になりその言論の調子が幾分變つて來たけれども、歐洲大戰頃までの先生は最も旗幟鮮明なりベラルであつた。先生は理論に拘泥したり、イズムに捕はれたりするやうな人ではなかつたけれども、その宏壯な氣宇の中にリベリズムが滔々として流れてゐた。先生こそ英國流のリベリズムを最もよく理解し體得してゐた日本人だといひ得るだらう。小生は先生と談論する度毎に何かのヒントを興へられないことはなかつたので何時も先生とお話するのを樂しみにしてゐた。昨年暮にも或所でお目にかつたので新年になつたら一度ゆつくりお話を承りたいと申して先生とお約束してあつたのだが、自分が一寸風を引いて休んでゐた間に先生も御病氣になられ終に永久にお別れせねばならなくなつた。それが實に遺憾である。

(帝國教育・昭和九年五月)

實際家下學者の關さん

關さんは風水害の犠牲になられたのぢやないかといふやうな氣がする。

昨年秋、東京で、關さんが貴族院議員になられた祝賀會が催された。その席上において私は、關さんと商大との關係を述べたことがある。

その翌日のことである。新聞に關さんが大阪へ歸られる途中汽車で遭難されたといふ記事が出たのでトモも心配した。だが幸にも一汽車違ひで助かつたことがわかり、よるこんだことであつた。

今その時の祝賀會の席で述べたことを、お悔の意味で繰返さねばならないといふことは、如何にも残念である。

風水害の後仕末のために非常に疲れてをられたところへ、水害地に兎角つきものの流行病に罹られたものとするれば、關さんは市のために斃れたと云ふべきで、まことに悲壯な感がある。

私をはじめてお目にかゝつたのは明治三十一年で、關さんが新潟縣の商業學校長から東京高商の教授になつて上京された時である。その頃私は學生であつた。その後間もなく外國へ留學して歸朝されたが、當時關さん、福田徳三さん、今の學長の佐野善作さんの三人が新知識として相ついで外國から歸られたので、一橋の學界は俄かに賑かになつた。經濟學方面に

今迄有力な先生がなかつた高商の學問の水準はこれらの方々の方によつて一擧に高められたのである。

而してこれは學内だけにとまらず、廣く日本の經濟學的に見ても、關さんは出色の人物であつたことは疑ひのない事實であつた。

その頃全國諸大學の經濟學者を網羅した社會政策學會といふ會があつて、毎年東京で大會を開いたが、關、福田兩博士は桑田能藏さん、今尙健在の高野岩三郎さん等と大いに學界を指導してをられたのである。

關さんの専門は交通政策で「鐵道講義要領」といふ著書があるが、類書中特に目立つたものであつた。

關さんは頭も優れ、常識も發達してをられ、商業政策の研究をされ殊に工業政策については、上、下二卷の立派な著述をされてをり二十年後の今日に至るも、依然重要な參考書となつてゐる。その頃特に關さんについて交通政策、工業政策を研究した學生中から、現在知名の實業家、學者、外交官等が多數に輩出してゐる。

大正三年大阪市の高級助役になられた當時、私は英國へ留學中であつたが、關さんの後を

襲ふため急に呼び戻されたのであつた。

關さんが大阪の高級助役として、また池上前市長歿後市長として類例稀なる成績を擧げられたことは今更言ふ迄もないことである。自治體の理事者として二十年間名譽を保たれたといふことは關さんの功績を明かに物語つてゐるものと思ふ。

關さんについて私が特記したいのは、在職中に大阪商科大學の設立を完成され、しかも市政といふ講座を置かれたことで、我が國で市政に關する講座を持つてゐる學校は恐らく他にはないであらうと思ふ。これは全く關さんの發意にもとづくものである。

關さんは市長の激務の傍ら、或は住宅問題或は公益事業の問題等についての研究を屢々發表された。

明治から大正にかけて學界出身の政治家或は實業家が尠ならず出てゐるが、實際家として成功された人は必ずしも多くないのである。更に實際家にして成功しつゝ、猶學者的研究を續けられた人は極めて稀である。私共は關さんが他日市長をやめられる時が來たなら、學者として將來のあることを期待してをつたのであるが、その期待のはづれたのが最も遺憾である。全く關さんのやうに日夜健康であり、能力の優れた方が忽然として逝かれたことは日

本の大損失だと思ふ。

(大大阪・昭和十年二月)

澤田庸君を憶ふ

去る五月二十二日澤田君の母君から電話で庸君戦死のお知らせがあつて、自分も妻も非常に驚いた。勿論出征すれば戦死を覺悟するのは當然のことであるから、この知らせに驚く道理はない筈だが、事實自分等は驚いて呆然とした。さうして却つて母君の落着いた態度に敬服したのである。しかし驚いたものは自分等ばかりでなくして、澤田君の友人の多くは同様であらうと想像する。何故かといふと、吾々は出征のことを最近に聞いたばかりで、忽ちこの悲報に接したからである。自分の机の上には澤田君が五月三日に出した「はがき」があつて、それには、元氣で警備や討伐に従事してゐるから安心せよと書いてある。「藏田兄」と品川から北京まで一緒に來たが、その後別れて音信不通になつたことも書いてある。その藏田君(歴次郎)からは六月十四日付の「はがき」で澤田君は今何地にゐるかと問ふて來た。

ところがその人は何といふ無常迅速の運命が既に約一月前の五月十三日に戦死してしまつたのである。死んだ時の模様は隊長の手紙を見せてもらつたのでよく分つたが、如何にも澤田君らしい思切りのよい死方をしてゐる。

澤田君は、昭和九年四月自分のゼミナールに加入した十四人中の一人であつた。商大には豫科から上つて來た大學生が多くて、地方高商からのものは少い。それ故自分はその人達になるべく早く他の學生と親しくなり、遠慮なく話の出來るやうになることを希望するやうにしてゐた。しかし澤田君の場合には、かやうな心配は全く無用であつて、間もなく友人達が「澤田」と呼ぶてにするやうになつた。それから君が天性純真であり、淡泊であり、人を愛すると共に人を愛せらるるところの徳を具へてゐたからである。氣取りもせず、怖れもせず、言行すべて自然に出ることが出來るからであつたと思ふ。それで、ゼミナールの會では「澤田」は知らぬ間に人氣者になつてしまつた。最後の留別會の時にはその幹事役を引受けてゐた。ゼミナールは研究團體だから不勉強なものや、不成績のものは勿論信用されないが、又如何に學問がすぐれてゐても連中に親まれない人がある。澤田君が同輩の全部から信頼と親愛を受けたことは、それだけでも彼の人と爲りがわかるのである。

澤田君は、昨年の春卒業して三菱信託の大阪支店へ行つてからも自分に文通してゐた。昨年の夏は輕井澤の叔父君の別荘に來たので、自分の山荘へも訪ねてくれた。自分は君を迎へて雑談しながら千ヶ瀬まで一里ばかりの散歩をした。その時もよく談じ、よく笑つたのであるが、あれが最後の會談となつた。

今更なんといつても致方はない。たゞ彼の若々しい倂は何時まで快い記憶として自分に遺るであらう。特に自分が靖國神社の英靈に向つて默禱するときには、必ず彼の人なつこい顔が自分の腦裡に現はれるであらう。

(澤田庸追悼録・昭和十三年十一月)

小倉正平君と私

昭和十四年二月二十八日夜小倉君の病勢不良にて慶應病院へ入院したことを小田橋君から聞いた。次で小倉君の尊父から來書があつて同じことの報告を受けて非常に心配した。然るに三月三日早くも訃報に接し病魔の猛襲迅速なるに驚いたのであつた。自分より若い友人の

死を聞くときは何時も惜しいと思ふがこの場合は特にたまらなく惜しいと感じた。それは勿論君の學才の非凡を認めてゐたからである。君の病氣さへ直れば必ず日本の學界に名を成さしめることが出來ると見込んでゐたからである。

私が始めて小倉君に會つたのは大正十五年の春で、君が商科大學の豫科を卒つて本科に入り、數人の同級生と共に私の研究室を訪ねて來られた時であつた。當時君は級友よりも二三歳年下であつて、伶俐な坊ちゃんやうに見えた。豫科の教授諸君から「小倉は秀才だ」といふ申送りがあつたが、話して見ると果して鋭利な論理的な頭腦なので頗る感心した。これは學者にしたら必ず成功すると思つた。然るに君は私の研究室に加はると間もなく病氣で休學してしまつた。私は昭和三年に外遊したので、一時研究指導を中止し、その間に小倉君は健康を恢復して大塚教授のセミナーに入つたのであるが、卒業に近い頃は君と私の間に絶えず會談の機會があつた。その頃私は學校を出た若い友人達と共に日本經濟の研究會を組織したので、小倉君はその會に出席したからである。それに又東京自由通商協會の事務を君に頼んであつたから、その爲に會ふことも多かつた。君が學校を出てから、何れかの高商の教授にしたらいと考へて、或學校へ推薦したこともあつたが、成功しなかつたので機會を待

つこととし、自由通商協會の仕事をつまきやつてもらつた。それが君の再び病氣になつて引込むまで續いたのである。而して私の研究會は人口問題を取扱ふこととなり、多少の資金を得て銀座の貿易ビル内に自由通商協會と隣合せの一室を借りるやうになり、毎週火曜日にそこで會合したが、小倉君は病氣でない時は必ず出席する常連の一人であつた。

小倉君は最初は所謂秀才型の學生であつたが、年を経るに従つてその型から脱して人間として進境が著しかつた。兎角秀才といふものは優越感に煩はされて人情の尊さを看のがし易いのだが、小倉君は確かにこの弱點を洗ひ落してゐたので、この點は私の敬服するところであつた。それから病氣になつてから生來の強固な意志が益々現はれて來て、飽くまで粘り強く病氣と闘ふやうになつたことは友人等の悉く敬服するところであつた。もし君が再び健康を取戻したなら學問ばかりでなく人間としての修業においても更に大いに人を惹付けたらうと思ふ。かやうなことを考へるにつけても、實に惜しい人を失つたといふ感に堪へないのである。

(故小倉正平君追悼文集・昭和十四年五月)

佐久間幸夫君を憶ふ

佐久間幸夫君が東孤嶺の激戦に斃れたといふ報告を聞いたとき君の友人等は豫ねての覺悟にも拘はらず非常に驚き且悲しまずにもるられなかつた。その後時を経て遺骨が到着したとき横濱の市民及び市立横濱商業専門學校の教職員學生一同は盛なる儀式を以つて君の英靈を葬ひ、如水會に屬する舊友等は眞心をこめた追悼會を開いて敬弔の意を表した。併しながら如何に盛なる儀式を以つてしても、又幾回のしめやかな追悼會を以つてしても吾々一人一人の胸奥に潜む痛惜の情を充分に盡し得たと感ずることは出來まい。此等の會合に出た場合に吾は君の御両親を前にして彼の如き良き子を失はれた悲しみの如何に深いものであらうかを察したのであるが、それと共に吾々自ら彼の如き良き友を失つた恨みを禁じ得なかつたのである。今佐久間君がどうしてかくも多くの人々に親愛を受けたかを考へて見るにそれらは恐らく君の純眞にして淡泊なる性格が然らしめたのであらう。私の知る限りでは佐久間君は初

めて會つたときは遠慮勝ちであるが、親しくして居ると實に氣持の好人であつた。しかし自分の正しいと思ふことについては強く動き得る人であつた。私は軍人としての佐久間君を知らないけれども、君は部下を愛し又部下から親まれたであらう。又一旦戰場に臨めば温順な態度に引換へて非常に勇敢に進んだであらう。これだけのことは君を知るすべての人が推測し得るところであつて、それは君の陣中日記にもあらはれてゐる。この遺稿集は吾々にとつて亡友を偲ぶよすがとなるだけでなくして、頭の下がるやうな生きた教訓となるであらう。

(佐久間幸夫「陣中日記其他」昭和十四年八月五日)

阿久津桂一君を惜しむ

阿久津君が僅か二十六年にして逝かれたことは苟も君を知る者の痛惜に堪へざる所である。私の如き老年の者は、まづあのやうな好い令息を失はれた御両親に對して同情が湧くのであるが、君の死は決して阿久津家の不幸に止まるものでなくして、實に東京商科大学の不幸で

あり、又日本の學界の損失である。私は君の生前特に親しく交際したわけではないけれども、凡そ若い學者が何程その學問に對して眞劍であるかといふことは相對して十五分間話をすれば大抵わかるのである。専門のことはわからないでも學問研究の熱だけはわかると思ふ。會つて阿久津君が千ヶ瀧の別荘に來て居られた時に私を訪ねられたことがあつて、その時會計學についても話が出た。私にはその學問はよくわからないけれども、君が極めて眞面目に健實に緻密な考へ方をして居られるので、成程これこそ指導教授たる吉田博士を始め同學の先輩同輩が君に傾倒するのだといふことだけはよくわかつた。君をして是非ともその學問を大成させねばならぬと考へた。此の如く學才に秀で、又研究心の旺盛な人がその意志の百分の一をも達せずして、夭折するに至つては、全く落膽せざるを得ない。「實に惜しいことをした」といふのは、すべての友人の感じであらう。而してこの感じは吾々の生きてゐる限り忘れられないであらう。今その一週忌を前にして率直に衷心の悲しみを述べて君の英靈を弔ふ次第である。

(阿久津桂一君追悼録・昭和十四年十二月)

東京商大と金井先生

金井先生に私が面識を得たのは明治四十二年海外留學から歸つた時のことで、當時先生は社會政策學會の中心人物として會員多數の尊敬の的となつて居られた。同會の實際の仕事は故桑田博士、故矢作博士、故福田博士、それから山崎博士、高野博士等がやつて居られたが、この等の諸博士は金井先生よりずっと後輩であつたから、學會を代表するやうな役目は何時も先生が引受けて居られた。而して先生の高潔な開放的な人格が學會の俊豪を指導するに最も適してゐたやうであつた。社會政策學會は毎年十二月に諸學校の授業が終つた頃總會を開く例であつたが、その時は東京の官私立諸大學はもとより全國各地の大學その他の經濟學、政治學、法律學の教授等が數十人會合して時の問題を討論に、又公開講演を催して啓蒙的の働きを爲した。それでこの會合は我國で社會政策と云ふ思想の普及するに大功績を留めたのであるが、この本來の目的以外に從來別々に孤立してゐた諸學校の學者達に相識る機會を與へ學問研究の刺戟を與へる點において頗る効果があつたのである。總會において開會の辭を

述べるのは何時も金井先生であつて、懇談會の座談の中心になるのも先生であつた。それから同會は毎月例會を開くことになつてゐたので、その時は東京の諸大學の人々が集まつたが、あの頃同學の士は至つて少數であつたから、私共のやうな若輩でもストープを圍んで先生と會談する機會が多く教を受けることが出來た。それ故先生の小柄な顔や齒切れのよい言葉が自分に親しみあるものとして今日も私の記憶に残つてゐる。

かくの如く金井先生は私にとつては學校を卒業して外國へ留學してから後の先生であつたが、私の母校たる東京商大即ち當時の高等商業學校と先生との關係は私の在學した以前に出來てゐた。現在商大に保存されてある舊教員の履歷書の綴込の中には次の様な簡単な履歷書があつて、それは恐らく先生の自筆のものだらうと思ふ。この履歷では先生が高商の講師を勤められた年月はわからないけれども、佐野前々學長に伺つたところでは、それは明治二十五年頃、即ち先生の御歸朝直後のことで佐野博士はその講義をきかなかつたが、故關一博士（高商の教授となり後に大阪市長として令名を馳せた）は確かに金井先生に經濟原論の教を受けたし、又福田徳三博士も多分先生の弟子であつたらうとの事である。今日、關、福田兩氏が存命であつたら先生に就ての面白い追憶が聞かれ得ることと思ふが、惜しいことに兩氏

とも物故されたのである。福田博士は後に立派な學者になられてからも先生の知遇を受くること深くして、家庭の問題にまで先生のお世話になられたやうに聞いている。社會政策學會なども津村博士や故瀧本美夫氏、更に下つて私などが先生に親しくなつたのも先生と高商と

静岡縣平民 金 井 延

慶應元年二月一日遠江國
豊田郡三川村ニ於テ生ル

明治十四年七月	舊東京大學文學部ニ入り政治經濟學修業
同 十八年七月	同卒業文學士ノ稱號ヲ受ク
同 十九年七月	獨逸國へ留學
同 二十三年八月	英國へ轉學
同 二十三年十一月	歸朝
同 二十三年十一月	法科大學教授ニ任ゼラル

の古い關係が幾分助けたかも知れない。先生は今日迄生存されたとしてもまだ七十歳を超えたばかりの御年輩であるのに比較的早逝されたのは惜しいことである。

(河合榮治郎編「金井延の生涯と學績」中)

オルトン・ロックの背景

私は「オルトン・ロック」の古き愛讀者である。最初高谷君に本書の譯を勧めたものが私であつたといふ緣故に依つて氏に簡単な序文を呈するのは私に取つて最も愉快なる義務だと思ふ。

私は固より文學の素養なきものであるから、キングスレー及彼の傑作なる本書の文學上の價值を云々する資格はないけれども、本書が第十九世紀の英國産業史に關する重要な文獻の一つであることは確かに斷言し得る。而して本書の出版された頃の英國の産業界の狀態が、我國の現状と似通つて居る所から見れば、本書は我國の思想家及實際家が、當面問題の問題を攻究する爲には、最も貴重なる參考資料であると確信する。

本書の主題たるチャーターティスト運動に就ては、私は最近の諸研究に基いて、一篇の論文を「商學研究」に載せたが、此運動は實に英國に於ける最初の大規模なる勞働運動にして、又

世界に於ける階級闘争的運動の嚆矢である。抑々マルクス及びエンゲルス等が階級闘争といふ思想を獲たのはこのチャーティスト運動に就て觀察し、且思索した結果であつた。

一八三〇—一五〇年の英國は十九世紀頭頃の歐洲大戦争に勝つた意氣揚々たる英國であつた。産業革命の先導者として「世界の工場」として宇内の商權を一手に握つた所の英國であつた。一代にして巨萬の富を成した所の大實業家が續々輩出したのである。けれども又他の一方には幾百萬の貧民勞働者が簇生して、上水も下水もなく、塵芥の處分さへ出來ない、不潔極まる大都會の裏長屋を埋めた。富者は需要供給の經濟論を神聖な教理の如くに信奉する獨力奮闘の成功者であつた。貧者は多く無識無分別で唯貧苦に逐はれ、不平に滿つる所の不秩序なる群衆であつた。彼等の社會運動は好景氣の時にも粗暴であつたが、不景氣の時には絶望的となり一層危険性を帯びた。後年保守黨の總理となつて宰相の印綬を帯びた所のデイスレリ―は其小説「シビル」の一節において、「英國は今や相互に諒解する能はざることを猶敷帯人と寒帯人の如き二個の國民―富英國と貧英國とに分裂した」といつた。チャーティスト運動は實に此時代の中でも、不景氣と凶作の最も長く續いた一八三九年から四八年に至る約十年の間、英國の朝野を騒がしたのである。チャーティストは普通選舉權を求むと號したけれど

も、勿論直接行動を排斥して議會政治を主張した譯でない。寧ろ直接行動に依つて政權を握らんとする政治革命運動であつた。彼等は屢々暴動を起し、總同盟罷工を企て、掠奪放火を爲し、軍隊警察と衝突した。エンゲルスは「一八四四年に於ける英國勞働階級の狀態」と題する書中に、革命は將に十年の間に起らんとす、之を阻止せんには時既に遅れたりと豫言して居る。

此時天下の形勢容易ならざるを看取して慨然として立つたものは、思想家にカーライル及ミルあり、貴族にシャフツベリー伯あり、實業家にコプデン、ブライトの徒があつた。各其立場を異にし、意見を異にして居るけれども、熱誠を以て救國濟民の業を成さんとする意氣に至つては皆一様であつた。其中に宗教界を代表するものは誰であつたかといへば、是即ちフレデリック・モリス、チャールス・キングスレー等所謂基督教社會主義者の一派であつた。彼等謂へらく、今や勞働者は絶望の淵に瀕して、此世に神も佛もないと思ひ込むまでに墮落してゐる。基督は「汝の隣を愛することは汝自らを愛する如くせよ」というて居つたのに、何事ぞ今の世は「腕の世の中、金の世の中」で自由競争を信じ、優勝劣敗を信じて居る。宗教家は「分を守れ」とか、「足るを知れ」とか、上流階級にのみ都合の好い、月並の道徳を

説く時でない。宜しく基督の教へた所に従つて、今の社會主義を基督教化すべきであると。そこで彼等は格式嚴重なる英國教會の僧籍にありながら、自らクリスチャン・ソシアリストと稱して、労働者の間に布教を始めた。勿論彼等は教會と社會主義者と兩方面に敵を受けたけれども、正を履んで怖れざるものは終に勝つ。今日英國の諸教會が社會運動の重大な要素となり、又彼の労働運動に反宗教的色彩なきは、實に彼等の偉大なる功績である。

キングスレーは大學生たりし時代に、好んでカーライルを読み、深く其感化を受けたと稱せられる。「オルトン・ロック」の中にも、カーライル風の社會貴族主義の思潮が充滿して居る。併しながら彼の貴族主義を決して貴族主義を以て終るものでない。況や不徹底な溫情主義とは全然類を異にしてゐる。蓋し基督教社會主義は基督の教義の中に社會主義を發見して居る。今の社會の缺陷は競争を主とし鬭争に走ることであるが、基督は協同を教へ勸めて居る。彼等が營利本位競争主義の企業に代ふるに、自治協同の生産組合を以てせんと試みたのは實に偶然でない。故に彼の説く所は一方に富者の社會的責任を喚起するも、決して労働者に慈善を施して之を奴隸化するを好まず。富者も貧者も人として神の恵に浴すべきであるとした。神の前には人は皆人にして苟も超人とか哲人とかのあるべき道理はない。彼が直ち

に全社會制度の革命を叫ばずして先づ人間の改造、人心の教育に着手したのも亦此宗教的基礎から出發した爲である。

古き愛讀の書「オルトン・ロック」の譯成ると聞いて喜びの餘り思はず長文に亘りたるは讀者及譯者に謝せねばならぬ。望むらくはこの書我國に於ても亦多數の讀者に感動を與へて眞劍な社會改造運動に向はしむること猶其原著の如くあらしめたきものである。

(高谷實太郎譯「愛と社會主義」序文・大正十一年二月)

日本及日本人

考ふることを好まざる國民

一

今日の政友會の前身たる自由黨は、明治十年の西南役直後に於て故板垣伯等が創立したもので、その仲間の中には、壯士風の人物も大分居つたが、又洋行歸りの立派な新知識も交つて居つたのである。就中、中江篤介氏の如きはフランス學者でもあり、同時に文才にも秀でた人で、兆民居士と號して大いに文名を馳せたのであるが、その晩年肺患に罹り、醫者から一年半の命であることをしも宣告さるるに至つてから、身を病床に養ひつゝ、當時の日本の情

態を種々考へ、且憂へて「一年有半」といふ有名な書物を著した。それは明治三十四年に於て書かれたものであるが、尙ほ今日に於てもわれわれを大いに啓發するところが尠くない。私の敬服惜く能はざる文句に次なるがある。「我邦人は利害に明にして理義に暗し。事に従ふことを好みて考ふることを好まず。夫れ唯考ふることを好まず、故に天下の最明白なる道理にして、之を放過して曾て怪しまず」云々。

二

如何にも日本人は歐米人に比して物事を考へるといふことが浅いやうに思はれる。殊に今日の所謂實業界にある人々に、その風が甚しいかに觀ぜられる。彼等は主義主張とか理想とかいふものを殆ど持ち合はさず、一概にさうしたものを、理窟だと蔑し排斥して了ふ。大正も十五年になる今日に及んでも、待合の奥座敷で重大な取引が進行し、酒間の談合で大切な用向きが果されるのは何のためか。結局、總ての談判なり、折衝なりが面倒になつて來た時には、「そんな野暮をいふな」といふ唯だの一言が條理を盡した千萬言にも勝つて人を納得させる力が今日でも實業界にも存在し、且通用するのであるらしい。これは決して實業界の

みではなく、政治界と同様であつて、或は一層甚しいものがあるかも知れぬ。物事を深く考へて、是非曲直に就ての確信を有するといふやうな人ならば、到底今日の實業界並に政治界に行はれつゝある苟合的態度は忍び得ない筈である。

實業之日本記者は私に向つて現代日本の悩みは何であるかに就て話を求められたのであるが、右の如く考ふることを好まないのみか、こつてこれを輕蔑する今日の人々には、或は深い悩みといふ程の悩みが起らないであらうかと思はれる。それだけ彼等は悩みを知らぬ幸福者だといはれよう。然しながらこれが爲に、人と人との相互の理解が甚しく害はれ、各種の争ひが起り、そして社會全體が不安と動搖の中に置かれる結果となつたのであるから、所謂心の悩みを知らぬといふことに、非常に大きな悩みの原因が藏されてゐるといはねばならぬ。

三

例へば近頃新聞紙上に問題視されつゝある怪寫眞事件の如きも、一體その事件の如何なる點がわれわれの考へねばならぬ問題であるかといふことを視てゐる人は頗る尠い。そもく司法部内に於て一部の重罪犯人を幾分優遇するといふことが、善いか、悪いか、これがわれ

われの根本問題なのである。然るに、政黨間の醜き鬭争は、その根本問題を置去りにして、唯だ當面大臣の責任に引つ掛けたらばつかりに、實際寫眞を採つた日附が前司法大臣の任期であるか、又は現司法大臣の就任以後であるかといふやうなツマラヌ事柄に力癪を入れてゐる有様である。

ところで、今日の政黨が斯の如き爲體であるが爲に、政治と實際生活とは非常に駆け離れて了つて、眞面目な人々には殆ど全く政治といふものに興味を持たぬやうになりつゝある。凡そ國民の中堅となるべき最も眞面目な分子が、一國の政治に興味を失つたならば、遂には如何に重大なる結果を生み、それが又如何に發展して行くかは懸念すべきであつて、識者は慥かにこれを憂へなければならぬ。茲に現代日本の大なる悩みが存在してゐると私は思ふ。

怪寫眞事件の如きは僅かに唯だその一例に過ぎない。私の觀察では如何なる事件についても、常に同じ缺點即ち政治が實際生活を離れて、無意義なる政争の爲の政争に陥つて居ることが見出され得る。さうしてこの情態を深く仔細に考ふれば、悩まざらんと欲しても悩まざるを得ないのである。かうした悩みとすべき事柄を一向悩みとしない人の多いのは、實に彼等が考ふることを好まないからである。

四

政治問題を離れて、産業界に於ける勞資の争ひを視てみても、勞働者は一概に外國の新思想を傳へるところの所謂思想家に引づられ、一方資本家はそれ等の思想家の問題としてゐるところを少しも考へてみようとはせず、依然として在來の主従觀を牢守して居るといふ有様である。一體に歐米に於ける社會主義者が編み出した理論に盲従するは元より考へが足らぬのであるが、又一概にそれを頭から對手にしないのも益々以て考ふることを好まざる人々と云はねばならぬ。斯くの如くにして、勞資双方、悩みを悩みとして深く考へないのが、私が視て以て現代日本の最大煩悶をなす所である。

勞資問題の如きは、我々が幾らこれを悩んでも却々解決の出來ない問題には相違ないが、然し乍ら、何人にも少くともこれを解決せんと努力すべき責任がある筈だ、又何人にも少くとも、これが爲に考ふべき義務がある筈だ。さうして、この勞資問題の解決に資せんとするには、先づ根本的に社會の組織なり、又人心の傾向なりを考慮するのが第一である。而もかうした場合に、例の「野暮を云ふな」とか、「理窟をこねるな」とかいふ月並的な、不眞面

目極まる態度がどれほど邪魔をするものであるかといふことを、純真にして且聰明なる青年諸君に考へて頂きたいのである。

(實業之日本・大正十五年十月)

日本インテリの弱味

東京在留の外國人某氏と私との對話。

某氏。私は滿洲事件の突發以來故郷への通信などに日本の立場を辯護してゐるが、故郷の友人等がこんな事を云つて來る。當時在外の日本紳士に向つて、「日本は九ヶ國條約や不戰條約や國際聯盟規約やの約束に背いて滿洲に事を起したのは不都合ではないか。大戰以來世界に出來かゝつて來た平和機關の發達を逆行させるではないか。」と問うて見るに、彼等は大部分之を認めるのである。日本人自ら國際道義に違反したことを認める位だから外國の輿論が反目的になるのは固より當然ではないかと。こんなことをいつて來るのだが貴君は、どう思ひますか。

私。貴國の人ならこのやうな場合に條約上の問題は兎に角として自國がかゝる態度に出なければならなくなつた事實を説明するでせうね。

某氏。さうですとも。一體日本人は滿洲開發の功勞者です。滿洲に資本と技術を持出して鐵道を布き、港灣を築き、鑛山を開いたのは日本人です。現在滿洲の特産物として歐洲各國迄盛に輸出されて居る大豆の如きも三井物産が始めて世界に紹介したのだからです。それにも拘らず支那政府が日本の經濟的發展を妨げ、日本の勢力を滿洲から放逐しようと企てたから日本人が怒り出したのでせう。その事を在外日本人は何故力説しないのですか。

私。それに私共は從來支那の改革について考へたことがあるが、どうも如何なる名案があつても、現状のやうに政府が群雄の間に分割されてゐて、しかも不安定極まる状態の下に於ては到底實現出來ない。例へば、貨幣制度の統一の如きがそれです。かくの如き改革も日支合作の滿洲國なら出來さうに思はれます。

某氏。そのやうな事實を在外の日本人は説明しないやうです。

私。或はさうかも知れませんが。日本人は外國語が下手だから説明不足になり易いのです。それに今の若い人達は日露戰爭以來滿洲の歴史などを案外知つてゐませんから、外國へ行つ

てみるとその國の新聞などの論調に化されてしまひます。彼等は抽象論が好きで、理論の筋さへ通つてゐればどんな説にでも一應は賛成してしまひます。

某氏。あの人達は日本へ歸つてからも同じ態度を取るでせうか。

私。それは個人的の問題で何ともいへませんが、歸國の後は流行の國粹派になるのも少くないでせう。

某氏。さうすると若い日本人の平和主義、國際主義は外國製といふ譯ですか。

私。いや若い人は比較的よいのです。年の進んだ人にその傾が強くはないかと思ひます。今の様に世界各國が口を揃へて自分の國を攻撃する場合には國際主義者も自由主義者も一束になつて外國に對抗するやうな氣分になる。それが青年時代に古い國粹主義の中に育つたもの程容易に早變りするやうです。私の知つてゐるクリスチャンで自分ながら不思議に氣持が變つて來るといつた人があります。

某氏。そのやうな例は私も聞いてゐます。つまりマイ・カンツリー・ライト・オア・ロングといふ氣持であれば何れの國にもあり勝ちです。現在日本の知識階級は、全體としての氣持になつて居ますか、ドイツのやうに。

私。ドイツはどうか知りませんが、日本の知識階級は、さ程に困つてはゐない。國粹主義に對しては随分批評的です。それは新聞などの上から想像されるのと違ひます。

某氏。話が元へ戻りますが日本の青年が抽象論だけで自分の態度をきめてしまふ傾があるといふ觀察は私もしてゐるのです。所謂危険思想などもそれから來るのではないでせうか。

私は日本の學生を教へてゐますが、彼等は何でも私のいふことを容易に受入れてよく覺えてくれますが、彼等自らそれを考へ直さうとしない。書物にかいてあることは理論の筋さへ通つてゐれば易々と受入れる。自分の實生活とつき合せて見るだけの勞を取らない。彼等の態度は全く受身であつて、色々の事を聽いて知つてゐるけれども、確かにつき留めたものがない。あの教育法といふか、學習法といふか、あれは危険ですね。

私。それが日本の教育上の根本問題だと私も思つてゐます。貴君がそれを公式に、マルキシズムと結付けて居られるのは面白いことです。

(文藝春秋・昭和八年五月)

一 英人の觀たる一九三六年の日本

今回の會議に際し各國から提出されたダタベイバーの中で私が最も大なる興味を以つて讀んだのはサー・フレデリック・ホワイトの書いた一篇——「一九三六年の太平洋に對する英國側の一觀察」——であつた。會議に出て見るとホワイト氏は來てゐなかつたけれども討論は概してこの一篇の論旨に沿うて戦はされたやうであつた。この論文は一見してかなり日本に不利な意見を立てたやうにも思はれるが、然しながらよく讀んで見れば他山の石として却却すて難いものがある。これ程率直に外國人の觀察をかき出したものは他に見なかつたので、少くとも極東及日本の現状を外人が如何に看取してゐるかを知らぬのに最もよい資料だと考へる。外國人から悪口をいはれるのは不愉快なもので、それをいはれたときは何とか強いことをいつて議論の片をつけるが、しかし後で考へ直せば相手のいふことも萬更荒唐無稽のことのみではない。この論文はロンドンの國際協會で數人の東洋通が意見を交換した結果ホワイト

ト氏に筆を執らせたといふことだから少くとも一部の有力な意見を代表してゐると考へても間違あるまい。こゝにその全文を譯出することは出來ないからその中の特に日本に關する部分の要點を紹介しておく。

×
ホワイト氏の論點は次の通りである。

近年における日本の膨脹には政治的軍事的經濟的の三の要素が働いてゐる。その中で經濟的要素が英國あたりでは主として論ぜられてゐるが、その重要性においては政治的及軍事的要素が經濟的要素以上のものである。こゝに政治的（原文にはダイナスチックといふ語をつかつてゐる）といふのは日本の一部には西洋風の政治思想たるデモクラシーや社會主義に反對して古來の帝王主義を尊しとなし日本自身及東亞においてこの傳統の思想を護ることを日本國民の使命なりとしてゐる。而して、その目的を達するために軍事的戰略的進出を必要とする。それが日本の大陸進出の指導的動機だと見る。

ホワイト氏の見るところでは日本國民の經濟上の必要は世界的通商によつてのみ滿されるのであつて、大陸進出はその適切なる解決策でないばかりでなく、却つて非常な不幸をもた

らすのであるが、彼の「指導的動機」なるものは一種の心理的乃至は神祕的なものであるから經濟上の常識を以つて判斷することは出来ない。しかもかやうなことは歴史上に例のあることだ。

かう考へて來ると日本の進出は何處で止まるかが全く分らなくなる。従つて東亞にインテレストを持つところの英、米、蘇との軍事的衝突が豫想されないこともない。ホワイト氏は現在何れの國も左様なことを切迫した問題として取扱つてゐないことをよく承知してゐるが少くとも論理的歸結はそこへ來るといふ。

しかし日本においてかやうな神祕的な動機が強く働いてゐるからといつて他國の政治家が戰爭を宿命的としてしまふべきではない。況んや日本にも有力なる分子があつて國民の經濟的需要をよく理解してゐる。

日本の經濟的必要に應ずるやうに外國はその政策を講じなければならぬ。日本人の移住を禁止したり、日本品に高率關稅や輸入割當を課したりしておきながら、日本の進出を止めるといふわけには行かない。ところで、かゝる政策を轉向させるには、現在の世界貿易の機構を立直さなければならぬ。結局、極東問題の解決は世界經濟の問題と分離することの出來な

いものだといふことになる。

ホワイト氏はかういつておきながら又日本の膨脹の動機が單純に經濟的でないことを注意してゐる。しかし最後には何といつても日本に取つて經濟上の發展の必要なることは疑を容れない事實であるから、その必要の滿される途が開ければ日本の政策も變化すべきことを信ずるといつてゐる。

×

日本國民が東洋征服の夢に浮かされてでもゐるかのやうなことをいつてゐるのは勿論とんでもない話で、それはつまり一種の黃禍論になつてしまふが、他の一面、日本の經濟的發展の必要を充分認めてゐるところは買はねばなるまい。しかし黃禍病は西洋人の腦裏には何時でも何處かに潜んでゐるので、こんな考へ方が宣傳されることは危険千萬である。それが惡意の宣傳になれば尙更のことだ。吾人は極力この新しき黃禍論を論破しなければならぬ。

それと共に國內でも考ふべきことが大いにあるのではないか。先づいつて輕率無責任な膨脹論などは戒しむべきものだらう。

(國際知識・昭和十一年十一月)

日本人の再認識

外人の眼に映じた躍進日本

自分の事は自分が最もよく知つてゐるとすれば一國の國力や國民性はその國民が最もよく知つてゐるはずである。けれども自分の顔は自分には見えないので、鏡にうつして見るがよいといふことも事實だ。國民の力も世界各國の人の眼にどううつるかを問うて見るのが、その問題に對する研究の一方便であるに相違ない。但し鏡にも凹凸があるから、そこにうつつたものが必ずしもそのまゝ眞の姿であるとはいへない。田舎の床屋の鏡にうつれば何人の顔でも怪奇なものとなる。外人の日本觀も亦かくの如しであつて、一概に信用は出来ない。ただ見る人に惡意がない限り客觀的な見方が出来るわけだ。いびつの鏡もいびつなりに面白いところがあるのだ。

二三年前のこと或米國新聞記者が外國人の眼に映じたる日本の姿を簡單にいつてのけた言葉がある。曰く明治の中頃まで日本人は單に *Great* 即ちめづらしい變り種子の人間と見え

た。然るに日露戰爭に至つて *Amazing* 驚くべき、感心すべき國民として現はれた。滿洲事件以後は *Presumptuous* なまいきな、僭越な奴であると。この批評は現在四十歳以下の人にはよく呑込めないかも知れないが、五十歳以上の人にはピンと来る。

外人の吾々に對する態度が國の發展に伴つて、次第に變つて、來たのである。しかして日本人の外人に對する態度もそれと平行して變つて來たことは申すまでもない。

x

日露戰爭以前のことを追想すると東京、横濱間又は大阪、神戸間で汽車の一等には西洋人が乗り、二等には支那人が乗り、日本人は三等ばかりにごたくと乗つてゐた。たまに一二等に乗るものがあつても片隅に小さく坐つてゐる状態であつた。あの頃私共は高等商業の學生であつて、居留地貿易の弊害を聞き商權恢復を論じたのだが、横濱の英字新聞 *Japan*・*Mail*の主筆は居留地貿易こそ寧ろ日本の貿易を發展せしむるために必要なものだといふことを學校へ來て堂々と演説するやうなこともあつた。日清戰爭でも日露戰爭でも日本が案外な大勝利となつたので、これはまんざら馬鹿にならない、東洋の小國民にしては *Amazing* たことになつて來たのである。

近年でも日本の國力に對する外人の評價は、決して過大になることはなく、何時も過小になつてゐるやうだ。この意味において、批評の鏡はいびつになつてゐるわけである。

×

日本人の側はどうであつたかといふと、昔から歐米が御師匠さんで、こちらは現状において彼に劣つてゐると認めざるを得ないけれども、勉強すれば必ず追着けると自信してゐた。私は明治三十九年頃英國に留學してゐた時に日本と印度の學生の懇親會に出て印度學生の無氣力なのに驚いたことがある。彼等には人種的劣等感がしみこんでゐるのでないかと思つた。その席に日本の高等工業の卒業生がゐる。我々東洋人は今では西洋の下にあるが間もなく彼等を凌駕するといふ頗る樂觀的な演説をやつたが、實際日本の留學生は英人の優越感に壓されるやうなことはなかつた。この工業學生は後に大紡績會社の技師長になつたのだが、この人達の努力が今の日本木綿工業の躍進に貢獻してゐることは確實である。要するに我々には劣等感といふものはなかつた。

×

留學生だつた吾々は外國の先生を尊敬はしたが、自分等もやがては先生と同等の實力を得

られると信じてゐた。而してそれが追々實現されるやうになつたから自信は益々固くなつて來たのである。勿論獨善的になつては困るが外人の過小評價に對して日本人が自己の實力を證明したことは歴史的事實である。

かくの如く日本人は自己の實力を事實の上に示したが、さて從來の日本人の自己判斷の態度が全部正しかつたかといふと、そこには多少の疑問がある。日本人は今まで西洋人に負けてはならぬ、是非彼等に追着いて更にこれを超越したいといふ一心で勉強して來たが自分の特殊性を反省する考へが足らなかつたのではないか。例へば外人からお前の國には電車があるか、飛行機があるかなどと問はれたときに、何でも西洋にあるものは日本にもあると答へ得ることに大きな興味を感じた。あまりその方に興味を持ち過ぎて、日本人の國民性の研究を後廻しにしてゐた嫌ひが十分ある。事實日本の留學生などは外國の日本研究者から日本の事を問はれて閉口するものが多くあつたのである。

曾て私は印度の某々大學教授と會談の際、彼等が日本の西洋化に對して疑問を抱いてゐることを發見した。端的にいへば、日本は一意専心西洋に倣つて西洋を凌がんとしてゐるが、果して、かの外來文化を消化し得るや、日本の爲すところは、猿真似ではないかといふので

あつた。

彼等は哲學者であつて、印度は英人に征服されても印度人の思想には西洋人の及び難いものがあると考へてゐるのである。少くとも東洋と西洋とは本來非常に異なつた文化を有つてゐるのだから、自分等は一概に西洋風を取り入るべきでないといふのである。吾々から見ると、これはあまりに退嬰的な考へ方であるが、しかし少くとも一つのヒントを與へるものと思ふ。

そこへ行くと西洋人の日本研究にも大いに取るべきところがある。彼等は最初から日本人をQueerなものとして取扱つてゐるので、吾々の特異性が研究の對象になる。通り一遍の旅行者ならば、先づ以てキモノの多彩なこと、ペイパー・ドアとタ、ミの外に家具のない簡易極まる住宅や、海草のスープと大根の漬物から成る朝飯などに一驚を喫し、やがて日本語は逆さに話し逆さに書き逆さに讀むのだと聞かされて益々驚く。

専門の研究者もこのあたりから問題を捕へるので、例へば、日本アジア協會の會報を見れば稻荷様や、佛像や、日本式玩具や、古代法などの研究を以て充たされてゐる。これは物好

きにやるのでなくして、この道によつてのみ、日本人の心を理解し得るとするのである。

勿論日本人といへども自分の特異性に盲目であつたわけではなく又さればこそ明治以來世界に類のない萬世一系の國體を誇り、武士道を讃へ、敬神崇祖を唱へてゐるのだ。けれども西洋の學問をするものは概して西洋も日本も同じ地盤と一應は見えておいて、その上で色々専門的研究をするのが従來の行き方になつてゐる。例へば政治經濟の歴史を學ぶ場合に西洋における發展段階の學說を採用して日本における發展を説明するといつた風であつて、彼我の差別を摘出する用意は十分であつたといへない。

しかしながらこの行き方ではどうしても説明し切れないものが大いに残るし、又その爲に思想上の矛盾と混亂を生じたことも確である。けれども日本ばかり見てゐる日本の特色がわかる道理はなく、西洋の個人主義を西洋の全體主義におきかへただけでも駄目だらう。やはり西洋の學問をした人が本腰になつて日本の特異性を研究する必要に迫られるのである。かかる場合に外國人の日本觀は捨ておくべからざる資料になるのである。

(朝日新聞・昭和十三年七月五、六日)

日本人の生活様式

吾々日本人が精神生活及物質生活の全體を通じて他に類の少い特異な様式を具へてゐることとは何人の目にも明かな事實であるに拘らず時としてはそれが全く忘れられてゐる。今から四十年前には、西洋のことはすべて目新しかつたので、西洋と日本は餘程ちがふといふ心持で西洋の事物を見てゐたが、追々研究して見ると、双方共通の點がわかつて來た。それがたゞめ東西の差異は表面に見えるほど大なるものでないといふ心持が不知不識の間に出來上つて、今では逆に日本の特異性を忘れるやうにまでなつた。例へば近頃學者達が中世には云々であつたが近世はかうかうだと説いてゐる。よく聞いて見ると、その所謂中世は西洋の中世であつて日本のことではない。恰も、日本の歴史は幕末で切れてしまつて、明治史は西洋の十六世紀あたりに續いてゐると前提したかの如くである。つまり日本も西洋と同じ歴史的地盤にあるものと一應は想定しても見ても差支ないといふのが歐洲大戰以後の考方であつたと思ふ。

數年前私が或雜誌に日本に小工業の多いのは日本國民經濟の一つの特異性と見るべきであつて、小工業が消滅するやうなことは近き將來には考へられないといふ意見をかいたときに、忽ち若い學者の猛烈な反對を受けた。資本主義の壓力の前に小工業が苦悶してゐるのを見ないかといつたやうな攻撃論であつたと思ふ。

私といへども世界の大勢を見ないわけではないけれども、この問題については、日本の特異性が大なる影響を持つと考へてゐるのである。

毎朝東京驛から數萬の男女のサラリーマンが吐き出される。その人々は巨大な近世式のビルディングに入つて電報を見たりタイプを打つたりしてゐる。丸の内は資本主義の本據であること、恰もロンバード・ストリートやウォール・ストリートの如くである。しかしながら彼等が一日の仕事を終つて自宅へ歸つた後の生活を見ると西洋のサラリーマンとは非常にちがふ。衣食住一切が小商業や小工業の手を借りなければならぬやうに出來てゐる。しかもそれは、父祖傳來の生活様式が然らしめるのだから中々容易に變化しないだらう。大工、左官、疊屋、指物屋、紺屋、米屋、豆腐屋、酒屋、菓子屋など日本人の生活になくてならないものだ。森永のキャラメルが駄菓子に代つたり、龜甲萬の醬油工場が機械化されたのは事實だけ

れども、萬事がその流義になるのは前途遼遠である。西洋の婦人服は服地は大量生産で裁方に流行があるのだが、日本の婦人は服地そのものに織模様や染模様の斬新なものを要求する。だから日本服が廢止されざる限り織屋は大量生産になれない。

この事を數年間日本に在住した或外國人に話したところ、自分等の見方は日本の學者のそれと大いにちがつて、日本と西洋との間には歴史的の距離よりも地理的の距離の大なることを強く感じてゐるといはれた。蓋し日本と西洋とは同じ歴史の道筋を進行してゐる。甲が乙よりも幾十年かおくれれてゐるだけの差があると見るのは誤りであつて、國民性の差異が非常に著しいといふのである。これは、彼氏一人の觀察でなくして、多數外人の一致するところだ。彼等には共通性よりも特異性が際立つて眼にうつるらしい。

その後爲替安に乗じて日本商品が海外市場へ、進出したとき、歐洲で日本のソシアル・ダビング論がやかましくなつた。英國の某雜誌には日本の輸出景氣にかゝはらず貸銀統計の數字は少しも身らないといふ記事を出した。これでは日本の勞働階級は困つてゐると思つたのであらう。しかしこれは大なる見當ちがひであつて、こちらでは生計費は一向高くならなかつた。爲替が下つたから輸入品は忽ち高くなり、輸出品も値がよくなつたけれども、米と

魚は國內で出來て國內で食つてしまふのだから爲替に關係はない。日本勞働者としては米と魚と家賃が騰らなければ生活上に痛痒を感じないのである。爲替安で生計費が高くなるのはパン粉や肉類を常食とする國々のことであつて、特異な生活様式をもつた日本の事情はちがふのだ。この事を前記の友人に話したら彼は全く同感であつて、早速それを故國へ通信した。私も同じことを英文で發表した。

それから太平洋會議で日本人の生活程度が問題になつて、彼我の生活程度を比較する方法はないからといふ質問が出た。しかし生活様式の異なるものをつかまへて甲が高いとか乙が低いとか判断することは出來ない。様式がちがふといつてもヨーロッパとアメリカ位の差なら何とかなるけれども、日本のやうな特異性をもつた國では比較は出來ないのである。

西洋人は日本で米を常食としてゐることを聞いてインドやビルマを聯想し、日本の生活程度はライス・スタンダードだから低いと考へる。けれどもそのライスは日本の普通のライスでなくして日本米といふ特殊の米である。

日本人の嗜好では南京米は米以外の穀物と感ぜられる位で、市場の價格からいつても段がちがふ。

日本米を外國へ出せば左程珍重されないけれども、日本ではそれが非常に高く評價される。普通の日本人は日本米の飯がパン以上の食物と思つてゐるのだ。

化學的に分析して見れば日本米もまたたゞの澱粉である。それを高く評價して食べてゐるとしたらどうして日本人の生活は安いかといふ反問が生じる。

この反問に答へるものは味噌と豆腐、つまり大豆が安いといふことだ。

大豆が植物性の蛋白と脂肪を供給してゐるのである。

先頃の國勢グラフに矢野恒太氏がこの點を詳しく論じられたが、その結論として日本人の生活費が安い理由は米を常食とするからではない。寧ろ日本米を食べてゐるにかゝらず、それと共に大豆を食べるからだといつてゐる。

今日長期戦争になつても、左程日常生活に困らないのは生活様式の特異性に基因するところ少くない。

米と魚は一志二片に關係なしに買へるのである。

しかし特異性は何時も日本に幸すると定まつてはゐないので、禍になることもある。

實は日本人が日本米に執着するために過去には随分困つたのである。

所謂米價問題は全くそのために惹起された。

朝鮮臺灣で日本米の栽培が成功しなかつたらあの問題にはまだまだ悩まされたであらう。

話が物質生活の問題で終つたけれども、精神的にも似たことがあると思ふ。

(文藝春秋・昭和十三年十月)

外人の見たる日本の近狀

曾て名古屋高商の教師であつて、今はリバプール大學の經濟學教授であるジ・シー・アレンといふ人が一昨年夏再び來朝して數箇月滞在した。その間に自分も度々會談して相互に益するところがあつた。最近この人の日本の日本に關する著書が出たといふので取寄せて讀んで見た。それは要するに最近十年位の日本の政治的經濟的變動を公平に大觀したものであるが、現在の事變突發の直前の形勢を大體次のやうに記してゐる。

一九三七年の初めに平和の希望が一時現はれた。軍事費の増大を賄ふための公債發行はい

ンフレションの危険を伴ふといふので、財界に日支親善の空氣が起り、又外相佐藤氏は日支國交の調整に乗出さんとした。しかし一九三一年に比すれば支那に對し妥協的意見を有するものは餘程少くなつてゐた。國際聯盟の無力、歐洲の形勢の混沌たることも平和論に不利であつたが、それよりも大切なことは日本の實業界が外國の日本輸出に對する抑制策に困つてゐたことである。彼等の説によれば日本の人口が激増するから輸出産業が發展しなければこの國の生活向上は出來ない。然るに世界の強國は吾々に對して門戸を閉しながら、條約の尊重を説教してゐるのである。現在ではまだ日本の輸出が全然阻止されたわけではないけれども、將來は危険である。西洋の強國が各その帝國を鎖すなら日本も自ら大帝國を建てねばならぬといふ積極論に左袒せざるを得ない。彼等の中でも冷靜な人々は日滿支ブロックに餘り身を入れ過ぎて、廣い世界の貿易を失ふの不得策なることを知つてゐた。しかし普通の日本人にはかやうな説は聽かれなかつた。オッタワ協定などあまり大袈裟に傳へられたに相違ないけれども、兎も角それが日本の實業界を脅かし、自由主義の希望を捨てしめたことは事實である。自由通商協會の諸賢には多少の興味を持たれるかと思つて一寸かきつけて見た。

(自由通商・昭和十三年十二月)

日清戦争と日支事變

一八九四年日清戦争の起る前には日本人の支那に對する態度は明かに小國の大國に對する態度であつた。朝鮮では支那の勢力が強くて日本人は思ふやうに働けなかつたし、日本の開港場でも支那人は優勢であつた。

支那は定遠鎮遠といふ二艘の立派な戦闘艦を派遣して日本を威嚇した。そこで、日本には「恨み重なるチャン／＼坊主」といふ唄が行はれ、切齒扼腕慷慨悲憤などの文字が中學生の作文にも用ひられた。今考へると夢のやうだがこれは確かな事實である。

然るに日清戦争は我國の全勝に終つたのでそれから流行唄の調子が變つて「支那のチャンチャン坊主は餘程弱いもの」となり大衆はすっかり支那を輕蔑する事になつた。其時に支那の側ではどう感じたか知らないが、恐らく日本も中々馬鹿にならぬ位には思つたのであらう。兎に角あちらでは日本の教官を招いたり日本へ留學生を多數に送つたりするやうになつた。

その頃、神田の下宿で屢々支那留學生に會つたが、こちらは子供のやうな優越感をもち、

あちらが大人のやうに見えたこともあつた。支那人は、戦敗の恨みを抱かずして日本に學ぶだけの雅量をもつやうであつた。それで日露戦争の當時は日支關係は大體良好であつた。その状態と比較して、此度の事變前後はどうであるか。支那の知識階級は戦前には日本の「侵略」を憤慨してゐた。學生層は十年間の排日教育によつて猛烈な反抗心を養はれてゐた。支那の青年將校は勿論さうであつたらう。それが事變勃發の一原因である。だから事變中に抗日意識の旺盛な譯である。

ところで、日本の側はどうかといふと、必死の戦争をしてゐながらも、「チャンク坊主」を輕蔑して、快哉を叫ぶやうなことは全くない。大衆も在留支那人を迫害するやうな氣風は示さなかつた。學生層は尙更のことである。支那がやたらに手向つて來るので、止むなく一撃を加へたものの、元來、支那人に對して、反感があるわけではなく、日支兩民族提携の必要なる道理はよくわかつてゐる。

その程度において今は日本が大人になつて來たのである。今後抗日教育が終りを告げれば兩國の青年が協同的態度を取るやうになることは決して不可能でなからう。しかし左様な幸福な事態を作り出すには却々の努力を必要とすることも明かである「雨降つて地固まる」といふ氣持が出て來なければならぬのである。

(一橋新聞・昭和十四年六月十日)

人口問題に就て

國立人口問題研究所生る

國立人口問題研究所新設費十萬圓が來年度豫算に上つたことは、歡迎すべきニュースであつて、吾々にとつては十年來の要望が實現したことになるのだが、さて愈々出來ると聞けばまた心配のこともある。それは研究所へ種々雑多の問題が持込まれて、あぶはちとらずになることだ。室と机だけ立派になつて実績が擧らないことだ。そこでこれだけは國策の基調を定めるために是非調べておかねばならぬといふ最重要の事項を取上げて、それに全力を集中しなければなるまい。

x

愚考では我國の人口問題として最重要の事項は出生率低下の傾向と死亡率の甚だ高いことである。歐米諸國では近年出生率が極端に低下してしまつて、現在の人口を維持する望みもなくなつて來たから、何れも出生率の問題に注意を向けてゐるのであつて、現に結婚及び出産の奨励政策を實行し始めたところの伊、獨は申すまでもなく、英國でも調査だけは根本的にやりだす模様である。だから日本でも同様に子を産むことが唯一の問題であるかのやうに早呑み込みする人もある様と思ふ。けれども事實我國では西洋にないところの大問題があるので、それは死亡率であることを十分に認識してかかることが必要である。

出生率は低下の傾向ありと雖もまだく心配する程のことはない。死亡率は低下しながらも尙ほ西洋に比すれば非常に高いのである。日本國民の子孫繁昌を望むならば、産むこと以上死なさないことを考へよといはざるを得ない。

今から二十年位前までは、日本全國の出生も死亡も相並んで増加したが出生は死亡以上に速く増加したから、年々の人口増加數が上昇したのである。然るにその後は一方に出生の増加が鈍くなつたに拘らず、他方に死亡數が絶対に減少したから、兩者の差たる自然増加はどんどん上つて毎年百萬に達する状態である。かくの如き死亡の減少は、誠に喜ぶべきことだ

が、しかし、現在の死亡率は、尙千人に付二〇人であつて、英佛等の約一二に對し非常な遜色がある。

x

日本で毎年生れる子供の數は二百二十萬あるけれども、小學卒業する者は百四十萬しかない。更に徴兵検査を受ける男子の數は六十萬しかない。

乳幼児の死亡率、青年の死亡率が高くして、折角生れた子が満足に育たないのである。百人生れた子供があるとして、それが満一歳になる前に十三人は死んでしまふ。満六歳で學校へ行く様になるものは八十人に足らず、丁年に達するもの七十三人しか残らない。

どうしてかやうに多くの子供が死ぬのであるか。死因は何病であるか生活状態にどんな欠陥があつて發病するのか。肺病及花柳病は何程の害をなしてゐるか。都市と農村との間に如何なる差があるか。府縣別にしたら何れの地方が最も悪いのか。所得階級別にしたらどうか。外國の状態と比較したらどうか。西洋では、如何にしてこの問題を解決したか。我國の經驗は如何。これが國民の大問題であることは何人も否定し得ないだらう。國費多端の際に新設される國立研究所がこの問題さへも答へられないとしたら申譯はあるまい。しかしこれだけ

が完全にわかれば十萬圓は安いものだといひ得る。この他にも人口の重點は勿論あるので特に出生率低下の事實を明かにしなければならぬが、調査の範圍ばかり廣くなつて、中心を見失つてはならない。

(朝日新聞・昭和十三年十二月十五日)

人口増減と妊孕力

前世紀の初めマルサスは人口は無限に増加する力をもつて居るが、天然の生産力には限りがあるから、如何に社會の制度を改良しても貧乏はなくなると断定して、世論をさわがしたがその後數十年間に科學の進歩により天然の生産力は非常に増加した一方、人口の増殖力はやがて衰へて來て今では歐洲諸國皆人口の絶對的減少を心配するやうになつた。そこで天然力の事は別として、人口の側を考へて見ると増殖力減退の原因は生理學的に白人の妊孕力が弱くなつたのか、又は避妊法の普及による生るべきものが生れて來なくなつたのかといふ問題が起る。通説は避妊法の影響を重視してゐるが、都會生活の様式その他の原因を並べ

て生理學的にこれを説明せんとするものもある。イタリーの人口學者ジニといふ人は民族も亦個人と同じく老衰するものだとして生理的原因を強調してゐる。而して日本の人口が明治維新後に急に増殖したのは士民の階級撤廢により血液の交流が起つた結果ではないかといつてゐる。しかし日本の學者はこの説に對して賛否の論をしてゐないやうである。私の考へでは徳川時代の日本人が今の日本人に比して生理的に妊孕力に缺けてゐたとすべき證據は何もない。寧ろ昔は飢饉や傳染病などのためは死亡するものが多くあつた上に墮胎間引の盛んに行はれたことは明かなる史實である。その上乳幼児の死亡が今より遙かに多くあつたことも推定して間違ひないであらう。明治になつてから天然痘とコレラ等の傳染病の豫防が出来るやうになり、墮胎や間引は刑法によつて取締が出来、更に凶作も農事及土木の改良によつて少くなり、凶作があつても外國米、他國米の輸入によつて飢饉にはならないやうになつたのである。だから、子種が多くなつたのでなくして、子種を子供となし、子供を大人にするやうな條件が整つて來たのだと考へる。血液の交流によつて妊孕力が増大するといふ作用があるかないか、判断はつかないが、たとへ左様な變化がないとしたところで前記の如き條件があれば人口は増加するのであつて、これだけで明治時代の人口増加は充分説明し得る。以

上が私見のあらましであつて、これは外國にも發表するのではありませんが、本誌の讀者中醫學
上から御批評下さる方があれば大幸とするところであります。(實驗治療・昭和十四年五月)